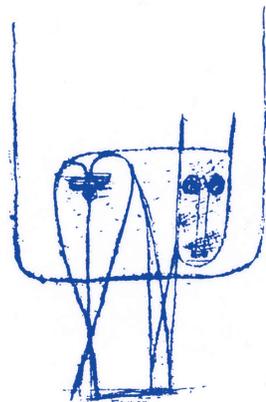

神奈川県立近代美術館

年2011報

ANNUAL REPORT



神奈川県立近代美術館

年2011報

ANNUAL REPORT

あいさつ

2011年度版の神奈川県立近代美術館年報を刊行いたします。

前年度より、判型をB4判からA4判へとすこし大きなものに変更しています。文字も画像もそれまで以上に情報として多く盛り込めるようになりました。内容に関してよりいっそうの充実を心がけるとともに、より読みやすく、より判りやすいレイアウトになるように工夫していますが、なにかお気づきの点をご指摘いただければ幸いです。

東日本大震災の発生した2011年は、歴史上、忘れられない年となりました。いまだに心身ともに私たちはその痛手を負っています。そのことについては当館の美術館活動に沿いながら別々書いておりますので、それをお読みいただけたらありがたく思います。

いわき市立美術館が、震災後、入館者数の急速な伸びを記録していることを、同館の佐々木吉晴館長の文章で知りました。そのことについて、佐々木さんは、福島で被災されたひとびとにとって「当たり前」に美術鑑賞を楽しんでいた本来の日常を取り戻したいと希求するそのあられ」と書いていました（「被災者どう向きあうか 復興へ何をなすべきか 非日常の中で続く模索」『美連協ニュース』2012年2月号、16ページ）。

第二次世界大戦後の混乱そして復興のさなかに誕生した当館もまたそのような「希求」によって生まれたものであることを、見逃してはならない重要な現代美術の発信地のひとつであるいわき市立美術館への尊敬の思いを新たにしながら、胸にもう一度刻みたいと思います。

最後になりましたが、日ごろより、当館の活動にご理解とご支援を頂いている関係各位に心より感謝の意を表します。

2013年3月

神奈川県立近代美術館
館長 水沢 勉

目次

2011年度 一年の回顧 [水沢勉]	5
展覧会活動	
葉山館	6
鎌倉館	15
鎌倉別館	19
2011年度展覧会 会期・観覧者数一覧	22
教育普及活動	
受講・参加プログラム(講演会・ギャラリートーク・学校連携プログラム等)	23
研修等受入れプログラム(実習・研修・団体観覧等)	27
美術図書室	28
美術館紹介・広報 掲載実績(展覧会広報を除く)	29
刊行物(展覧会図録を除く)	30
2011年度の教育普及活動 [是枝開]	32
作品蒐集管理活動	
購入・寄贈状況、寄託状況	33
新収蔵作品一覧	33
新収蔵作品図版	40
館外貸出作品一覧	42
修復報告	45
修復作品一覧	48
修復作品図版	49
調査研究活動	
研究・調査報告	50
一通の手紙から伝わる年齢差を越えた友情	
資料紹介: 佐野繁次郎宛金山康喜書簡 [橋秀文]	50
もうひとつの「演劇的自叙伝」と村山知義のセルフ・アーカイヴ [三本松倫代]	53
東日本大震災における文化財レスキュー活動に参加して [伊藤由美]	56
調査研究・執筆等の発表	58
外部資金の活用	58
講師派遣・外部委員等就任	58
運営・管理報告	
概況、収支・支出の状況	60
関係法規	61
組織、職員一覧	63

水沢 勉

2011年は、おそらく、百年後も忘れられることのない年となるでしょう。同年の3月11日に東日本を襲った大震災は、その直後に、福島第一原発を巻き込み、深刻な被害を国土とわたしたちの心にもたらしました。この年報を刊行する時点に至ってもなお被災後の事態はめざましいままには好転していません。

美術館もまたこうした予想外の出来事に影響を受けないわけにはいきませんでした。地震そのものは、前年度末に発生しましたが、その波紋は私たちの美術館も含めてつぎつぎに広がっていったのです。

2011年4月1日付けで館長に就任した私が、最初にしなければならなかった仕事は、予定していた巡回展「ジョルジョ・モランディ展 モランディとの対話 デ・キリコからフォンターナへ」の開催中止による各方面との調整でした。葉山館の夏の時期に開催を予定していましたので、所蔵品による展覧会として年度末に本来予定していた「開館60周年 現代美術の展開 ザ・ベスト・コレクション」を、時期を早めて急遽開催いたしました。そして、その分の企画展を年度末に別に用意しなければならず、翌年度の巡回展「すべての僕が沸騰する 村山知義の宇宙」展を二ヶ月ほど早めて葉山館を第一会場として開催することにいたしました。一方的で、かなり無理な調整を各方面にお願いしたにもかかわらず、幸いにも大方の理解を得ることができ、展覧会をひとつ中止するだけで展覧会全体を組み換えることができました。物理的に大きな打撃を蒙った美術館を思えば、比較的軽度のものであったといえるでしょう。

東日本大震災後に美術館に届いたメールのひとつは、ナイジェリアのンスカ在住の彫刻家エル・アナツイ氏からのものでした。地震の発生が「エル・アナツイのアフリカ」展の会期中であり、展示作品の一部が転倒しましたが、幸いまったく損傷はありませんでした。その旨をメールでアナツイ氏に連絡すると「ニュースを知ってこころを傷めていた。君たちが無事ならばよいのです。」という簡潔でありながら、心温まる返事もどつてきました。そして、前述の「現代美術の展開」展では、1980年代初め以来、葉山に定期的に来訪され、滞在される彫刻家アブラハム・デイヴィッド・クリスチャン氏が、急なお願いにもかかわらず全面的に協力をしてくださり、葉山館の第三展示室の一部を使って「全地 Alle Erde」と題して同氏の作品の特別展示が可能になりました。クリスチャン作品のまとまった展示は、日本の公立美術館では初めてのものとなりました。また、同展と連動させた県立機関活用講座では、湯浅譲二氏、一柳慧氏、鈴木昭男氏、佐藤聡明氏、佐近田展康氏が、これも急な話にもかかわらず講演を快諾してくださったことも感謝に堪えません。美術館ではなかなか直接肉声に触れる機会の少ない音楽家たちが、大きく戦後文化の展開に寄与されたことを貴重なエピソードを交えながら拝聴し実感できる連続講演となりました。

また、クリスチャン氏の泥を使用した彫刻は、免震台を使用して展示しましたが、「すべて(All)」が「大地(Erde)」に還ることを暗示する意図的に脆弱な作品でした。ふたたび地震が襲ってくれば脆くも壊れてしまったかもしれません。作者自身、それを受け入れての展示なのですが、それが逆に、いつのまにか地震が起らないことを祈る聖なる空間へと会場の滲える雰囲気を変化してしまったことがたいへん印象的でした。

放射能の影響が懸念され、国外からの貸し出しが一部、キャンセルになりました。「モホイ=ナジ/イン・モーション」展に際してニューヨーク近代美術館からのモホイ=ナジを代表する傑作2点がやってこなかったことはたいへん残念です。とはいえ、ハーバード大学附属ブッシュ=ライジンガー美術館が、日本側が受け取りに来れば貸し出し可能という寛大な判断を下してくれたおかげで、同館所蔵の《ライト・スペース・モデュレータ》をなんとか展示することができました。同作品の高さ2メートル近いクレートが会場に搬入されたとき、展示作業中のスタッフ全員から期せずして拍手が巻き起こったことは忘れがたい思い出です。幸い「ベン・シャーン クロス・

メディア・アーティスト」展ではアメリカからの作品をほぼ借り出し並べることができました。最終の第4会場の福島県立美術館へのそれらの巡回は諦めなければならなかったことは残念でした。第五福竜丸の被爆という事件をモチーフに勇気をもって取り上げたベン・シャーン自身の社会参加的態度を思うとき、複雑な気持ちになりますが、巡回展会場に多くの来館者があり、ベン・シャーンの預言者のなまざしをこうした時期であったからこそより深くまざまざと広く感じ取っていただけたと思います。

また、2011年は、鎌倉館の開館60周年という記念すべき年であり、鎌倉館・鎌倉別館・葉山館それぞれで選りすぐった所蔵品を展示いたしました。また、鎌倉館を会場とした記念展として「シャルロット・ペリアンと日本」展を開催いたしました。鎌倉館の設計者・坂倉準三とペリアンの友情を想起するとき、坂倉がデザインした空間のなかで同展を味わうことは特別な体験であったと思います。同展は内外の評価も高く、フランスのサン・テティエンヌ市立近代美術館への巡回も決定しています。こうした国際的な運動は、まさしくペリアンが体現したモダニズムの精神にふさわしいことであると思います。また、広報誌『たいせつな風景』第16・17合併号も、60周年を記念して、鎌倉館でのいくつかの展覧会を関係者に原稿を依頼して特集し刊行いたしました。

ペリアン、ベン・シャーン、村山知義に関しては、それぞれ国際シンポジウムが開催され、国内外の研究者によって活発に情報や意見が交換されました。また、ベン・シャーンが「音楽」に捧げた作品に因み、会場ではコンサートが開かれ、村山知義を特徴づける「身体表現」に関連して、連続パフォーマンス形式による現代版の「新・劇場の三科 1925→2012」が、それぞれ葉山館会場で催されました。

日本近現代の画家としては川合玉堂を葉山館で、藤牧義夫を鎌倉館で、現代銅版画の名手・二見彰一を鎌倉別館で紹介することができました。多摩美術大学映像演劇学科研究室の協力を得て、藤牧義夫の絵巻隅田川を含む白描絵巻の全巻を完全に高精細デジタル化し、会場でプロジェクションできたことも画期的であったと思います。

所蔵品に関しては、長いこと念願であった村山知義の代表作《美しき少女等に捧ぐ》を購入することができ、また、砂澤ビッキ、小野元衛、クリスチャンの作品も購入によってコレクションに加わりました。

修復に関しては、アルゼンチンの重要な近代画家のひとり、ベニート・キンセラ・マルティンの1930年代の重要油彩作品《溶鉱炉》の汚れや浮き上がりが修理され、すっかり面目を改め、別館エントランスの前に設置された柳原義達の《犬の唄》についても表面のムラがなくなり、落ち着いた統一性のあるものに生まれ変わりました。

また、東日本大震災後の文化財レスキュー活動に当館スタッフが参加し、被災地の美術品の救出に貢献しています。

本年度も多くの寄贈を受けておりますが、北川原京子氏からの藤田嗣治の油彩画《横たわる裸婦》の寄贈申し入れは、とりわけうれしい出来事でした。1920年代のパリの画壇で一躍寵児となった藤田の白の絵肌をみごとに伝える傑作であり、当館のコレクションに花を添えてくれたと思っています。

最後になりましたが、日頃より、当館の活動へのご理解とご支援を得ている関係各位に心より謝意を表します。

展覧会活動

665

視覚の実験室 モホイ=ナジ/イン・モーション
MOHOLY-NAGY IN MOTION

構造主義の写真家、バウハウスの教師、メディア・アートの先駆者として高く評価されているモホイ=ナジ・ラーズロー(1895-1946)の全貌を紹介する日本初の個展。遺族所蔵のコレクションを中心に、約300点の作品・資料を展示する。

主催：神奈川県立近代美術館
後援：ハンガリー共和国大使館、日本建築学会、日本デザイン学会
協賛：株式会社資生堂、郵便事業株式会社、ミサワホーム
協力：モホイ=ナジ財団、日本貨物空港株式会社
助成：公益財団法人野村財団
企画協力：株式会社アールアンテル
会期：2011年4月16日(土)～7月10日(日)
休館日：月曜日(ただし5月2日は開館)
開催日数：75日
出品総点数：289点(展示替有)
総観覧者数：9,828人
担当学芸員：水沢勉、三本松倫代、西澤晴美

関連企画

- 講演会 4月16日(土)「創造は、国境を越えて—モホイ=ナジの芸術」井口壽乃(埼玉大学教授)
- ワークショップ 5月29日(日)「影をつかまえる—フォトグラム・ワークショップ」浅見俊哉(アーティスト)
- コンサート 6月25日(土)「EIN ZEITSPIEL 時の戯れ」クリストフ・シャルル(Sound)、渡辺俊介(Video)
- パフォーマンス 7月2日(土)「ARTIFICIAL SATELLITE 予感された月」白井剛(振付家/ダンサー)
- ゲスト・ギャラリートーク
6月26日(日) 前田富士男(慶応義塾大学名誉教授) 聞き手：三本松倫代(担当学芸員)
7月3日(日) 金子隆一(東京都写真美術館専門調査員) 聞き手：水沢勉(当館館長)
7月9日(土) 佐藤忠男(映画評論家/日本映画大学学長)
- ギャラリートーク 4月29日(金・祝)、5月5日(木・祝)、6月18日(土)
- 先生のための特別鑑賞の時間 6月26日(日)

関連記事

▼展評・解説など：
大西若人『『モホイ=ナジ/イン・モーション』展 素朴でユーモラスな側面も』『朝日新聞』2011年6月1日夕刊、3面
三田晴夫「アートの風 モホイ=ナジ展 芸術の現代性を探った軌跡」『毎日新聞』2011年6月8日夕刊、4面
前田恭二「美術『モホイ=ナジ/イン・モーション』展 無限定な興行感を貫く」『読売新聞』2011年6月9日、15面
住友文彦「ART『視覚の実験室 モホイ=ナジ/イン・モーション』展 見る者との関係性への意識」『中央公論』2011年4月10日、p.185
三本松倫代「イン・モーション—動き続ける実験精神」『版画芸術』2011年6月号、p.109
川上典李「ART今振り返る、新しい視覚の意義。『視覚の実験室 モホイ=ナジ/イン・モーション』」『PEN』第15巻11号NO.292、2011年6月1日、p.119
光田由里・ホンマタカシ「連載対談 今日の写真2011『モホイ=ナジと日本の芸術写真』、『アサヒカメラ』1016号、2011年7月、pp.177-181
沢山遼「遍在する支持体『モホイ=ナジ/イン・モーション』」『美術手帖』955号、2011年8月、pp.178-179
暮沢剛巳「視覚の実験室 モホイ=ナジ/イン・モーション」『AXIS』153号、2011年10月、p.62

▼展覧会紹介：3紙/13誌(21回)

▼情報掲載：4紙/13誌(61回)

カタログ

25.8×19.2cm、307ページ、販売価格3,200円

多色466図、単色1図、単色挿図50図

監修：井口壽乃

執筆：ハトゥラ・モホイ=ナジ、バシュート・クリスティナ、オリヴァー・A.I.ポーター、アンドレアス・ハウス、井口壽乃、水沢勉、三本松倫代、池田祐子、牧口千夏、林寿美

翻訳：ロバート・リード、林寿美、ガーボル・ジュジャ、井口壽乃、池田祐子、深川雅文、

三本松倫代、牧口千夏、フィンバー・モリン、森純子、ボリー・バートン

編集：水沢勉、三本松倫代、池田祐子、牧口千夏、林寿美

編集協力：池澤茉莉、鈴木祐子

デザイン：矢萩喜從郎

制作：リーヴル

印刷：凸版印刷株式会社

発行：株式会社アールアンテル

ごあいさつ/Fore word、謝辞/Acknowledgements、目次/Contents

回想録 シカゴのモホイ=ナジ(ハトゥラ・モホイ=ナジ)

I ブダペスト 1917-1919: 芸術家への道

II ベルリン 1920-1922: ダダから構造主義へ

要素主義芸術宣言(ラウール・ハウスマン、ハンス・アルプ、イワン・ブーニ、モホイ=ナジ・ラースロー)[再録]

力の動的-構成的システム(モホイ=ナジ・ラースロー、ケメーニ・アルフレード)[再録]

宣言(カーティ・エルネー、ケメーニ・アルフレード、モホイ=ナジ・ラースロー、ペーリ・ラースロー)[再録]

生産-再生産(モホイ=ナジ・ラースロー)[再録]

光-造形表現としてのメディア(モホイ=ナジ・ラースロー)[再録]

電気舞台のための光の小道具(モホイ=ナジ・ラースロー)[再録]

III ワイマール-デッサウ 1923-1928: 視覚の実験

IV ベルリン-ロンドン 1928-1937: 舞台美術、広告デザイン、写真、映画

V シカゴ 1937-1946: アメリカに渡ったモダンアートの思想

写真は光の造形である(モホイ=ナジ・ラースロー)

画家モホイ=ナジ・ラースローの誕生(バシュート・クリスティナ)

モホイ=ナジ・ラースローと生命中心主義(バイオセントリズム)(オリヴァー・A. I. ボーター)

視ることのダイナミズム-モホイ=ナジ・ラースローの映画と写真(アンドレアス・ハウス)

創造は、国境を越えて-モホイ=ナジと中欧のアバンギャルド(井口壽乃)

光をたぐる手-モホイ=ナジと日本の出会い 最初期の事例から(水沢勉)

年譜・キーワード(編: 林寿美) [キーワードは、監修者および各美術館の担当学芸員が分担執筆]

主要参考文献/Selected Bibliography

Reminiscences of Moholy-Nagy In Chicago (Hattula Moholy-Nagy)

László Moholy-Nagy, The Painter: The Formative Years (Passuth Krisztina)

László Moholy-Nagy And Biocentrism (Oliver A.I. Botar)

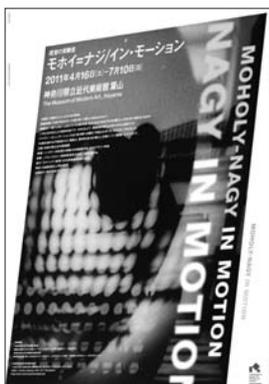
Dynamism of Seeing-László Moholy-Nagy's Film and Photo Work (Andreas Haus)

Beyond Borders: Moholy-Nagy and Central European Avant-Garde (Iguchi Toshino)

The Hand that Reaches for The Light: Moholy-Nagy's First Encounters With Japan (Mizusawa Tsutomu)

Moholy-Nagy in Motion (Iguchi Toshino)

出品リスト/List of Works



ポスター



カタログ表紙



会場風景

担当学芸員コメント

展覧会開始の約一ヶ月前に東日本大震災が発生し、海外所蔵家からの貸出許可取下げ、輸送方法や入国地の変更、図録制作の進行や会場設営等の材料確保などに様々な調整と変更を余儀なくされた。しかし、制作に関する協力機関や巡回各館、そしてなにより、作品や資料の出品について変わらずにご許可いただいた所蔵家・所蔵機関のおかげで予定どおりの開催が可能となったことに深く感謝している。また、モホイ=ナジの世界を現代に再解釈する試みとして、展示室内でのダンスや音楽演奏、レクチャーなどのイベントを行い、多様な鑑賞者にもアピールする内容になったことと思う。(三本松倫代)

666

開館60周年 現代美術の展開 ザ・ベスト・コレクション/特別展示 アブラハム・デイヴィッド・クリスチャン 全地
The Best Collection : Contemporary Art / Special Corner, Abraham David Christian Alle Erde

当館所蔵のコレクションの中から1950年代以降に制作された現代美術の中堅から若手の作家に至るまで、絵画や彫刻の多彩な作品を展示した。また、特別展示として、第3展示室(小)にアブラハム・デイヴィッド・クリスチャンの作品を展示した。

主催：神奈川県立近代美術館
会期：2011年7月23日(土)～10月2日(日)
休館日：月曜日(ただし9月19日は開館)
開催日数：63日
出品総点数：106点
総観覧者数：7,106人
担当学芸員：是枝開、靱山昌夫

関連企画

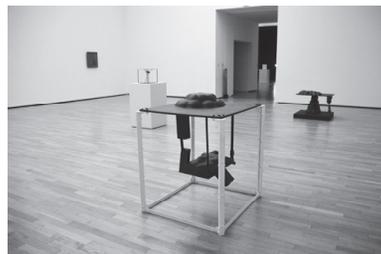
- 1) 県立機関活用講座 「現代音楽の展開：1951-2011」(全5回)
第1回 8月6日(土)「実験工房と音楽」湯浅譲二(作曲家)
第2回 8月20日(土)「1960年代の音楽と現在」柳慧(作曲家/ピアニスト)
第3回 9月3日(土)「サウンドによるパフォーマンスとは？」鈴木昭男(サウンド・アーティスト)
第4回 9月17日(土)「啓かれた耳 伝統と現代」佐藤聰明(作曲家)
第5回 10月1日(土)「メディアアートと音楽の新たな地平」佐近田展康(音楽家/メディアアーティスト/メディア論研究者)
- 2) ワークショップ「あさつての美術館」 8月7日(日)、9月4日(日)、10月2日(日)
- 3) アーティストトーク 8月27日(土) アブラハム・デイヴィッド・クリスチャン(アーティスト)
- 4) 「わくわくゆったりセット」配布 7月23日(土)～8月31日(水)
- 5) 「開館60周年 夏の美術館スタンプラリー」 7月23日(土)～8月31日(水)
- 6) ギャラリートーク 7月29日(金)、8月5日(金)
- 7) 先生のための特別鑑賞の時間 8月13日(土)

関連記事

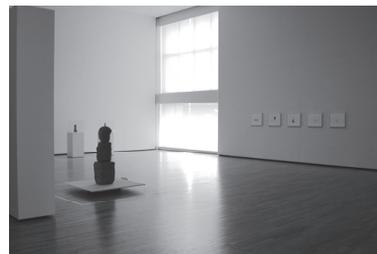
- ▼展覧会紹介：1紙/9誌(17回)
- ▼情報掲載：4紙/8誌(44回)



ポスター



会場風景



特別展示 会場風景

担当学芸員コメント

当館のコレクションの中から厳選した現代美術の作品によって構成し、戦後の現代美術の展開を概観しようという展覧会。それぞれの作家や作品が、各々の個性や独自性を発揮しながら、展覧会として全体が共鳴し合うような展示を目指した。平面作品と立体作品が呼応するように心がけ、絵画作品が彫刻作品の描き割りのような背景のように見えないように、作品と作品の間の空間の取り方に留意した。また、単なる通史的な展示にならぬよう、会場の途中に若林奮作品のみを展示する部屋や、アブラハム・デイヴィッド・クリスチャンの特別展示の部屋を設けた。結果的に、ひろがりや緩急のある連鎖、あるいは緊張感のある作品間の関係性や空間を生み出すことができたのではないかとと思う。(是枝開)

667

川合玉堂展—描かれた日本の原風景—

KAWAI Gyokudo : A Retrospective

川合玉堂(1873-1957)は円山四条派と狩野派を融合し、日本画壇において新たな境地を開拓した。四季の自然を郷愁あふれる風景画で描いた玉堂が、現在ではその多くが失われ、また人々の心から忘れられていった「日本の原風景」を、どうとらえ表現したかを再確認する。

主催：神奈川県立近代美術館、東京新聞

特別協力：財団法人玉堂会、玉堂美術館

協力：吉田俊英(豊田市美術館館長)、山梨俊夫(国立国際美術館館長)

企画・制作：西原健二(中日新聞社文化事業部部长)、杉本研介(中日新聞社文化事業部)、小久保陽広(中日新聞社文化事業部)

会期：2011年10月22日(土)～11月23日(水・祝)

休館日：月曜日

開催日数：28日

出品総点数：96点(展示替有)

総観覧者数：11,349人

担当学芸員：是枝開、鈴木智香子

関連企画

- 講演会 11月6日(日)「川合玉堂の風景画の展開」吉田俊英(豊田市美術館館長)
- ギャラリートーク 11月11日(金)、11月18日(金)
- 先生のための特別鑑賞の時間 11月19日(土)

関連記事

▼展評・解説など：

井崎憲「明治～昭和の日本画家 川合玉堂 県立近代美術館葉山館で特別展」『毎日新聞』2011年11月1日、22面

水沢勉「川合玉堂展 描かれた日本の原風景 ㊶ 『二日月』」『東京新聞』2011年11月2日、20面

橋秀文「川合玉堂展 描かれた日本の原風景 ㊸ 『彩雨』」『東京新聞』2011年11月3日、20面

是枝開「川合玉堂展 描かれた日本の原風景 ㊹ 『行く春』」『東京新聞』2011年11月4日、20面

下野綾「川合玉堂展 近代美術館葉山 豊かな風景表現を追求」『神奈川新聞』2011年11月9日、7面

三沢典丈「美術この一年 震災が変えた鑑賞と創作「川合玉堂展」他」『東京新聞』2011年12月15日夕刊、7面

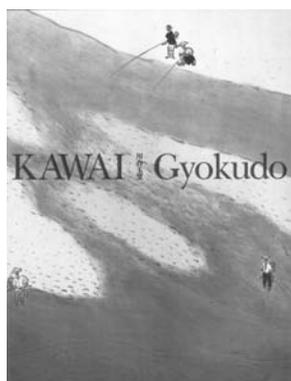
「アートシーン」『日曜美術館』NHK、2011年9月11日放送

▼展覧会紹介：4紙／9誌(15回)

▼情報掲載：4紙／8誌(21回)



ポスター



カタログ表紙



会場風景

カタログ

29.1×22.7 cm、184ページ、販売価格2,000円

多色129図、単色挿図8図

編集：神奈川県立近代美術館、中日新聞社

執筆：吉田俊英、山梨俊夫、是枝開

デザイン：桑畑吉伸

制作：リーヴル

発行：中日新聞社

ごあいさつ、謝辞、目次

川合玉堂展に寄せて(小澤萬里子)

「玉堂画」の風景(吉田俊英)

記憶と共鳴する風景—《二日月》から《彩雨》へ(山梨俊夫)

川合玉堂の「風雅の誠」—日常と飛翔(是枝開)

図版

第一章「山水画」の時代(～明治三〇年代)

第二章「風景画」の時代(明治四〇年代～昭和前期)

第三章「情景画」の時代(昭和後期)

年譜

参考文献(編：鈴木智香子、平井鉄寛)

出品目録

担当学芸員コメント

2011年3月11日に東日本をおそった大地震が日本人に未だ大きな爪痕を残している時期に、現在ではその多くが失われ、忘れられていった「日本の原風景」を描いた川合玉堂の展覧会を開催することにどのような意義や意味があるのかということを考えざるを得なかった。比較的裕福な家庭に育った玉堂も18歳の時に濃尾大震災で自宅が崩壊し、父が不慮の死をとげ、翌々年には母が急性肺炎のため他界して、天涯孤独の身となっている。そうした生い立ちやのちの戦争体験が、玉堂の慈悲深いまなざしを形成するのにどう影響したかは推察するほかないが、玉堂の画が、担当者も含め、見る者に何か深い「勇氣」のようなものを与えてくれたような気がしている。(是枝開)

668

ベン・シャーン クロスメディア・アーティスト—写真、絵画、グラフィック・アート—

Ben Shahn : Cross Media Artist Photographs, Paintings and Graphic Arts

ニューヨークで活躍し、日本の美術・デザインに大きな影響を与えたアメリカの画家ベン・シャーン(1898-1969)の20年ぶりの回顧展。国内外から数百点を集め、多様なメディアを駆使した展開に注目する。

主催：神奈川県立近代美術館、読売新聞社、美術館連絡協議会
協賛：ライオン、清水建設、大日本印刷、損保ジャパン、日本テレビ放送網
会期：2011年12月3日(土)～2012年1月29日(日)
休館日：月曜日(ただし1月9日は開館)、12月29日(木)～1月3日(火)
開催日数：46日
出品総点数：384点
総観覧者数：18,699人
担当学芸員：李美那、松尾子水樹、橋秀文

関連企画

- 1) 国際シンポジウム 「ベン・シャーンと日本・アメリカ」12月3日(土) 当館講堂、12月4日(日) 東京ミッドタウン・デザインハブ インターナショナル・デザイン・リエゾン・センター
助成：公益財団法人ボラ美術振興財団
12月3日(土) 発表1：「ハーバードのベン・シャーン」ミリアム・ステュワート(ハーバード美術館学芸員)
12月4日(日) 発表2：「ベン・シャーン：ユダヤ系アメリカ人 デアスポラの芸術家」スーザン・シェヴロウ(リヴァーデイル・ヘブライ・ホームダーフナー・ユダヤ美術館館長)
コメント：ロジャー・バルバース(作家・劇作家・演出家)
発表3：「ナショナルリテューとエスニシティー—ベン・シャーンのFSA時代」宮本陽一郎(筑波大学人文社会科学系教授)
発表4：「1960年、ベン・シャーンの見え日本とアジア」荒木康子(福島県立美術館学芸員)
コメント：水沢勉(当館館長)
パネルディスカッション：ミリアム・ステュワート、スーザン・シェヴロウ、ロジャー・バルバース、宮本陽一郎、荒木康子、水沢勉、李美那(司会・当館主任学芸員)
- 2) 講演会 12月10日(土)「写真家としてのベン・シャーン」飯沢耕太郎(写真評論家)
2012年1月8日(日)「歌う線描、奏でるドローイング～ベン・シャーンのLP ジャケットが伝えるメッセージ」沼辺信一(編集者、本展出品者、LPレコード・収集・研究)
- 3) 展覧会鑑賞会 12月10日(土)「冬の鎌倉・葉山—展覧会鑑賞の一日」
- 4) ワークショップ 12月18日(日)「気持ちを言葉に、言葉をカタチに」和合亮一(詩人)
- 5) コンサート 12月24日(土)「即興演奏—音／ベン・シャーン／空間」かみむら泰一(サクソ、芳垣安洋(パーカッション)、高良久美子(ビブラフォン)
- 6) ゲストトーク 2012年1月14日(土)「山本純司さんを迎えて」山本純司(編集者)
- 7) 担当学芸員によるトーク 2012年1月22日(日)「ベン・シャーン展ができるまで」李美那(当館主任学芸員)
- 8) 先生のための特別鑑賞の時間 2012年1月7日(土)

関連記事

- ▼展評・解説など：
窪田直子「『ベン・シャーン展』声なき声 すくい上げ」『日本経済新聞』2011年12月28日、4面
西田健作「美の履歴書234 『ラッキードラゴン』ベン・シャーン 線がたどたどしいわけ」『朝日新聞』2011年12月28日夕刊、4面
前田恭二「ベン・シャーン クロスメディア・アーティスト」難解な中に見える誠実」『読売新聞』2012年1月12日、28面
橋秀文「ベン・シャーン展 ④ 版画集『一行の詩のためには……』言葉の誕生右手で表現」『読売新聞』2012年1月19日、34面
李美那「ベン・シャーン展 ④ 『解放』 日常の強さ伝える」『読売新聞』2012年1月20日、32面
山田孝男「風知草 福島には届かない絵 ベン・シャーン展」『毎日新聞』2012年1月23日、2面
松尾子水樹「ベン・シャーン展 ⑤ 『恐怖の夜の町』 無意識の恐怖形に」『読売新聞』2012年1月24日、28面
李美那「ベン・シャーンの世界」『美術の窓』2011年9月号、p.232
李美那「ベン・シャーン クロスメディア・アーティスト—写真、絵画、グラフィック・アート—

- 『美連協ニュース』112号、2011年11月、p.112
李美那「『ベン・シャーン クロスメディア・アーティスト』 神奈川県立近代美術館葉山」『展覧会ガイド』2011年12月号、p.9
「特集 ベン・シャーン『世直し画家の真実』」『芸術新潮』2012年1月号、pp.10-29
荒木康子「ベン・シャーンからのメッセージ 3.11後の福島で考える」『芸術新潮』2012年1月号、pp.30-43
「特別インタビュー 和田誠さん、ベン・シャーンの魅力を教えてください」『芸術新潮』2012年1月号、pp.44-47
増田玲「ヘタウマ写真家のまなざし」『芸術新潮』2012年1月号、pp.48-59
沼辺信一「ベン・シャーンの声が聴こえる 辿りついたグラフィック・ワーク」『芸術新潮』2012年1月号、p.73
芸術新潮編集部「ローカル・ガイド 1960年、京都にて」『芸術新潮』2012年1月号、pp.74-81
柴田こずえ「今月の展覧会『ベン・シャーン クロスメディア・アーティスト 写真、絵画、グラフィック・アート』人間愛に満ちた画家のまなざし 神奈川県立近代美術館葉山」『MOE 387号』2012年1月3日、p.61
生井英考「展評12 ベン・シャーン クロスメディア・アーティスト 写真、絵画、グラフィック・アート 神奈川県立近代美術館葉山」『アサヒカメラ』1023号、2012年2月20日、pp.178-179
森村泰昌「美術の話 ART 美術の見方 『ベン・シャーン クロスメディア・アーティスト 写真、絵画、グラフィック・アート』展 1960年代のアメリカの澁刺とした精神を反映した美術家」『クロワッサン プレミアム』51号、2012年2月20日、pp.142-143
武居利史「文化の話題 美術 芸術家としての強固な思想 ベン・シャーン展」『前衛』880号、2012年3月、pp.166-167
「静かなるプロテスト～反骨の画家 ベン・シャーン」『日曜美術館』NHK、2012年1月15日、22日放送

▼展覧会紹介：2紙／11誌(15回)

▼情報掲載：6紙／14誌(45回)

カタログ

26×19cm、261ページ、販売価格2,200円
多色361図、単色215図、多色挿図58図、単色挿図1図

編集：李美那、角田美奈子、高嶋雄一郎、荒木康子、堀宜雄
執筆：デボラ・マーティン・カオ、太田泰人、水沢勉、酒井哲朗、李美那、角田美奈子、高嶋雄一郎、荒木康子、堀宜雄
翻訳：オフィス宮崎
和訳：秋山淑子
英訳：ハート・ララビー、エドワード・マック
アートディレクション：永原康史
デザイン：岡田奈緒子、引地美香
製作：株式会社美術出版社、石塚肇、名塚雅絵、西尾玉緒
発行：2012年1月1日 第1刷／2012年2月20日 第2刷
印刷・製本：共同印刷株式会社
発行：株式会社美術出版社

ごあいさつ Forward、目次/Contents

ベン・シャーン展に寄せてー「フクシマから」(酒井哲朗)

On the Shahn Exhibition: From Fukushima (Tetsuro Sakai)

ベン・シャーンの写真ー社会を見るレンズ(デボラ・マーティン・カオ)

第1章 ドキュメンタリー、そして社会への警告

FSAの写真とベン・シャーン(堀宣雄)

インタビュー:石川直樹

第2章 「私」から共感へ

ベン・シャーンの言葉

インタビュー:安西水丸

第3章 文字への愛、神話の力

インタビュー:和田誠

インタビュー:ロジャー・バルバース

第4章 アジア、そして日本へ

力は線の世界を遅くする。ー麻生三郎とベン・シャーン(水沢勉)

1960年の日本旅行(荒木康子)

阿部展也の見たベン・シャーン(李美那)

「抄録」「ヒューマンイズムの画家ベン・シャーンより」(藤慶之)

インタビュー:山本純司

クロスメディア・アーティストとしてのベン・シャーン(荒木康子)

ミレニアムから9.11に考えたことーベン・シャーンとウォーカー・エヴァンス(太田泰人)

Ben Shahn's Social Lens (Deborah Martin Kao)

Ben Shahn as a Cross Media Artist (Yasuko Araki)

1960 Trip to Japan (Yasuko Araki)

Ben Shahn as seen by Nobuya Abe (Mina Lee)

略年譜(編:角田美奈子)

主要参考文献(編:高嶋雄一郎)

出品リスト/List of Works



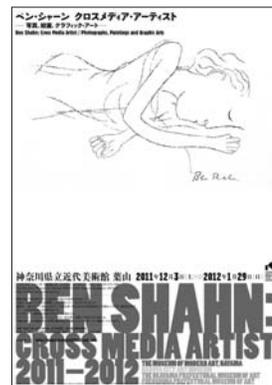
ポスター



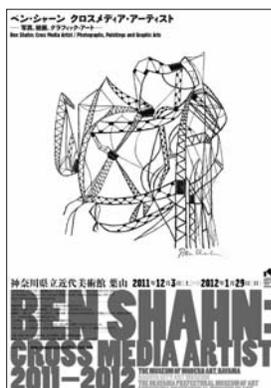
ポスター



ポスター



ポスター



ポスター



ポスター



カタログ表紙



会場風景

担当学芸員コメント

「社会派」というくりでまとめられがちなベン・シャーンの姿を、もういちど大きな視点で見直し、写真やドローイング、デザインの仕事との関連から、幅広い仕事の全貌をあらわにしようとした野心的な試みだった。国際シンポジウムでは、本展が本国アメリカでも行われていない、シャーンの姿の掘り起こしに寄与したことが大きく評価された。アメリカの各美術館との作品借用契約の最終段階で東日本大震災がおこり、最終的には借用作品数の縮小や、最終巡回地の福島県立美術館への米国所蔵作品の出品を諦めなければならなかったものの、契約が整うまで数か月間、米側美術館は震災の影響を冷静に見つめようと努力してくれた。しかし、その微妙なプロセスをすべて説明することは難しく、日本での一部の報道に、米側美術館の対応に対する誤解を招くものがあったことは残念で、広報の難しさを痛感した。また、没後アトリエに残されていた数千点のドローイングなどの作品が日本にあることが判明し、断片も含め242点が出品された。それを活かすべく、画家の手の動き、思考の軌跡がリアルに感じられる展示を試み、生前のアトリエにヒントを得た作業台風の展示台作成や、展示室を大きく斜めに切りとる長い壁を立てる、写真作品を映像で見せるなどの、多面的展示の工夫をしたことが観覧者に大変好評であった。(李美那)

669

すべての僕が沸騰する 村山知義の宇宙

MURAYAMA TOMOYOSHI Get All of Me Seething

村山知義(1901-1977)は「マヴォ」や「三科」等の前衛活動を通じて日本の近代美術に鮮烈な影響を与えた。油彩、平面作品、建築、舞台美術、イラストレーション、装幀など美術の仕事を中心に多彩な展開を見せた1920-30年代の作品と資料を一堂に会し、大正・昭和前期時代の熱狂の再現を試みる。

主催：神奈川県立近代美術館、読売新聞社、美術館連絡協議会
協賛：ライオン、清水建設、大日本印刷、損保ジャパン、日本テレビ放送網
助成：公益信託タカシマヤ文化基金、公益財団法人 野村財団
会期：2012年2月11日(土・祝)～3月25日(日)
休館日：月曜日
開催日数：38日
出品総点数：760点
総観覧者数：5,386人
担当学芸員：三本松倫代、朝木由香、西澤晴美

関連企画

- 1) オープニング・レクチャー 2月11日(土・祝)「村山知義への招待」池内紀(独文学者・エッセイスト)
- 2) 国際シンポジウム 3月3日(土)「呼び交わす身体 過去、現在、未来」当館講堂
「呼び交わす身体 過去、現在、未来—踊る村山知義展をきっかけに」水沢勉(当館館長)
「村山知義と近代舞踏」國吉和子(舞踏研究・評論)
「自動筆記：村山知義のサウンド・ボディ」デヴィッド・トゥーブ(作曲家・演奏家・キュレーター・評論家)
「生の哲学と身体表現—村山知義のダンスとファッション」滝沢恭司(町田市立国際版画美術館学芸員)
「コメント」やなぎみわ(美術家)、三本松倫代(司会・当館学芸員)
- 3) パフォーマンス・イベント 3月3日(土)「新・劇場の三科 1925→2012」巻上公一(音楽家)、やなぎみわ(美術家)+山本麻貴(女優)、フォルマント兄弟(作曲・思案ユニット)+岡野勇仁(アコーディオン)、酒井幸菜(振付家・ダンサー)
- 4) 吉行和子による童話の朗読とアフタートーク 3月17日(土) 吉行和子(女優)、聞き手：水沢勉(当館館長)
- 5) ギャラリートーク 2月12日(日)、3月4日(日)
- 6) 先生のための特別鑑賞の時間 2月18日(土)

関連記事

▼展評・解説など：

下野綾『村山知義の宇宙』展 沸騰したマルチな才能 近代美術館葉山』『神奈川新聞』2012年2月24日、18面
水沢勉『すべての僕が沸騰する 村山知義の宇宙展』『世紀末的作品で才能開花』『読売新聞』2012年2月28日、34面
窪田直子『村山知義の宇宙』展と『藤牧義夫展』『明から暗』『激動の東京』『日本経済新聞』2012年2月29日、44面
大西若人『すべての僕が沸騰する 村山知義の宇宙』展 揺れる作風 時代そのもの』『朝日新聞』夕刊、2012年2月29日、5面
三本松倫代『すべての僕が沸騰する 村山知義の宇宙展』『女装、おかつぱで身体表現』『読売新聞』2012年3月1日、32面
朝木由香『すべての僕が沸騰する 村山知義の宇宙展』『童画 透徹した緑と色』『読売新聞』2012年3月3日、32面
アライ=ヒロユキ『すべての僕が沸騰する村山知義の宇宙』展 前衛芸術の開拓者 マルチな才の軌跡』『赤旗新聞』2012年3月7日、9面
高野清見『村山知義 不滅の挑発 分野横断の前衛 回顧展』『読売新聞』2012年3月8日、21面
金子徹『村山知義表現の冒険者 才気沸騰多面体 パフォーマンス、舞台装置から童画まで プロレタリア文化運動の理論家としても』『赤旗新聞』2012年3月11日(日)版、29面
岸桂子『展覧会 村山知義の宇宙 激動の生涯と斬新なアイデア』『毎日新聞』2012年3月13日(日)版、4面
城戸朱理『沸点を超えて 『すべての僕が沸騰する—村山知義の宇宙』展を見る』『現代詩手帖』2012年4月号(55巻4号)、2012年4月1日、p.140
川本三郎『東京つれづれ日誌 23 昭和の隅田川に惹かれた二人の芸術家。(藤牧義夫・村山知義)』『東京人』309号、2012年5月3日、pp.142-144
志賀信夫『日本最初のパフォーマー『すべての僕が沸騰する—村山知義の宇宙』』『TH series トーキョーヘッズ叢書』No.50、2012年5月、pp.54-56
足立元『あまりにも偉大でスタイリッシュな若者の姿 すべての僕が沸騰する 村山知義の宇宙』『美術手帖』967号、2012年6月、p.302

▼展覧会紹介：3紙/9誌(12回)

▼情報掲載：6紙/14誌(40回)

カタログ

24.3×20.3 cm、315ページ、販売価格2,400円
多色805図、単色4図、単色挿図76図

編集：村山知義研究会

執筆：水沢勉、三本松倫代、石井幸彦、山野英嗣、滝沢恭司、やまさきさとし、岩崎清、牧野裕二、山田志麻子

デザイン：馬面俊之

制作：コギト

発行：読売新聞社、美術館連絡協議会

ごあいさつ、謝辞/Acknowledgements、目次

「すべての僕が沸騰する」という現象—村山知義の現在のために(水沢勉)

カタログ

I 前兆：1920

II 伯林：1922

III 沸騰：1923-1931

IV こどもたちのために：1921-1976

V その生涯：1901-1977

村山知義年譜(編：村山知義研究会)

「村山知義と建築、バウハウス」についての一断片(山野英嗣)

小英雄はスタイリッシュファッションに見るマヴォイスト村山知義の近代性(滝沢恭司)

童画家TOMの誕生をめぐって(牧野裕二)

芸術は空間のクリエイションである—童画家TOMと童謡童話作家 壽子—(やまさきさとし)

TOMの童画に関するノート—前衛との関係から(山田志麻子)

独断的スケッチ—村山壽子のほうへ(岩崎清)

「村山知義関係資料—内田昇三コレクション」について(石井幸彦)

主要参考文献(編：村山知義研究会)

出品リスト



ポスター



カタログ表紙



会場風景



シンポジウム

担当学芸員コメント

震災の影響により、2012年度開催の予定を繰り上げ、また巡回の立ち上がりとしての実施となった展覧会。本展のために発足した村山知義研究会(巡回展主催者をはじめ他館学芸員や関係者等を含む)により村山家所蔵の膨大な資料を調査し、初の個人回顧展として展示内容と図録を充実させた。本展の成果を踏まえ、現存資料の更なる調査研究を進めていく計画である。海外研究者を招聘してのシンポジウム、そして現代の多様なアーティストによる展示会場でのパフォーマンスは、村山の今日的意義を再確認する重要な契機となった。こうした関連企画は外部からの助成や協賛、協力によって可能となったものであることを謝意とともに記しておきたい。(三本松倫代)

展覧会関連プログラム等の会場写真



「近代の洋画」展 ゲスト・ギャラリートーク
酒井忠康氏(左)



「シャルロット・ベリアンと日本」展 ゲスト・ギャラリートーク
岡部憲明氏(左から2人目)



「現代美術の展開」展 アーティストトーク
アブラハム・デイヴィッド・クリスチャン氏(右)



「藤牧義夫展」 ゲストトーク
柄澤齊氏(右)



「二見彰一 版画展」 アーティストトーク
二見彰一氏(右)



「モイナジ/イン・モーション」展 パフォーマンス
白井剛氏



「ベン・シャーン」展 コンサート
芳垣安洋氏(左)、かみむら泰一氏(中)、高良久美子氏(右)



「村山知義の宇宙」展 パフォーマンス
巻上公一氏

670

開館60周年 近代の洋画 ザ・ベスト・コレクション

The Best Collection : Modern Oil Painting

近代洋画の父ともいべき高橋由一の油彩画が描かれる明治から大正を経て、神奈川県立近代美術館 鎌倉が開館する昭和26年までの近代洋画の歴史を、所蔵作品約80点を前期・後期に分けて通観する。

主催：神奈川県立近代美術館

会期：2011年4月9日(土)～10月10日(月・祝)

休館日：月曜日(ただし5月2日、7月18日、9月19日、10月10日は開館)

開催日数：162日

出品総点数：87点(展示替有)

総観覧者数：21,073人

担当学芸員：橋秀文、朝木由香

関連企画

- 1) ゲスト・ギャラリートーク 5月22日(日) 酒井忠康氏(世田谷美術館館長)
- 2) スタンプラリー 4月9日(土)～10月10日(月・祝) 鎌倉市鍋木清方記念美術館、鎌倉市川喜多映画記念館、神奈川県立近代美術館 鎌倉、鎌倉国宝館
- 3) キュレーターズツアー
 - 5月22日(日)：神奈川県立近代美術館 鎌倉→鎌倉国宝館
 - 6月18日(土)：鎌倉市鍋木清方記念美術館→鎌倉市川喜多映画記念館→神奈川県立近代美術館 鎌倉→鎌倉国宝館
 - 7月2日(土)：鎌倉市鍋木清方記念美術館→鎌倉市川喜多映画記念館→神奈川県立近代美術館 鎌倉
 - 9月3日(土)：鎌倉市鍋木清方記念美術館→鎌倉市川喜多映画記念館→神奈川県立近代美術館 鎌倉
- 4) 「わくわくゆったりセット」配布 7月23日(土)～8月31日(水)
- 5) 開館60周年 夏の美術館スタンプラリー 7月23日(土)～8月31日(水)
- 6) ギャラリートーク 4月16日(土)、5月21日(土)、5月28日(土)、6月4日(土)、6月11日(土)、7月9日(土)、7月23日(土)、8月20日(土)、9月10日(土)
- 7) 先生のための特別鑑賞の時間 5月14日(土)、9月17日(土)

関連記事

- ▼ 展覧会紹介：5誌(10回)
- ▼ 情報掲載：5紙/16誌(78回)



ポスター



会場風景

担当学芸員コメント

1951年に鎌倉で開館して60年を記念して開催された記念展のひとつとして、当館の近代洋画の名品を選抜して展示した展覧会。奇しくも東日本大震災の直後ということもあり、1923年の関東大震災の直前に描かれた宮田重雄の静謐な雰囲気をつたえた《横浜風景》や、ベルリンで大震災翌日の日付けが記された和達知男の前衛作品《眼鏡をかけた自画像》などの作品群に注目すると、当時の画家たちのそれぞれの心境が絵画作品からもうかがわれ、そうした視点からも興味深い展覧会となった。(橋秀文)

671

開館60周年 シャルロット・ペリアンと日本

Charlotte Perriand et le Japon

シャルロット・ペリアン(1903-1999)は、ル・コルビュジエとの共同作業によって、建築やインテリアを手掛けたフランスのデザイナーである。戦中・戦後を通じて日本のデザインに多大な影響を与えた彼女が提起した、モダニズムと日本の伝統との関係に注目し、その今日的な意義を紹介する。

主催：神奈川県立近代美術館、読売新聞社、美術館連絡協議会
協賛：ライオン、清水建設、大日本印刷、損保ジャパン、日本テレビ放送網
後援：フランス大使館、日仏工業技術会、日仏美術学会、日本建築学会、
日本建築家協会、日本インテリア学会
特別協力：Archives Charlotte Perriand, Paris
協力：AIR FRANCE, CASSINA IXC.Ltd.
会期：2011年10月22日(土)～2012年1月9日(月・祝)
休館日：月曜日(ただし1月9日は開館)、12月29日(木)～1月3日(火)
開催日数：64日
出品総点数：369点
総観覧者数：15,770人
担当学芸員：長門佐季、土居由美

関連企画

- 1) 国際シンポジウム「シャルロット・ペリアンと日本—モダニズムと伝統の融合」10月23日(日) 日仏会館ホール 助成：公益信託タカシマヤ文化基金、財団法人吉野石膏美術振興財団、公益財団法人ポーラ美術振興財団
基調講演 「伝統と近代」ジャック・バルサク(ペリアン研究美術史家)
シンポジウム
「イントロダクション」松隈洋(京都工芸繊維大学教授)
「『シャルロット・ペリアンと日本』研究会の調査準備経過」長門佐季(当館主任学芸員)
報告I：「モダンデザインと民藝」土田真紀(帝塚山大学非常勤講師)
報告II：「ペリアンと丹下健三」豊川斎赫(国立小山工業高等専門学校准教授)
報告III：「デザインの1941年」森仁史(金沢美術工芸大学教授)
パネル・ディスカッション
「コメント」アンヌ・ゴッソ(ボルドー第三大学准教授、CRCAO常任研究員)、
ペルネット・ペリアン=バルサク(シャルロット・ペリアン・アーカイブ代表)
「まとめ」松隈洋
- 2) ゲスト・ギャラリートーク 11月18日(金) 木田隆子(雑誌『ELLE DÉCOR』編集長)
11月29日(火) 岡部憲明(建築家)、太田泰人(美術史家)
- 3) ギャラリートーク 11月12日(土)、12月10日(土)、12月17日(土)
- 4) 先生のための特別鑑賞の時間 10月29日(土)

関連記事

- ▼展評・解説など：
窪田直子「『シャルロット・ペリアンと日本』展 身の回りを伸びやかに 神奈川県立近代美術館鎌倉」『日本経済新聞』2011年11月2日、44面
長門佐季「『シャルロット・ペリアンと日本』展 ㊤『竹製シェーズ・ロング』 発想の自由さ今も新鮮」『読売新聞』2011年11月25日、32面
長門佐季「『シャルロット・ペリアンと日本』展 ㊦『芸術の総合への提案 ル・コルビュジエ、レジェ、ペリアン3人展』の会場風景 日本での体験ヒントに」『読売新聞』2011年11月26日、32面
長門佐季「『シャルロット・ペリアンと日本』展 ㊧『茶室』生前最後の公の仕事」『読売新聞』2011年11月27日、32面
下野綾「日本の伝統美生かす活躍 女性デザイナーのペリアン展 近代美術館鎌倉」『神奈川新聞』2011年12月14日、9面
「東京・青山と鎌倉へ、シャルロット・ペリアンの作品に会いに行こう。」『ELLE DECO』10月号、2011年、pp.32-33
「開館60周年 シャルロット・ペリアンと日本」『Precious』11月号、2011年、p.346
横田克己「日本を愛したシャルロット・ペリアン」『Casa Brutus』12月号、2011年、pp.110-133
「日本文化を愛したC.ペリアン。コルビュジエと並ぶその才能を娘が語る。」『VOGUE』12月号、2011年、P.324
長門佐季「植物が登場するアートたち しなやかさと強さを持つ竹に無限の可能性を感じ

たペリアン」『小原流 挿花』733号、2011年12月1日、p.37
大西若人「日本文化 融和と緊張」『朝日新聞』2011年12月21日夕刊、3面
長門佐季「シャルロット・ペリアンと日本展」『美連協ニュース』No.113、美術連絡協議会、2012年2月、p.25
深堀 協子「CHARLOTTE PERRIAND ET LE JAPON」『産総研東北Newsletter』No.36、2012年3月、pp.3-4
「アートシーン」『日曜美術館』NHK、11月20日放送
『カナフルTV』テレビ神奈川、11月20日放送
「新・木曜美術館」『地球テレビエルムンド』NHK BS1、12月1日放送

▼展覧会紹介：3紙/15誌(23回)

▼情報掲載：5紙/22誌(62回)

カタログ

25.6×18.2cm、328ページ、販売価格：3,500円
多色挿図478図、単色挿図22図

編者：「シャルロット・ペリアンと日本」研究会、長門佐季、アンヌ・ゴッソ、佐川夕子、角奈緒子、土田真紀、畑由起子、松隈洋、森仁史
執筆：ペルネット・ペリアン=バルサク、ジャック・バルサク、加藤晴康、森仁史、松隈洋、豊川斎赫、アンヌ・ゴッソ、土田真紀、畑由起子、和田菜穂子、長門佐季、角奈緒子、白山真理、佐川夕子
和訳：井上由里子、アンヌ・ゴッソ、角奈緒子
英訳：イザベル・オリヴィエ、アンドレアス・シュトゥールマン
デザイン：山口信博+大野あかり+宮巻麗、山口デザイン事務所
製作：川嶋勝+渡辺奈美+土屋沙希、鹿島出版会
発行：2011年11月15日 第1刷/2012年2月20日 第2刷
編者：「シャルロット・ペリアンと日本」研究会
発行者：鹿島光一
発行所：鹿島出版会
印刷・製本：三美印刷

メッセージ Message(ペルネット・ペリアン=バルサク、ジャック・バルサク)

謝辞 目次/Contents

序文 シャルロット・ペリアンの生涯と作品(ジャック・バルサク)

第1章 日本との出会い 1929-1940年

第2章 日本発見 1940-1946年

第3章 戦後—日本との再会/1949-1960年

第4章 フランス—暮らしの中の日本 1952-1993年

第5章 生涯と芸術—ペリアンからのメッセージ 1993-1999年

Columns

ファシズムの台頭から敗戦へ(加藤晴康)

ペリアンの展覧会を見て(柳宗悦)

ペリアンのこと(柳宗理)

シャルロット・ペリアンの面影(進来廉)

シャルロット・ペリアンのこと(坂倉ユリ)

論考

戦前期日本「工芸」の進運と岐路(森仁史)

近代建築に託されていたこと(松隈洋)

丹下健三とペリアン(豊川斎赫)

出会いと共鳴(アンヌ・ゴッソ、ジャック・バルサク)

柳宗悦—ペリアン—柳宗理(土田真紀)

ペリアンの生きた言葉(畑由起子)

The Life and Work of Charlotte Perriand(Jacques Barsac)

The Ascent and Turning Points of Japanese Craft before the War—Perriand's Arrival in Japan(Hitoshi Mori)

Expectations in Modern Architecture—Things that Crystallized through the Exchange between Charlotte Perriand and Postwar Japanese Architecture (Hitoshi Matsukuma)
 Kenzō Tange and Charlotte Perriand—Establishment and Demonic Integration of Art in Japan (Saikaku Toyokawa)

Encounter and Resonances (Anne Gossot, Jacques Barsac)

Sōetsu Yanagi, Charlotte Perriand, Sōri Yanagi—Modern Design and Mingei (Maki Tsuchida)

The “Living Language” of Charlotte Perriand—Focusing on the year 1998 (Yukiko Hata)

手帳(ページュ) (シャルロット・ペリアン)

「シャルロット・ペリアンと日本」年譜(編:佐川夕子)

「シャルロット・ペリアンと日本」に関する文献(編:「シャルロット・ペリアンと日本」研究会)

作品リスト



ポスター



カタログ表紙



シンポジウム



会場風景

担当学芸員コメント

企画立案から約3年の準備期間を要して実現した。フランスの建築家でデザイナー、シャルロット・ペリアンの個展が日本の公立美術館で開催されたのは本展が初めてである。2011年はシャルロット・ペリアンが初来日してからちょうど70年目にあたるとともに、ル・コルビュジエのもとで共に働き、彼女の生涯にわたるよき友人であった建築家、坂倉準三が設計した鎌倉館が開館して60周年の記念の年でもあった。戦前から戦後の日本の建築、デザインの世界に多大な影響を与えたペリアンと日本の関わりに着目した本展企画は、本国フランスでも評価され、2013年2月から5月までサン・テティエンヌ近代美術館にて、同展を元にした展覧会「Charlotte Perriand et le Japon」が開催されることになった。(長門佐季)

672

生誕100年 藤牧義夫展 モダン都市の光と影
FUJIMAKI Yoshio : Centennial of His Birth

群馬県館林に生まれた藤牧義夫(1911-1935?)は、日本の創作版画界に鮮烈な光芒を放つ作品を残しながら24歳で突然行方不明になった画家である。生前の作品と資料に基づき、木版画や白描絵巻など約200点の展示で、この芸術家の生誕から失踪の日までを辿る。

主催：神奈川県立近代美術館、群馬県立館林美術館、読売新聞社、美術館連絡協議会

協賛：ライオン、清水建設、大日本印刷、損保ジャパン、日本テレビ放送網

協力：多摩美術大学造形表現学部映像演劇学学科研究室

助成：芸術文化振興基金

会期：2012年1月21日(土)～3月25日(日)

休館日：月曜日

開催日数：56日

出品総点数：178点(展示替有)

総観覧者数：9,802人

担当学芸員：榎山昌夫、長島彩音

関連企画

- 1) ゲストトーク 2月18日(土)「啓蒙の人」柄澤齊(版画家)
- 2) 記念対談 2月25日(土)「『白描絵巻』を中心に」加藤弘子(東京都現代美術館企画係長 学芸員)×水沢勉(当館館長)
- 4) ワークショップ 2月5日(日)「どこまでもつづく景色—長い長い紙を使って」
- 3) ギャラリートーク 1月28日(土)、3月10日(土)
- 5) 先生のための特別鑑賞の時間 1月21日(土)

関連記事

▼展評・解説など：

- 水沢勉「生誕100年 藤牧義夫展 ①『白描絵巻』 古典・モダン 23歳の力作」『読売新聞』2012年2月5日、30面
- 榎山昌夫「生誕100年 藤牧義夫展 ④『赤陽』 変わりゆく都市染める夕日」『読売新聞』2012年2月7日、30面
- 長島彩音「生誕100年 藤牧義夫展 ⑤『鉄の橋』 迷いのない彫り 対比の妙」『読売新聞』2012年2月9日、30面
- 下野綾「モダン都市に引かれて 失踪した木版画家 藤牧義夫展 県立近代美術館鎌倉」『神奈川新聞』2012年2月15日、11面
- 窪田直子「『村山知義の宇宙』展と『藤牧義夫展』『明から暗』激動の東京」『日本経済新聞』2012年2月29日、44面
- 藤島俊会「神奈川の文化時評 美術『生誕100年藤牧義夫展』 新しい表現に傾けた情熱『ニキの世界・ブルガダイス 安藤ニキ作品展』『麻生マユ彫刻展』」『神奈川新聞』2012年3月2日、16面



会場風景

松下由里「展覧会紹介 生誕100年藤牧義夫展」『美連協ニュース』111号、2011年8月、p.22
 矢崎秀行「藤牧義夫(ENOKEN之図)モダン都市東京に江戸は蘇ったのか」『美連協ニュース』112号、2011年11月、p.24
 保坂健二郎「藤牧義夫展」『すばる』3月号(34巻3号)、2012年2月6日、pp.372-373
 (小泉文代)「ジャンル別番組ガイド 今週の美術 日曜美術館 時代に生きよ 時代を超えよ 版画家藤牧義夫の東京」『NHKウィークリー ステラ』3/2号、2012年3月2日、p.92
 坪内祐三「坪内祐三の美術批評 no.002 眼は行動する「隅田川に消えた」藤牧義夫の浅草のモダニズム」『週刊ポスト』44巻14号、2012年3月12日、p.182
 川本三郎「東京つれづれ日誌 23 昭和の隅田川に惹かれた二人の芸術家。(藤牧義夫・村山知義)」『東京人』309号、2012年5月3日、pp.142-144
 「時代に生きよ 時代を超えよ～版画家・藤巻義夫の東京～」『日曜美術館』NHK、2012年2月26日、3月4日放送

▼展覧会紹介：1紙／8誌(10回)

▼情報掲載：4紙／10誌(42回)

カタログ

20×15cm、155ページ、販売価格2,100円

多色232図、単色挿図10図

DVD付き

編集：群馬県立館林美術館
 (松下由里・田中竜也)、
 神奈川県立近代美術館
 (水沢勉・榎山昌夫・長島彩音)
 著者：藤牧義夫
 発行日：2011年7月20日
 発行者：嶋裕隆
 印刷・製本：光村印刷株式会社
 発行所：求龍堂
 デザイン：U. SHIMA

目次、はじめに
 藤牧義夫 一九三四年九月(水沢勉)
 館林と藤牧義夫(岡屋紀子)
 図版 I 作品
 図版 III 資料
 図版 V 写真
 藤牧義夫のこぼれ
 藤牧義夫・略年譜
 藤牧義夫・主要文献
 作品目録
 謝辞、クレジット



ポスター



カタログ表紙

担当学芸員コメント

藤牧義夫は16歳で上京。関東大震災から復興する東京をモダニズム感あふれる版画で表現し、隅田川などの風景を長大な白描絵巻に残して、24歳で忽然と姿を消した。その彗星のような足跡は、多くの研究者による調査研究によって、近年明らかにされてきた。本展を機に、藤牧の文献資料がまとめられたが、図録では紙幅の関係で割愛せざるを得なかった。その成果は「藤牧義夫年譜」とともに、群馬県立館林美術館のサイトに掲載されている。(http://www.gmat.gsn.ed.jp/ex/data/11fujimaki/bunken.pdf) 当館での展示においては、白描絵巻について、前後期にわけて全体を展示し、同時にデジタル高精細画像を拡大投影した。(榎山昌夫)

673

新収蔵作品展 甦った名品を中心に
New Acquisitions of 2010

2010年度及び近年に新たに収蔵された作品と、修復を完了した作品から約50点を選び紹介する。

主催：神奈川県立近代美術館

会期：2011年4月9日(土)～6月5日(日)

休館日：月曜(ただし5月2日は開館)

開催日数：51日

出品総点数：58点

総観覧者数：2,560人

担当学芸員：李美那

関連企画

1) ギャラリートーク 4月17日(日)

2) 先生のための特別鑑賞の時間 4月17日(日)

関連記事

▼情報掲載：8紙／1誌(9回)



ポスター



会場風景

担当学芸員コメント

近年、新たに収蔵された作品とともに、修復を終えて甦った作品をお披露目することも、新収蔵作品展のテーマとしてきていたが、その形が定着してきた感がある。作品の修復や管理は美術館の重要な使命である。しかし、一般的な展覧会の中では修復の地道な作業や成果は見えにくいため、外部から認知されることがない。このような機会に修復の成果を発表し続けることは、美術館が社会の一員としてより深く認知される一助になると信じている。今回は特に、前年修復を終えた山口長男の作品《かたち》の展示が大きかった。所蔵家宅での初見時にはあまりの傷みかたに驚いたと水沢、伊藤、橋が述べていた作品だが、堅固な存在感を取り戻しており、ひとときわ力を放っていた。このような、再生の場に立ち会えることも、学芸員としての喜びである。(李美那)

674

二見彰一 版画展

Prints by FUTAMI Shoichi

大阪で生まれた二見彰一(1932～)は1970年代半ばまで大阪を拠点に銅版画を制作していたが、以後ドイツなどの西洋諸国で創作活動を続けた。本展は当館所蔵の250点から100点を選び、初期から近年にいたるまで40年に及ぶ画業を通観する。

主催：神奈川県立近代美術館

会期：2011年6月18日(土)～10月10日(月・祝)

休館日：月曜日(ただし7月18日、9月19日、10月10日は開館)

開催日数：101日

出品総点数：121点

総観覧者数：4,716人

担当学芸員：橋秀文、鈴木智香子

カタログ

29.7×21cm、16ページ、販売価格800円

多色15図、多色挿図2図

編集・発行：神奈川県立近代美術館

制作：印象社

ごあいさつ

ブルーを追い求めて—二見彰一の銅版画—(橋秀文)

二見彰一 略年譜、基本文献(編：橋秀文、鈴木智香子)

二見彰一展 作品リスト

関連企画

- 1)二見彰一氏によるアーティストトーク 6月18日(土) 聞き手：橋秀文
- 2)ギャラリートーク 6月25日(土)、9月3日(土)
- 3)先生のための特別鑑賞の時間 7月30日(土)

関連記事

▼展評・解説など：

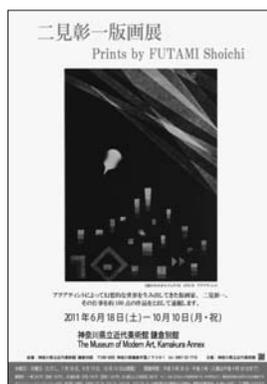
大西若人「厳かに秘やかに 『柳田康司展』『二見彰一版画展』」『朝日新聞』夕刊、2011年10月5日、3面

藤島俊会「神奈川の文化時評 美術 『二見彰一版画展』 神奈川県立近代美術館鎌倉別館 はかなく美しいブルーの世界」『神奈川新聞』2011年10月7日、18面

橋秀文「深化したブルーの世界」『版画芸術』153号、2011年9月1日、p.107

▼展覧会紹介：5誌(6回)

▼情報掲載：2紙／12誌(34回)



ポスター



カタログ表紙



会場風景

担当学芸員コメント

1970年代からドイツを中心としてヨーロッパに活動拠点を移していた銅版画家二見彰一。2005年の真下コレクション展に含まれた二見彰一の約40点の作品を展示することがきっかけで、当館と二見彰一の関係が成り立ち、さらなる作者からの多数の作品の寄贈がもって、二見彰一銅版画展が開催された。知られざる孤高の版画家の日本での評価のきっかけとなる展覧会といえる。(橋秀文)

675

開館60周年 日本画 ザ・ベスト・コレクション
The Best Collection : Modern Nihonga Painting

当館の日本画コレクションを3期に分けて紹介する。前期、片岡球子。中期、日本美術院で活躍した女性画家の作品と戦後葉山で活躍した山口蓬春。後期、木下翔迥コレクションの中から鎌倉時代から江戸時代までの古画を展示する。

主催：神奈川県立近代美術館

会期：2011年10月22日(土)～2012年3月25日(日)

休館日：月曜日(ただし1月9日は開館)、12月29日(木)～1月3日(火)

開催日数：130日

出品総点数：115点(展示替有)

総観覧者数：11,123人

担当学芸員：橋秀文

関連企画

1) ギャラリートーク 10月29日(土)、1月7日(土)、3月3日(土)

2) 先生のための特別鑑賞の時間 11月12日(土)、2月4日(土)

関連記事

▼展評・解説など：

新谷祐一「美の履歴書237 『火の祈り』 荘司福 のぼる炎に込めたのは 神奈川県立近代美術館鎌倉別館『開館60周年 日本画 ザ・ベスト・コレクション』」『朝日新聞』2012年1月18日夕刊、7面

太田治子「トーキョー・アート・パラダイス 古都鎌倉で見た日本画家・片岡球子の生きざま 神奈川県立近代美術館鎌倉別館『開館60周年 日本画 ザ・ベスト・コレクション』」『コモ・レ・バ』4巻1号、2012年1月1日、p.47

▼展覧会紹介：1紙／4誌(5回)

▼情報掲載：2紙／9誌(47回)



ポスター



会場風景

担当学芸員のコメント

神奈川県立近代美術館開館60周年記念展のひとつとして、鎌倉館では洋画のコレクションが披露されたが、同時に、鎌倉別館で日本画のコレクションを選抜して展示したのが同展である。近代日本画だけではなく、2005年に寄贈された木下翔迥コレクションのなかの中核をなす鎌倉時代の曼陀羅も展示し、鎌倉で展覧会活動する当館ならではの古画と近代日本画を並行して展覧する展示となった。(橋秀文)

2011年度展覧会 会期・観覧者数一覧

	展覧会名	会期	日数	観覧料		観覧者数(人)				他館との 開催協力 など
						有料観 覧者数	無料観 覧者数	うち 中学生 以下	観覧者 数合計	
葉山館	視覚の実験室 モホイ=ナジ/イン・モーション	4月16日(土)～ 7月10日(日)	75日	一般 20歳未満・学生 65歳以上 高校生	1,100円 950円 550円 100円	7,139	2,689	509	9,828	巡回： 京都国立近代美術館 DIC川村記念美術館
	現代美術の展開 ザ・ベスト・コレクション	7月23日(土)～ 10月2日(日)	63日	一般 20歳未満・学生 65歳以上 高校生	700円 550円 350円 100円	5,383	1,723	738	7,106	
	川合玉堂展 描かれた日本の原風景	10月22日(土)～ 11月23日(水)	28日	一般 20歳未満・学生 65歳以上 高校生	1,000円 850円 500円 100円	7,267	4,082	179	11,349	巡回： 松坂屋美術館
	ベン・シャーン クロスメディア・アーティスト	12月3日(土)～ 1月29日(日)	46日	一般 20歳未満・学生 65歳以上 高校生	1,100円 950円 550円 100円	14,658	4,041	889	18,699	巡回： 名古屋市美術館 岡山県立美術館 福島県立美術館
	すべての僕が沸騰する 村山知義の宇宙	2月11日(土)～ 3月25日(日)	38日	一般 20歳未満・学生 65歳以上 高校生	1,000円 850円 500円 100円	3,428	1,958	238	5,386	巡回： 京都国立近代美術館 高松市美術館 世田谷美術館
	小計		250日			37,875	14,493	2,553	52,368	
鎌倉館	近代の洋画 ザ・ベスト・コレクション	4月9日(土)～ 10月10日(月)	162日	一般 20歳未満・学生 65歳以上 高校生	700円 550円 350円 100円	14,553	6,520	3,970	21,073	
	シャルロット・ベリアンと日本	10月22日(土)～ 1月9日(月)	64日	一般 20歳未満・学生 65歳以上 高校生	900円 750円 450円 100円	11,034	4,736	694	15,770	巡回： 広島市現代美術館 目黒区美術館
	生誕100年 藤牧義夫展	1月21日(土)～ 3月25日(日)	56日	一般 20歳未満・学生 65歳以上 高校生	700円 550円 350円 100円	7,792	2,010	413	9,802	巡回： 群馬県立館林美術館
小計		282日			33,379	13,266	5,077	46,645		
鎌倉別館	新収蔵作品展 甦った名品を中心に	4月9日(土)～ 6月5日(日)	51日	一般 20歳未満・学生 65歳以上 高校生	250円 150円 100円 100円	1,894	666	255	2,560	
	二見彰一 版画展	6月18日(土)～ 10月10日(月)	101日	一般250円 20歳未満・学生 65歳以上 高校生	250円 150円 100円 100円	3,490	1,226	686	4,716	
	日本画 ザ・ベスト・コレクション	10月22日(土)～ 3月25日(日)	130日	一般 20歳未満・学生 65歳以上 高校生	250円 150円 100円 100円	8,702	2,421	486	11,123	
小計		282日			14,086	4,313	1,427	18,399		
合計	12展覧会				85,340	32,072	9,057	117,412		

※11月17日(木)は、開館60周年記念 無料開館日(3館とも)

教育普及活動

受講・参加プログラム(講演会・ギャラリートーク・学校連携プログラム等)

		事業内容				受講人数
		テーマまたは内容	講師等	実施日	実施場所	
講演会	「モホイ=ナジ/イン・モーション」展講演会	「創造は、国境を越えて—モホイ=ナジの芸術」	井口壽乃(本展監修者・埼玉大学教授)	2011.4.16(土)	葉山館講堂	45人
	「川合玉堂展」講演会	「川合玉堂の風景画の展開」	吉田俊英(豊田市美術館館長)	2011.11.6(日)	葉山館講堂	65人
	「ベン・シャーン」展講演会	「写真家としてのベン・シャーン」	飯沢耕太郎(写真評論家)	2011.12.10(土)	葉山館講堂	42人
	「ベン・シャーン」展講演会	「歌う線描、奏でるドローイング—ベン・シャーンのLPジャケットが伝えるメッセージ」	沼辺信一(編集者、本展出品者、LPレコード収集・研究)	2012.1.8(日)	葉山館講堂	49人
	「村山知義の宇宙」展講演会	オープニング・レクチャー「村山知義への招待」	池内紀(独文学者・エッセイスト)	2012.2.11(土・祝)	葉山館講堂	80人
コンサート	「モホイ=ナジ/イン・モーション」展コンサート	「EIN ZEITSPIEL 時の戯れ」	クリストフ・シャルル(Sound) 渡辺俊介(Video)	2011.6.25(土)	葉山館展示室	101人
	「ベン・シャーン」展コンサート	「即興演奏—音/ベン・シャーン/空間」	かみむら泰一(サクソ、芳垣安洋(パーカッション)、高良久美子(ビブラフォン)	2011.12.24(土)	葉山館展示室	76人
国際シンポジウム	「シャルロット・ベリアンと日本」展国際シンポジウム	国際シンポジウム「シャルロット・ベリアンと日本—モダニズムと伝統の融合」	ジャック・バルサク(ベリアン研究美術史家)、ベルネット・ベリアン=バルサク(シャルロット・ベリアン・アーカイヴ代表)、アンヌ・ゴッソ(ボルドー第三大学准教授、CRCAO常任研究員)、松隈洋(京都工芸繊維大学教授)、土田真紀(帝塚山大学非常勤講師)、豊川斎赫(国立小山工業高等専門学校准教授)、森仁史(金沢美術工芸大学教授)、長門佐季(当館主任学芸員)	2011.10.23(日)	日仏会館ホール	130人
	「ベン・シャーン」展国際シンポジウム	国際シンポジウム「ベン・シャーンと日本・アメリカ」	ミリアム・ステュワート(ハーバード美術館学芸員) ミリアム・ステュワート(ハーバード美術館学芸員)、ロジャー・バルバース(作家・演出家・劇作家)、荒木康子(福島県立美術館学芸員)、宮本陽一郎(筑波大学人文社会科学系教授)、スーザン・シェヴロウ(リヴァーデイル・ヘブライ・ホーム・ターフナー・ユダヤ美術館館長)、水沢勉(当館館長)、李美那(当館主任学芸員)	2011.12.3(土) 2011.12.4(日)	葉山館講堂 東京ミッドタウン・デザインハブ	45人 51人
	「村山知義の宇宙」展国際シンポジウム	国際シンポジウム「呼びかわす身体 過去、現在、未来」	デヴィッド・トゥープ(作曲家・演奏家・キュレーター・評論家)、國吉和子(舞踏研究・評論)、滝沢恭司(町田市立国際版画美術館学芸員)、やなぎみわ(美術家)、水沢勉(当館館長)、三本松倫代(当館学芸員)	2012.3.3(土)	葉山館講堂	54人
パフォーマンス等	「モホイ=ナジ/イン・モーション」展パフォーマンス	「ARTIFICIAL SATELLITE 予感された月」	白井剛(振付家/ダンサー)	2011.7.2(土)	葉山館展示室	116人
	「村山知義の宇宙」展パフォーマンス・イベント	「新・劇場の三科1925→2012」	巻上公一(音楽家)、やなぎみわ(美術家)+山本麻貴(女優)、フォルマント兄弟(作曲・思案ユニット)+岡野勇仁(アコーディオン)、酒井幸菜(振付家・ダンサー)	2012.3.3(土)	葉山館展示室・エントランスホール	130人
	「村山知義の宇宙」展 吉行和子による童話の朗読とアフタートーク	吉行和子による童話の朗読とアフタートーク	吉行和子(女優)、水沢勉(当館館長)	2012.3.17(土)	葉山館講堂	78人
ゲストトーク等	「近代の洋画」展ゲスト・ギャラリートーク	ゲストによる作品解説(聞き手 担当学芸員)	酒井忠康(世田谷美術館館長)	2011.5.22(日)	鎌倉館展示室	15人
	「モホイ=ナジ/イン・モーション」展ゲスト・ギャラリートーク	ゲストによる作品解説(聞き手 担当学芸員)	前田富士男(慶應義塾大学名誉教授)	2011.6.26(日)	葉山館展示室	71人
		ゲストによる作品解説(聞き手 当館館長)	金子隆一(東京都写真美術館専門調査員)	2011.7.3(日)	葉山館展示室	63人
	「シャルロット・ベリアンと日本」展ゲスト・ギャラリートーク	ゲストによる作品解説	佐藤忠男(映画評論家/日本映画大学学長)	2011.7.9(土)	葉山館展示室	45人
		ゲストによる作品解説(聞き手 担当学芸員)	木田隆子(雑誌「ELLE DÉCOR」編集長)	2011.11.18(金)	鎌倉館展示室	25人
	「ベン・シャーン」展ゲストトーク	「山本純司さんを迎えて」	岡部憲明(建築家)、太田泰人(美術史家)	2011.11.29(火)	鎌倉館展示室	50人
	「藤牧義夫展」ゲストトーク	「溶明の人」	山本純司(編集者)	2012.1.14(土)	葉山館講堂	37人
記念対談「白描絵巻を中心に」		柄澤齊(版画家)	2012.2.18(土)	鎌倉館展示室	56人	
アーティストトーク	「二見彰一 版画展」アーティストトーク	二見彰一(版画家)、橋秀文(当館企画課長兼普及課長)	2011.6.18(土)	鎌倉別館展示室	32人	
	「現代美術の展開」展アーティストトーク	アブラハム・デイヴィッド・クリスチャン氏によるアーティストトーク	アブラハム・デイヴィッド・クリスチャン(アーティスト)	2011.8.27(土)	葉山館講堂	20人
ワークショップ	「モホイ=ナジ/イン・モーション」展ワークショップ	「影をつかまえる—フォトグラム・ワークショップ」	浅見俊哉(アーティスト)	2011.5.29(日)	葉山館講堂	13人
	「あさつての美術館」	ファミリーコミュニケーションの日に来館した5歳以上の子どもと保護者のペアを対象にした、「Museum Box 宝箱」ワークショップとギャラリートーク	松尾子水樹(当館学芸員)、鈴木智香子(当館学芸員)	2011.8.7(日)	葉山館講堂	25人
		松尾子水樹(当館学芸員)、鈴木智香子(当館学芸員)	2011.9.4(日)	葉山館講堂	17人	
		松尾子水樹(当館学芸員)、鈴木智香子(当館学芸員)	2011.10.2(日)	葉山館講堂	8人	
	「ベン・シャーン」展ワークショップ	「気持ちを言葉に、言葉をカタチに」	和合亮一(詩人)	2011.12.18(日)	葉山館講堂	23人
「藤牧義夫展」ワークショップ	「どこまでもつづく景色—長い長い紙を使つて」	山内舞子(当館学芸員)、長島彩音(当館学芸員)	2012.2.5(日)	鎌倉館ワーキングルーム	7人	

夏休みプログラム	わくわくゆったりセット配布	夏休み期間中に来館した18歳以下の方に配布(引き換え券と交換)		7.23(土)~8.31(水)	葉山館・鎌倉館	
	開館60周年 夏の美術館スタンプラリー	夏休み期間中に、当館で開催中の3つの展覧会を見てスタンプを集めた18歳以下の方に景品贈呈		7.23(土)~8.31(水)	葉山館・鎌倉館・鎌倉別館	
ギャラリートーク等	ギャラリートーク/「近代の洋画展」	学芸員による作品解説	橋秀文(当館専門学芸員)	2011.4.16(土)	鎌倉館展示室	15人
			朝木由香(当館学芸員)	2011.5.21(土)	鎌倉館展示室	8人
			長門佐季(当館主任学芸員)	2011.5.28(土)	鎌倉館展示室	7人
			伊藤由美(当館専門研究員)	2011.6.4(土)	鎌倉館展示室	20人
			李美那(当館主任学芸員)	2011.6.11(土)	鎌倉館展示室	3人
			靱山昌夫(当館主任学芸員)	2011.7.9(土)	鎌倉館展示室	15人
			水沢勉(当館館長)	2011.7.23(土)	鎌倉館展示室	31人
			橋秀文(当館企画課長兼普及課長)	2011.8.20(土)	鎌倉館展示室	20人
			三本松倫代(当館学芸員)	2011.9.10(土)	鎌倉館展示室	14人
	ギャラリートーク/「新収蔵作品展」		李美那(当館主任学芸員)	2011.4.17(日)	鎌倉別館展示室	3人
	ギャラリートーク/「モホイ=ナジ/イン・モーション」展		水沢勉(当館館長)、三本松倫代(当館学芸員)、西澤晴美(当館学芸員)	2011.4.29(金・祝)	葉山館展示室	17人
				2011.5.5(木・祝)	葉山館展示室	22人
				2011.6.18(土)	葉山館展示室	19人
	ギャラリートーク/「二見彰一 版画展」		橋秀文(当館企画課長兼普及課長)	2011.6.25(土)	鎌倉別館展示室	5人
	ギャラリートーク/「現代美術の展開」展		橋秀文(当館企画課長兼普及課長)	2011.9.3(土)	鎌倉別館展示室	3人
			是枝開(当館主任学芸員)	2011.7.29(金)	葉山館展示室	15人
	ギャラリートーク/「日本画」展		靱山昌夫(当館主任学芸員)	2011.8.5(金)	葉山館展示室	26人
橋秀文(当館企画課長兼普及課長)		2011.10.29(土)	鎌倉別館展示室	3人		
ギャラリートーク/「川合玉堂展」	橋秀文(当館企画課長兼普及課長)	2012.1.7(土)	鎌倉別館展示室	20人		
	橋秀文(当館企画課長兼普及課長)	2012.3.3(土)	鎌倉別館展示室	25人		
ギャラリートーク/「シャルロット・ペリアンと日本」展	是枝開(当館主任学芸員)	2011.11.11(金)	葉山館展示室	45人		
	是枝開(当館主任学芸員)	2011.11.18(金)	葉山館展示室	46人		
ギャラリートーク/「藤牧義夫展」	長門佐季(当館主任学芸員)	2011.11.12(土)	鎌倉館展示室	46人		
	長門佐季(当館主任学芸員)	2011.12.10(土)	鎌倉館展示室	18人		
ギャラリートーク/「村山知義の宇宙」展	長門佐季(当館主任学芸員)	2011.12.17(土)	鎌倉館展示室	78人		
	靱山昌夫(当館主任学芸員)	2012.1.28(土)	鎌倉館展示室	25人		
	靱山昌夫(当館主任学芸員)	2012.3.10(土)	鎌倉館展示室	65人		
担当学芸員によるトーク/「ベン・シャーン」展	「ベン・シャーン展ができるまで」	李美那(当館主任学芸員)	2012.1.22(日)	葉山館講堂	114人	
ツアー等	「鎌倉 小町通り・八幡宮エリア ミュージアムめぐりのすすめ」	「スタンプラリー」 鎌倉市鍋木清方記念美術館、鎌倉市川喜多映画記念館、神奈川県立近代美術館 鎌倉、鎌倉国宝館		2011.4.9(土)~10.10(月・祝)	鎌倉館	
		「キュレーターズ・ツアー」 鎌倉国宝館、神奈川県立近代美術館 鎌倉	各館担当学芸員	2011.5.22(日)	鎌倉館	4人
		「キュレーターズ・ツアー」 鎌倉市鍋木清方記念美術館、鎌倉市川喜多映画記念館、鎌倉国宝館、神奈川県立近代美術館 鎌倉	各館担当学芸員	2011.6.18(土)	鎌倉館	9人
		「キュレーターズ・ツアー」 鎌倉市鍋木清方記念美術館、鎌倉市川喜多映画記念館、神奈川県立近代美術館 鎌倉	各館担当学芸員	2011.7.2(土)	鎌倉館	3人
		「キュレーターズ・ツアー」 鍋木清方記念美術館、川喜多映画記念館、神奈川県立近代美術館 鎌倉	各館担当学芸員	2011.9.3(土)	鎌倉館	5人
展覧会鑑賞会	「秋の鎌倉・葉山一展覧会鑑賞の一日」	長門佐季(当館主任学芸員)、李美那(当館主任学芸員)	2011.12.10(土)	鎌倉館・葉山館	5人	
県立機関活用講座	「現代音楽の展開:1951-2011」	「実験工房と音楽」	湯浅譲二(作曲家)	2011.8.6(土)	葉山館講堂	43人
		「1960年代の音楽と現在」	一柳慧(作曲家/ピアニスト)	2011.8.20(土)	葉山館講堂	49人
		「サウンドによるパフォーマンスとは?」	鈴木昭男(サウンド・アーティスト)	2011.9.3(土)	葉山館講堂	34人
		「啓かれた耳 伝統と現代」	佐藤聡明(作曲家)	2011.9.17(土)	葉山館講堂	18人
		「メディアアートと音楽の新たな地平」	佐近田展康(音楽家/メディアアーティスト/メディア論研究者)	2011.10.1(土)	葉山館講堂	20人
研究会	公開研究会	「鑑賞教育のひろがり」	井上尚子(アーティスト)	2012.2.15(水)	葉山館	14人

学 校 連 携 プ ロ グ ラ ム	神奈川県立藤沢清流高等学校との連携プログラム	県立藤沢清流高校連携授業／「モホイ=ナジ／イン・モーション」展	松尾子水樹(当館学芸員)、三本松倫代(当館学芸員)	2011.6.10(金)	葉山館	11人	
		県立藤沢清流高校連携授業／「近代の洋画(前期)」展 「二見彰一 版画展」	山内舞子(当館学芸員)、橋秀文(当館企画課長兼普及課長)	2011.7.1(金)	鎌倉館、鎌倉別館	14人	
		県立藤沢清流高校連携授業／「現代美術の展開」展	松尾子水樹(当館学芸員)、鈴木智香子(当館学芸員)、是枝開(当館主任学芸員)	2011.10.28(金)	葉山館	14人	
		県立藤沢清流高校連携授業／「川合玉堂展」	鈴木智香子(当館学芸員) 是枝開(当館主任学芸員)	2011.10.28(金)	葉山館	14人	
		県立藤沢清流高校連携授業／「シャルロット・ベリアンと日本」日本画展	長門佐季(当館主任学芸員)、山内舞子(当館学芸員)、橋秀文(当館企画課長兼普及課長)	2011.11.25(金)	鎌倉館	14人	
		県立藤沢清流高校連携授業／「ベン・シャーン」展	松尾子水樹(当館学芸員)、李美那(当館主任学芸員)、鈴木智香子(当館学芸員)	2011.12.9(金)	葉山館	14人	
		県立藤沢清流高校連携授業／「ベン・シャーン」展	松尾子水樹(当館学芸員)、李美那(当館主任学芸員)、鈴木智香子(当館学芸員)	2012.1.27(金)	葉山館	14人	
	鎌倉市立第一中学校との連携プログラム	ミュージアム・トリップ(鎌倉市立第一中学校連携授業)／「近代の洋画(前期)」展	松尾子水樹(当館学芸員)、山内舞子(当館学芸員)	2011.5.29(木)	鎌倉館	11人	
		ミュージアム・トリップ(鎌倉市立第一中学校連携授業)／「モホイ=ナジ／イン・モーション」展	松尾子水樹(当館学芸員)、山内舞子(当館学芸員)、三本松倫代(当館学芸員)	2011.6.9(木)	葉山館講堂	10人	
		ミュージアム・トリップ(鎌倉市立第一中学校連携授業)／フォトグラム制作	松尾子水樹(当館学芸員)、山内舞子(当館学芸員)	2011.6.30(木)	鎌倉館	12人	
		ミュージアム・トリップ(鎌倉市立第一中学校連携授業)／作品展示について	松尾子水樹(当館学芸員)、山内舞子(当館学芸員)	2011.9.8(木)	鎌倉市立第一中学校	11人	
	学 校 連 携 プ ロ グ ラ ム	先生のための特別鑑賞の時間／「新収蔵作品展」	学芸員による美術館利用のガイダンス	山内舞子(当館学芸員)、李美那(当館主任学芸員)	2011.4.17(日)	鎌倉別館	4人
		先生のための特別鑑賞の時間／「近代の洋画」展(前期)		山内舞子(当館学芸員)、橋秀文(当館専門学芸員)	2011.5.14(土)	鎌倉館	10人
		先生のための特別鑑賞の時間／「番外編・鎌倉ミュージアムツアー①」		山内舞子(当館学芸員)	2011.6.25(土)	鎌倉館	10人
		先生のための特別鑑賞の時間／「モホイ=ナジ／イン・モーション」展		松尾子水樹(当館学芸員)、鈴木智香子(当館学芸員)、三本松倫代(当館学芸員)	2011.6.26(日)	葉山館	14人
		先生のための特別鑑賞の時間／「二見彰一 版画展」		山内舞子(当館学芸員)、橋秀文(当館企画課長兼普及課長)	2011.7.30(土)	鎌倉別館	8人
		先生のための特別鑑賞の時間／「現代美術の展開」展		松尾子水樹(当館学芸員)、鈴木智香子(当館学芸員)、是枝開(当館主任学芸員)	2011.8.13(土)	葉山館	16人
		先生のための特別鑑賞の時間／「番外編・鎌倉ミュージアムツアー②」		山内舞子(当館学芸員)	2011.8.27(土)	鎌倉館	14人
		先生のための特別鑑賞の時間／「近代の洋画」展(後期)		山内舞子(当館学芸員)、橋秀文(当館企画課長兼普及課長)	2011.9.17(土)	鎌倉館	13人
		先生のための特別鑑賞の時間／「シャルロット・ベリアンと日本」展		山内舞子(当館学芸員)、長門佐季(当館主任学芸員)	2011.10.29(土)	鎌倉館	4人
先生のための特別鑑賞の時間／「日本画展」(前期)		山内舞子(当館学芸員)、橋秀文(当館企画課長兼普及課長)		2011.11.12(土)	鎌倉別館	9人	
先生のための特別鑑賞の時間／「川合玉堂展」		鈴木智香子(当館学芸員)、是枝開(当館主任学芸員)		2011.11.19(土)	葉山館	7人	
先生のための特別鑑賞の時間／「番外編・鎌倉ミュージアムツアー③」		山内舞子(当館学芸員)		2011.12.17(土)	鎌倉別館	4人	
先生のための特別鑑賞の時間／「ベン・シャーン」展		松尾子水樹(当館学芸員)、李美那(当館主任学芸員)、鈴木智香子(当館学芸員)		2012.1.7(土)	葉山館	14人	
先生のための特別鑑賞の時間／「藤牧義夫展」		山内舞子(当館学芸員)、棚山昌夫(当館主任学芸員)		2012.1.21(土)	鎌倉館	5人	
先生のための特別鑑賞の時間／「日本画展」(後期)		山内舞子(当館学芸員)、橋秀文(当館企画課長兼普及課長)		2012.2.4(土)	鎌倉別館	3人	
先生のための特別鑑賞の時間／「村山知義の宇宙」展		松尾子水樹(当館学芸員)、三本松倫代(当館学芸員)、鈴木智香子(当館学芸員)		2012.2.18(土)	葉山館	9人	
先生のための特別鑑賞の時間／「番外編・鎌倉ミュージアムツアー④」	山内舞子(当館学芸員)	2012.3.3(土)	鎌倉別館	6人			
先生のための特別鑑賞の時間／「Museum Box 宝箱 活用講座①」	山内舞子(当館学芸員)、松尾子水樹(当館学芸員)	2011.9.24(土)	葉山館	8人			
先生のための特別鑑賞の時間／「Museum Box 宝箱 活用講座②」	山内舞子(当館学芸員)、松尾子水樹(当館学芸員)	2012.3.24(土)	葉山館	4人			

教育普及事業実施風景

学校連携プログラム「先生のための特別鑑賞の時間」



地域連携プログラム「キュレーターズ・ツアー」



ワークショップ



「モホイ=ナジ/イン・モーション」展 ワークショップ



「ベン・シャーン」展 ワークショップ



「藤牧義夫展」 ワークショップ

研修等受入プログラム(実習・研修・団体観覧等)

プログラム	受入内容・件数等
博物館学芸員実習	5大学から5名
インターン研修	学芸部門：採用なし 保存修復部門：2名採用、1名に修了証を発行
職業体験	中学校：4校延べ9回24名
教員研修	館内での実施：1校4団体延べ5回137名 出張教員研修：4ヵ所延べ4回70名以上
出張授業	小学校：2校2回210名 中学校：1校1回延べ59名 福祉団体：1ヵ所1回延べ5名
「Museum Box 宝箱」貸出	貸出総回数：延べ196回
	貸出先：26校と2ヵ所
	貸出回数：延べ29回
	利用総人数：2837名
	内訳概要：小学校22校・延べ23回 中学校2校・延べ2回 高校1校1回 大学1校1回 教育委員会・NPO等2団体・延べ2回
貸出学校所在地域：横浜市15校、相模原市3校、葉山町・藤沢市各2校、鎌倉市・大磯市・横須賀市・稲城市各1校	

学校教育機関等の団体観覧(職業体験等の研修プログラムを除く)	小学校	11校延べ17回1076名
	中学校	18校延べ19回762名以上
	高校	8校延べ9回888名
	大学	5校延べ6回145名以上
	専門学校	1校延べ1回100名
	養護学校等	3校延べ4回44名
	教育委員会等	2団体延べ2回55名
	病院・福祉団体等	1団体延べ1回17名
	他美術館からの団体	3団体延べ5回220名

*団体観覧について

- ここにまとめた団体観覧は、学校教育機関等の団体によるものに限っている。この他に、一般の団体申し込みがある。
- 団体の受入については、一般の団体についても、観覧前に、美術館の紹介や観覧マナーの説明などを行うようにし、事前に美術館ルールブックを送るなどして、美術館に親しめる気持ちづくりにつとめている。
- 学校教育機関での団体観覧では、できるだけ事前に引率の先生と連絡をとり、事前授業の支援を行っている。
- 上のデータは事前申込により把握している受入数。事前申込のない団体もあるので、実数はこのデータを上回る。
- 本年は、前年まで少しづつ増える傾向にあった「幼稚園・保育園」「子育て支援NPO・学童保育等」の団体がゼロであった。また同じく増加傾向にあった「病院・福祉団体等」も減少した。前年度末の3.11東日本大震災の影響もあるものと思われる。

2011年度(平成23年度)視察状況

年	月日	来館者	人数(左記来館者を含む)	来館箇所
2011年(平成23年)	6月16日(木)	葉山御用邸管理事務所 岡田正幸 所長	2人	葉山館
	10月1日(土)	ICOMOS 20世紀遺産国際委員会 Sheridan Burke 委員長	3人	鎌倉館
2012年(平成24年)	2月4日(土)	神奈川県教育委員会 平出彦仁 委員長	2人	葉山館
	2月17日(金)	ICOMOS 20世紀遺産国際委員会 Sheridan Burke 委員長	12人	鎌倉館
	3月16日(金)	葉山町商工会	11人	葉山館
	3月22日(木)	香川県議会議員団	10人	葉山館

美術図書室

1) 資料の収集・整理

- ・蔵書数(システム登録点数 2012年3月末現在) 69,213点
- ・2011年度新規図書・図録・AV資料等登録点数 2,261点
- ・2011年度雑誌新規登録件数 284点

2) 特別コレクション

- ・斎藤義重文庫の点検を継続中。

3) 閲覧サービス

- ・年間入室者数 4,495名(開館日1日平均17名)
- ・年間複写枚数 1,865枚(開館日1日平均7枚)
- ・年間レファレンス受付件数134件
- ・Art Libraries' Consortium(美術図書館横断検索)加盟

Art Libraries' Consortium(以下、ALCと略す)は、複数の博物館・美術館の図書室等の蔵書検索を1つのサイト上でまとめて検索することのできるサービスで、2004年3月から東京国立近代美術館、東京都現代美術館、横浜美術館の3館により開始された。これまで国立西洋美術館、東京都写真美術館、国立新美術館、東京国立博物館、東京都江戸東京博物館が参加し、計8館の蔵書検索システム(OPAC)を一括して検索できる。

また、ALCは全国の大学・研究機関の蔵書情報を検索できる国立情報学研究所のNACSIS Webcatともリンクしており(2012年6月29日よりCinii Booksへ移行)、美術関係資料・情報では、国内で最も重要な情報源となっている。参加のためにOPACシステムに変更を加える必要はなく、ALCで検索すると各館OPACへ同時に検索語が送信され、検索結果は各館のOPAC画面がまとめて表示される。

加盟による効果として、利用頻度の増加、蔵書の有効活用、蔵書価値が周知され利用の促進が期待される。さらに調査研究活動、情報収集活動に資するための参加準備をすすめ、加盟9館目として7月1日からスタートした。

なおALCは、加盟館同士で展覧会カタログ即時交換など相互協力も行っている。これにより、資料収集のさらなる充実とともに、開催中の展覧会への相互誘致も期待される。このサービスを継続、発展させていくことが今後の要務のひとつである。

・入室者状況

美術図書室の利用では、展覧会別で「ベン・シャーン クロスメディア・アーティスト」「開館60周年 現代美術の展開 ザ・ベスト・コレクション」の順に入室者が多く、「ベン・シャーン クロスメディア・アーティスト」では1日平均27名が美術図書室を利用した。なお、展覧会観覧者数に対する美術図書室入室者数の比率は、「開館60周年 現代美術の展開 ザ・ベスト・コレクション」が21%、「すべての僕が沸騰する 村山知義の宇宙」が18%が高かった。

・レファレンス状況

レファレンス受付件数では、「視覚の実験室 モホイ=ナジ/イン・モーション」と「川合玉堂展 描かれた日本の原風景」開催期間中が最も多く、ともに27件であった。当年度のレファレンス質問として、「鎌倉別館の新収蔵作品展に出品されていた小西真奈は、ほかにどんな作品を描いているのか資料を見たい」「自由美術家協会の第11回と第12回展覧会の正式名称は何か」「太平洋画会研究所が太平洋美術学校に名称変更したのは、1929年の何月か」「東日本大震災の影響により開催中止となったジョルジョ・モランディの画集が最近刊行された

そうだが、閲覧できるか」などの事例があった。

また、「片山健を調べており、ALCの検索結果で、神奈川県立近代美術館のみ資料が出た。資料にどのような情報が載っているか」といったALC加盟効果がうかがえる事例もあった。

4) 展覧会関連資料の展示

美術図書室では、展覧会関連資料を「特集コーナー」としてわかりやすくまとめ、来室者が手にとって閲覧できるようにしている。展覧会を見る前や後に、作家や作品の情報を得たり、更に知りたい内容を深めたりできると、来室者に好評を博している。

更に、閲覧するのが難しい稀少本や、展示室では公開されなかった資料などを展示ケースに入れ、「特別展示」としている。今年度は葉山館での五つの展覧会について「特別展示」を行った。

なお、展覧会関連資料の展示は鎌倉館、鎌倉別館での展覧会についても行っているが、スペースの関係上、葉山館での展覧会を主としているため、ここでは葉山館の展覧会関連のみを記す。

・視覚の実験室 モホイ=ナジ/イン・モーション

特別展示には、モホイ=ナジの作品も所有していたという仲田定之助の旧蔵資料より、モホイ=ナジ自筆文献が含まれる *Vivos Voco*, Heft 8/9 (Verl. der Werkgemeinschaft, 1926) や *Offset, Buch und Werbekunst*, Heft7 Bauhaus-Heft, (Offset-Verlag, 1926)、日本におけるモホイ=ナジ紹介の初期資料である『建築紀元』第一年第二號(1929年11月)を特別展示した。

特集コーナーには、著書 *The new vision and abstract of an artist* (Wittenborn, c.1947) やモホイ=ナジをテーマとした国内外の展覧会カタログ *Laszlo Moholy-Nagy compositions lumineuses* (Centre Georges Pompidou, 1995)、『モホイ=ナジとドイツ新興写真』(東京都写真美術館、1990)をはじめとし、モホイ=ナジとグロピウスが共同編集にあたった『パウハウス叢書』邦訳版の全16巻(中央公論美術出版)などを展示し、その幅広い活動を紹介した。

・開館60周年 現代美術の展開 ザ・ベスト・コレクション

開館60周年を記念して、特別展示には1951年開館当初の「セザンヌ・ルノワール」展、「第1回複製展」、「佐伯祐三展」の1枚目録や図録を展示した。日本最初の公立近代美術館として誕生した鎌倉館の最初の刊行物は、来室者に好評を博した。

特集コーナーには、各作家の当館における展覧会カタログ『今日の作家たちIV山本正道展』(1992)、『若林奮 1989年以後』(1997)、『伊庭靖子展』(2009)、『もうひとつの現代』(2003)、『プライマリー・フィールド』(2010)などをはじめ、アブラハム・デイヴィッド・クリスチャン関連資料も含め、それぞれの作家の代表的な作品集や展覧会カタログを展示した。

・川合玉堂展 描かれた日本の原風景

川合玉堂は絵を描くだけでなく文藝作品集も刊行しているが、その両方の表現が目には触れることはあまりない。そこで、山口蓬春文庫より『山笑集』(草木屋出版、1943)、『多摩の草屋』(美術年鑑社、1996)などを特別展示し、絵とはまた異なる文藝世界での川合玉堂の側面を紹介した。

特集コーナーには、『アサヒグラフ別冊美術特集 第64号 川合玉堂』(朝日新聞社、1989)や『日本近代絵画全集 第18巻 下村観山・川合玉堂』(講談社、1963)といった代表作が掲載されている図書、『川合玉堂展 日本の自然と心』(岐阜県美術館、1986)、『川合玉堂展 日本のこころ 四季の美』(横浜高島屋、1988)、『没後50年 川合玉堂名品

展』(一宮市博物館、2007)といった展覧会カタログを展示し、時間をかけて複数の資料を堪能していく来室者が多く見受けられた。

・ベン・シャーン クロスメディア・アーティスト写真、絵画、グラフィック・アート

特別展示には、『芸術新潮』1960年5月号、『芸術新潮』1969年5月号に掲載されている1960年来日時ベン・シャーン写真と、『芸術新潮』1962年2月号のニュージャージー州のアトリエ写真が掲載されているページなどを見開きで展示した。

特集コーナーには、1954年のアメリカ国防総省による水爆実験で被爆した漁船第五福竜丸をテーマとした『ここが家だ ベン・シャーンの第五福竜丸』(ベン・シャーン絵、アーサー・ピナード文、集英社、2006)、ベン・シャーンについて書かれたJames Thrall Soby, *Ben Shahn* (Penguin Books, 1947)や、展覧会カタログ『ベン・シャーン展』(東京国立近代美術館、1970)『ベン・シャーン展 創造のプロセス』(多摩美術大学美術館、1996)『ベン・シャーン ライナー・M・リルケ『マルテの手記』より』(富士ゼロックスアートスペース、2010)など、さまざまな資料を展示した。

・すべての僕が沸騰する 村山知義の宇宙

特別展示は仲田定之助の旧蔵資料より、村山知義の署名と仲田への一言がそえられた『現在の藝術と未来の藝術』(長隆舎書店、1924)、『演劇的自叙伝 第一部』(東邦出版、1970)といった村山知義の著作や、村山知義が仲田定之助宛てに出したハガキを展示した。両者ともドイツ留学の経験者であり、その当時は时期的にすれ違いになったようだが、後の交流がうかがえる特別展示となった。

特集コーナーには、著書『演劇的自叙伝 一〜三』(東邦出版社、1974)、『忍びの者 一〜五』(岩波書店、2003)、村山壽子作・村山知義絵・村山亜土再話『なくなった あかいようふく』(福音館書店、2002)をはじめ、同時代の動向や、そのなかの村山知義の位置を把握する参考資料として、五十殿利治『大正期新興美術運動の研究』(スカイドア、1995)、五十殿利治ほか『大正期新興美術資料集成』(国書刊行会、2006)、『ダダと構成主義展』(神奈川県立近代美術館、1989)などを展示した。

美術館紹介・広報 掲載実績(展覧会広報を除く)

1) 美術館紹介記事

「昨年の鎌倉観光客1949万人 前年比3.5%増 14年間で最多 県立近代美術館が3万5054人」『朝日新聞』2011年5月14日、28面
「展覧会は「熟成が必要」神奈川県立近代美術館 新館長に水沢勉氏」、『読売新聞』2011年5月19日、19面
尹貴淑「県立近代美術館 水沢勉館長に聞く 『足場を確かめより充実』」『神奈川新聞』2011年6月15日、11面
酒井忠康「作家のみぞ知る一瞬」『神奈川新聞』2011年8月1日、22面
林洋子「美術館のゆくえ“近代後”の岐路で ① 従来型は通用しない 「近美」誕生から60年」『四国新聞』2012年4月9日、12面
ほか総計 4紙5回/14誌19回

2) 普及活動関連の紹介記事

「自由研究に役立てて 博物館・美術館など企画 近代美術館葉山ワークショップ「あざつての美術館」他」『朝日新聞』2011年7月18日、33面

3) 収蔵作品・作家紹介記事

岸桂子「美・コレクション 関根正二「少年」 寄託が示す継続の力」『毎日新聞』2011年5月11日、13面
秋山亮太「美の履歴書202 『立てる像』 松本竣介 巨大な男の心持ちは」『朝日新聞』2011年5月11日夕刊、4面
「シベリア抑留 『鴻毛の秤』宮崎静夫」『東京新聞』2011年8月14日土日版、1面
岸桂子「開戦70年の夏 12.8と8.15 版画家・彫刻家 浜田知明 中国で見た娘の顔 悲劇絵で残したい 『忘れえぬ顔A』神奈川県立近代美術館蔵」『毎日新聞』2011年8月16日夕刊、4面
田中三蔵「美の履歴書216 『赤陽』 藤牧義夫 なぜ夕日は謎をはらむ」『朝日新聞』2011年8月17日夕刊、4面
「入門講座 女性日本画の近代 ④ 花開く個性 片岡球子 内田あぐり 自由な空気 生き方投影 片岡球子「火山(浅間山)」神奈川県立近代美術館蔵」『日本経済新聞』2011年8月25日夕刊、18面
「『でろり』の美意識 『岸田劉生展』大阪市立美術館」『読売新聞』2011年10月20日、23面
小野田勝「追悼・井上玲子さん」『自由美術』2011年6月、表紙・p.14
酒井忠康「独りゆく画家 岸田劉生」『別冊太陽 日本のこころ』186号、2011年7月24日、pp.43-145
「第1回館長講座 大震災を前にして、美術に何ができるか」『アプリー』20号、2011年8月
「特別展 生誕120周年記念 岸田劉生展『童女図 麗子立像』」『美術の窓』356号、2011年9月、p.191
「裸一貫《わだつみのこえ》」『芸術新潮』2011年11月号、p.110
「大胆奔放華麗 香雪美術館特別展片岡球子生命あふれる 『面構 徳川家康公』」『朝日新聞』2012年3月12日、22面

4) 前年度の展覧会記事紹介

興津喜四郎、「辻晉堂・小林秀雄・岸澤惟安老師」『丁卯』29号、2011年4月10日、pp.105-120
浦田憲治「川端康成の美意識① 古賀春江との出会い 生と死 西と東 新奇と古風 文豪が共感した前衛画家」『日本経済新聞』、2011年5月15日、16面

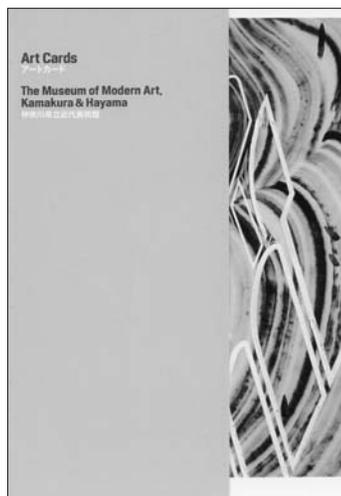
5) 次年度の展覧会記事

1紙1回/4誌9回

6) 当館ホームページ当該年度アクセス数

2,773,911件

刊行物（展覧会図録を除く）



1
アートカード

編集・発行：神奈川県立近代美術館
デザイン：ten pieces
制作：喜格
14.8×10.6cm、屏風7つ折り、16ページ、
無料配布、多色7図
2011年7月21日発行



2
2011年10月-2012年3月展覧会スケジュール

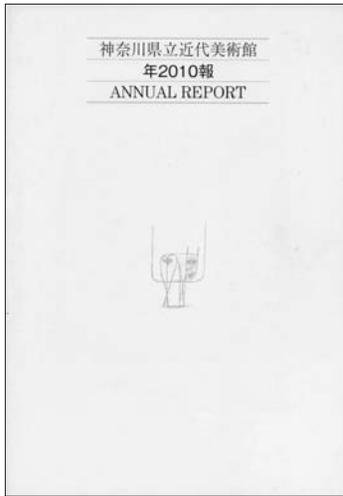
編集・発行：神奈川県立近代美術館
制作：コギト
21×10cm、三つ折
無料配布、多色9図
2011年10月-2012年3月の三館展覧会スケジュール
利用案内、地図
2011年8月30日発行
* 東日本大震災の影響により、展覧会スケジュール
に変更が生じたための、年度後半改定版



3
たいせつな風景 16・17合併号

編集・発行：神奈川県立近代美術館
制作：印象社
撮影・デザイン：矢萩喜從郎
21×14.8cm、表紙含め28ページ、無料配布
多色2図、単色17図
2011年10月22日発行

表紙・裏表紙 鎌倉館建築写真(撮影：矢萩喜從郎)
あいさつ (水沢勉)
「小自叙傳」より (イサムノグチ)
もう六十年たちましたか——鎌倉近美 (辻惟雄)
尽きることのない言葉たち——I.W氏に (吉増剛造)
「モボ・モガ展」の思い出 (ジェニファー・ワイゼンフェルド)
一つの映像をひもとして (岸田夏子)
ゆりかご以前 墓場以後 (中沢新一)
解説 坂倉準三設計《神奈川県立近代美術館 鎌倉館》(長門佐季)
編集後記



4

2010年度年報

編集・発行：神奈川県立近代美術館

製作：求龍堂

25.7×18.2cm、64ページ、無料配布、多色1図、
単色86図

2012年2月18日発行

あいさつ

展覧会活動

教育普及活動

作品蒐集管理活動

調査研究活動

運営・管理報告



5

2012年度展覧会スケジュール

編集・発行：神奈川県立近代美術館

制作：リーヴル

22.5×10cm、三つ折1回二つ折り1回1枚

無料配布、多色21図

三館展覧会スケジュール

利用案内、地図

2012年3月6日発行

2011年度の教育普及活動

是枝開

近年、美術館での教育普及活動はますます重要視され、美術館利用者の期待や要望も高まっている。当館でも2003年に葉山館が開館して以来、普及課が設けられ、子どもから大人まで幅広い年齢層の人々に、美術鑑賞を身近なものとし、美術がもたらす精神的な豊かさを日常の生活に結び付けることを目標に、教育普及活動を展開してきた。

その活動の三つの柱として、(1) 啓発普及事業、(2) 地域・学校との連携事業、(3) 美術館情報誌等の発行による情報発信事業がある。

(1) の啓発普及事業では、展覧会ごとの学芸員によるギャラリートークが活発に行なわれており、2011年度の回数は30回を数えている。さらに出品作家自身に会場で語っていただくアーティストトークを2回、それぞれの展覧会に詳しい専門家や関係者によるゲストトークを9回開催した。また各展覧会の関連企画として講演会やシンポジウム、コンサートやパフォーマンス、ワークショップを19回開催した。たとえば、葉山館で開催された「モホイ=ナジ/イン・モーション」展では、「影をつかまえる—フोटグラムワークショップ」を、「村山知義の宇宙」展では、パフォーマンス・イベント「新・劇場の三科 1925→2012」を行っている。あるいは「シャルロット・ペリアンと日本」展、「ベン・シャーン」展、「村山知義の宇宙」展では、海外からも専門家を招き、国際シンポジウムを開催した。これらの展覧会の関連企画は、教育普及という意義のみならず、歴史的な作家たちの活躍した時代の状況を彷彿とさせ、その世界をひろげる内容の企画でもあり、展覧会の周辺や一部を補完する重要な役割も担っている。

加えて、県立機関活用講座では、葉山館で開催した「現代美術の展開」展の時期に合わせて、「現代音楽の展開：1951-2011」と題し、1950年代から今日に至る現代美術の歩みと深く関わりのあった同時代の現代音楽をテーマに、全5回の連続講演会を開催した。第一線で活躍している音楽家たちを招き、それぞれの体験を踏まえつつ、音(サウンド)による現代音楽の可能性について語りつないでいく貴重な機会となった。

(2) の地域・学校との連携事業では、地域や学校による美術館の活用として、団体来館や教員研修、中学生・高校生による職業体験としての美術館の利用など、様々な形で事業を展開している。

まず、青少年が美術館を利用するために役立つツールとして、2011年度は当館のコレクションを使ったアートカードを制作し、「わくわくゆったりセット」として夏休みの時期、18歳以下の来館者に配布した。「Museum Box 宝箱」は、小・中学校のみならず、子どものための学習支援を目的とする団体などへの貸出しも増え、人と美術館を結ぶコミュニケーションの道具として大いに活用されてきている。また、継続して「宝箱」を使った当館学芸員による出張授業も活発に行なわれており、美術館を活用した教員対象の研修の際にも鑑賞学習のひとつの方法として「宝箱」の活用を促している。「先生のための特別鑑賞の時間」は、教員や学校関係者の鑑賞学習での美術館利用を支援するプログラムであるが、各展覧会と連動する形で計19回行い、美術館・博物館の活用を推進する学習指導要領の改変に対応したものとして評価が定着しつつある。また参加者の所属校との連携などにもつながっている。さらには葉山館における葉山芸術祭との連携や、性格を異にする近隣4館(鎌倉市楠木清方記念美術館、鎌倉市川喜多映画記念館、鎌倉国宝館、当館鎌倉館)が共同で行っている「キュレーターズ・ツアー」やスタンプラリーなど地域と連携した事業も継続している。また、学校との連携も継続しており、美術館内で授業を行う県立藤沢清流高校や鎌倉市立第一中学校の授業も11回行なわれている。

当館主催のイベントや学校連携事業以外の、2011年度の出張授業・教員研修・職業体験受入数は22件、そのほかに対応した団体来館の数は112件であり、美術館利用者の期待や要請の高さを示している。

2012年2月15日には、地域・学校との連携事業のさらなる拡がりや深化を目指して、公開研究会「鑑賞教育のひろがり」を行なった。会場には他館学芸員、美術史・美術教育を専攻する学生、ボランティアで美術教育に関わった方など、幅広い層から参加者が集まった。講師には「におい」を用いて作品制作・ワークショップを行なっているアーティスト・井上尚子氏を招いて、レクチャーやワークショップを実際に体験することで「におい」や「鑑賞」についての考えを深め、最後に参加者でディスカッションをした。多様な参加者がそれぞれの立場から「におい」をキーワードに広義の鑑賞について再考し意見を交わすことで、美術館という場で鑑賞学習を支援していくためのヒントを得る貴重な機会となった。

(3) の美術館情報誌等の発行による情報発信事業では、鎌倉館の開館60周年の記念号として『たいせつな風景』の第16・17合併号を発行して、「展覧会」をテーマに、記憶に残る鎌倉館でのいくつかの展覧会を取りあげ、岸田夏子氏や吉増剛造氏など関係の深い方々に執筆をお願いした。



1 「モホイ=ナジ/イン・モーション」展
「影をつかまえる—フोटグラム」
ワークショップ



2 「村山知義の宇宙」展「新・劇場の三科 1925→2012」
酒井幸菜氏



3 公開研究会「鑑賞教育のひろがり」

作品蒐集管理活動

購入・寄贈状況 2012(平成24)年3月31日現在

2010(平成22)年度末の総点数	11,903点
2011(平成23)年度の購入点数	6点
2011(平成23)年度の寄贈点数	194点
<hr/>	
2011(平成23)年度の取得総点数	200点
<hr/>	
2011(平成23)年度末の収蔵総点数	12,103点

寄託状況 2012(平成24)年3月31日現在

2010(平成22)年度からの更新分	69件	作品点数	237点
2011(平成23)年度中の解除分	4件*1	作品点数	10点
2011(平成23)年度の新規受入分	4件*2	作品点数	241点
<hr/>			
2011年度合計	70件	作品点数	468点

*1 4件の内3件は寄託継続あり

*2 4件の内2件は新規寄託者

2011年度 新収蔵作品一覧

凡例

・寸法について、原則として平面作品は縦×横の順に、立体作品は高さ×幅×奥行の順に記した。単位はcm(センチメートル)である。

但し、版画については、イメージ寸法の縦／支持体寸法の縦×イメージ寸法の横／支持体寸法の横の順に「/」で区切って記した。

・署名年記は、書き込みの位置を示して記した。印、落款は[]で記した。

・版画が台紙に貼付されている場合、台紙の寸法はイメージの寸法、支持体の寸法の後に「/」で区切って示した。

・素描のうち、台紙上に複数点添付または描かれている場合、「;」で列挙して記した。

購入

作家名	作品名	制作年	技法・材質	寸法(縦・高)	寸法(横・幅)	寸法(奥行)	署名年記・書込み等	備考
油彩・アクリル画など								
村山知義	美しき少女等に捧ぐ	1923頃	油絵具、布、カラー ジュ、カンヴァス	94.0	80.5	2.0		
素描・水彩画など								
小野元衛	ニコライ堂	1942	水彩、コンテ、鉛 筆、紙	37.1	26.9			
クリスチャン、アブラハム・デイヴィッド	全地	1982	オイルスティック、紙	77.5	106.5			
彫刻・インスタレーション								
砂澤ビッキ	午前三時の玩具	1988	木	36.0	25.0	20.0		
神奈川県近代美術館賞								
片山敏子	生 III	2011	油絵具、カンヴァス	131.0	162.5			第51回神奈川県女流美術家協会
山脇勇太	Preparation	2011	油絵具、カンヴァス	130.0	194.0			第47回神奈川県美術展近代美術館賞

寄贈

〈奥田真理氏寄贈〉

日本画

高橋虎山	水舎の図	1920	絹本着色	35.6	45.4			
------	------	------	------	------	------	--	--	--

素描・水彩画など

高橋力雄	稲毛海岸	1956頃	鉛筆、水彩、紙	24.2/26.4	19.5/20.4			右下：稲毛海岸 '56
高橋力雄	[無題]	不詳	墨、紙	7.2/17.5	4.2/9.3			
高橋力雄	読売新聞文化欄「人物再発見」カットのための原画 小村寿太郎像(1)	不詳	墨、紙	9.5/16.6	8.0/12.0			
高橋力雄	読売新聞文化欄「人物再発見」カットのための原画 小村寿太郎像(2)	不詳	墨、紙	10.2/16.6	6.9/12.0			
高橋力雄	読売新聞文化欄「人物再発見」カットのための原画 小村寿太郎像(3)	不詳	墨、紙	12.0/16.6	10.3/12.0			

作家名	作品名	制作年	技法・材質	寸法(縦・高)	寸法(横・幅)	寸法(奥行)	書名年記・書込み等	備考
高橋力雄	読売新聞文化欄「人物再発見」カットのための原画 小村寿太郎像(4)	不詳	墨、紙	12.2 / 16.6	8.5 / 12.0			
高橋力雄	読売新聞文化欄「人物再発見」カットのための原画 小村寿太郎像(5)	不詳	墨、紙	7.6 / 16.6	6.3 / 12.0			
高橋力雄	読売新聞文化欄「人物再発見」カットのための原画 小村寿太郎像(6)	不詳	墨、紙	10.0 / 16.6	10.5 / 12.0			
高橋力雄	読売新聞文化欄「人物再発見」カットのための原画 小村寿太郎像(7)	不詳	墨、紙	10.8	8.8			
高橋力雄	読売新聞文化欄カットのための原画(8)	不詳	墨、紙	11.9 / 16.6	7.3 / 12.0			
高橋力雄	読売新聞文化欄カットのための原画(9)	不詳	墨、紙	9.0 / 16.6	8.6 / 12.0			
高橋力雄	読売新聞文化欄カットのための原画(10)	不詳	墨、紙	8.5 / 16.6	8.7 / 12.0			
高橋力雄	読売新聞文化欄カットのための原画(11)	不詳	墨、紙	8.4	6.0			
高橋力雄	読売新聞文化欄「人物再発見」カットのための原画(12)	不詳	墨、紙	8.8 / 16.6	5.8 / 12.0			
高橋力雄	読売新聞文化欄カットのための原画(13)	不詳	墨、紙	8.7 / 12.0	13.5 / 16.6			
高橋力雄	読売新聞文化欄カットのための原画(14)	不詳	墨、紙	6.5 / 16.6	9.0 / 12.0			
高橋力雄	読売新聞文化欄カットのための原画(15)	不詳	墨、紙	7.8 / 16.6	6.4 / 12.0			

版画								
恩地孝四郎	赤い花(Fleur Rouge)	1950年代前半	木版、鉛筆、紙	10.7 / 14.8	9.3 / 11.8		左下：Fleur Rouge	
高橋力雄	[1958年年賀状試し刷り]	1957	木版、エンボス、紙	13.3 / 14.3	9.3 / 9.4			
高橋力雄	[1959年年賀状試し刷り] (1)	1958	木版、エンボス、紙	14.5 / 15.2	10.0 / 10.0			
高橋力雄	[1959年年賀状試し刷り] (2)	1958	木版、エンボス、紙	15.2 / 15.8	10.3 / 10.3			
高橋力雄	版画集《1》より (2)二十五時のアトリエ	1963	木版、紙	17.6 / 23.1	15.0 / 19.3			
高橋力雄	版画集《1》より (3)明るい想出	1963	木版、紙	19.2 / 24.1	15.8 / 18.3			
高橋力雄	1968年年賀状	1967	木版、鉛筆、紙	7.0 / 10.0	12.6 / 14.8			
高橋力雄	[1968年年賀状試し刷り]	1967	木版、紙、エンボス	14.8 / 14.8	10.0 / 10.0			
高橋力雄	[1969年年賀状試し刷り](1)(2)	1968	木版、エンボス、紙	8.3 / 14.8	9.1 / 10.0			
高橋力雄	1979年年賀状 (1)(2)	1978	木版、水彩、紙;水彩、紙	各14.7	各10.0			
高橋力雄	[1980年年賀状試し刷り]	1979	木版、インク、紙	9.2 / 9.2	11.8 / 13.3			
高橋力雄	[1981年年賀状試し刷り]	1980	木版、インク、紙	9.0 / 9.8	14.5 / 14.5			
高橋力雄	1991年年賀状 (1)～(8)	1990	木版、紙	各10.7 / 14.8	各7.3 / 10.0			
高橋力雄	1995年年賀状 (1)～(3)	1994	木版、紙	各11.7 / 14.8	各7.3 / 10.0			
高橋力雄	[年賀状試し刷り]	不詳	木版、鉛筆、紙	12.7 / 14.4	8.9 / 9.0			
高橋力雄	[あいさつ状試し刷り]	不詳	木版、紙	13.0 / 14.6	8.8 / 9.8			
高橋力雄	『時評』カット	不詳	木版、鉛筆、紙	10.3 / 14.8	6.0 / 10.2			
高橋力雄	[無題]	不詳	木版、紙	9.7 / 15.9	6.2 / 9.8			8枚あり
高橋力雄	[無題]	不詳	木版、紙	14.9 / 14.9	10.1 / 10.1			
高橋力雄	[試し刷り3種]	不詳	木版、紙	23.0;23.0;23.0	20.1;19.8;19.9			

書籍・スケッチブック								
高橋力雄	刷りメモ	不詳	スケッチブック、ペン、紙	32.2	25.0			

その他(資料)								
高橋力雄	[版木4種]	不詳	絵具、木	19.4/23.2/ 23.3/23.2	20.4/32.2/ 16.8/32.2			
	高橋力雄宛年賀状 一式	1950～1995	版画、紙など				2193点	
	高橋力雄 作品資料ファイル 一式	1953～1979頃	版画、写真、記事、カラスライド他	26.5×20.0×2.0他			21冊	
	高橋力雄 写真資料 一式	1953～1978頃	紙焼き写真	7.9×5.8他			14点	

作家名	作品名	制作年	技法・材質	寸法(縦・高)	寸法(横・幅)	寸法(奥行)	書名年記・書込み等	備考
	高橋力雄 文献資料 一式	1955-1997	印刷物、図録、雑誌	26.5×18.8 他			44点	

〈二見彰一氏寄贈〉

版画

二見彰一	『海のうた』とキーツの詩	1969	アクアティント、紙	36.8	55.8			
二見彰一	『室内ゲーム』とジェニングスの詩	1973	アクアティント、紙	36.8	55.8			
一原有徳	無題	1976/81	銅版、紙	13.9 / 23.8	11.0 / 19.9		左下：EP 1976 中下：pour.S.Futami '81 右下：I.Arinori	
一原有徳	無題	1960/79	銅版、紙	19.8 / 30.0	14.8 / 24.9			
一原有徳	無題	1978/79	銅版、紙	10.0 / 17.1	15.0 / 27.0			
一原有徳	無題	1960/81	銅版、紙	15.0 / 15.9	10.0 / 23.8			
一原有徳	RIW61	1971/80	銅版、紙	25.0 / 49.5	50.0 / 63.4			
一原有徳	XOA(2)	1982/98	銅版、紙	18.0 / 27.5	12.3 / 21.2			
一原有徳	NISI	1977	銅版、紙	10.0 / 28.2	10.0 / 18.7			
一原有徳	RON(r)	1974/82	銅版、紙	24.5 / 35.4	49.7 / 71.0			
ブルノフスキ、アルビン	木の塔	1977	エッチング、紙	12.7 / 25.0	9.9 / 17.0			
ブルノフスキ、アルビン	銅版画集『蔵書票』(1)	1985	エッチング、紙	10.0 / 29.1	9.8 / 21.5			
ブルノフスキ、アルビン	銅版画集『蔵書票』(2)	1985	エッチング、紙	11.1 / 29.1	7.9 / 21.5			
ブルノフスキ、アルビン	銅版画集『蔵書票』(3)	1985	エッチング、紙	9.9 / 29.1	7.4 / 21.5			
ブルノフスキ、アルビン	銅版画集『蔵書票』(4)	1985	エッチング、紙	10.9 / 29.1	7.4 / 21.5			
ブルノフスキ、アルビン	銅版画集『蔵書票』(5)	1985	エッチング、紙	9.7 / 29.1	12.6 / 21.5			
ブルノフスキ、アルビン	銅版画集『蔵書票』(6)	1985	エッチング、紙	9.7 / 29.1	12.7 / 21.5			
ブルノフスキ、アルビン	銅版画集『蔵書票』(7)	1985	エッチング、紙	16.8 / 29.1	11.2 / 21.5			
ブルノフスキ、アルビン	銅版画集『蔵書票』(8)	1980	エッチング、紙	11.1 / 29.1	7.9 / 21.5			
ブルノフスキ、アルビン	銅版画集『蔵書票』(9)	1982	エッチング、紙	9.2 / 29.1	6.7 / 21.5			
ブルノフスキ、アルビン	銅版画集『蔵書票』(10)	1982	エッチング、紙	9.8 / 29.1	7.4 / 21.5			
ブルノフスキ、アルビン	銅版画集『蔵書票』(11)	1983	エッチング、紙	9.6 / 29.1	8.2 / 21.5			
ブルノフスキ、アルビン	銅版画集『蔵書票』(12)	1985	エッチング、紙	11.6 / 29.1	15.9 / 21.5			
ブルノフスキ、アルビン	銅版画集『蔵書票』(13)	1985	エッチング、紙	11.0 / 29.1	7.7 / 21.5			
ブルノフスキ、アルビン	不詳	1989	エッチング、紙	16.7 / 33.0	12.0 / 24.9			
ブルノフスキ、アルビン	移民	1992	エッチング、紙	19.2 / 39.5	13.0 / 28.5			
ブルノフスキ、アルビン	アルジェリアの思い出	1992	エッチング、紙	19.1 / 39.5	13.0 / 28.5			
ブルノフスキ、アルビン	不詳	1992	エッチング、紙	15.8 / 29.0	9.8 / 20.8			
ブルノフスキ、アルビン	異端の森	1992	エッチング、紙	29.2 / 48.0	20.4 / 31.8			
ブルノフスキ、アルビン	ファイヴ デイズ ハリケーン	1992	エッチング、紙	40.0 / 52.2	29.0 / 38.0			

書籍・スケッチブック

二見彰一	詩画集『詩からの贈物 八木重吉の十一の詩と二見彰一の銅版画十葉』	2011	アクアティント、紙	25.5(冊子寸)	17.8(冊子寸)			10点組 E.A. 限定10部 銅版画用紙：BFKRIVES 構成・文印刷：二見彰一 銅版画・刷：二見彰一 (発行2011年6月)
------	----------------------------------	------	-----------	-----------	-----------	--	--	---

その他(資料)

二見彰一	風の城(原版2版)	1991	銅板	29.2	18.1			
二見彰一	カデンツァ・メランコリー(原版2版)	1993	銅板	22.0	30.1			
二見彰一	朝のホルン(原版2版)	1995	銅板	20.1	27.0			
二見彰一	地平へ(1)(原版2版)	1997	銅板	23.7	29.0			

〈鈴木悦子氏寄贈〉

素描・水彩画など

砂澤ビッキ	裸婦(1)	1980	鉛筆、水彩絵具、紙	25.2	20.3			右下：1980 BIKKY
砂澤ビッキ	裸婦(2)	1980頃	鉛筆、水彩絵具、紙	25.2	35.5			
砂澤ビッキ	裸婦(3)	1980頃	鉛筆、水彩絵具、紙	35.4	25.2			

作家名	作品名	制作年	技法・材質	寸法(縦・高)	寸法(横・幅)	寸法(奥行)	書名年記・書込み等	備考
砂澤ビッキ	裸婦 (4)	1980頃	鉛筆、水彩絵具、紙	25.2	35.4			
砂澤ビッキ	裸婦 (5)	1980頃	鉛筆、銀色グアッシュ、紙	25.2	20.3		右下: BIKKY.	
砂澤ビッキ	裸婦 (6)	1985	鉛筆、金色グアッシュ、紙	27.0	18.2		中下: BIKKY. 85.	
砂澤ビッキ	裸婦 (7)	1986	鉛筆、紙	36.3	25.7		中下: BIKKY. 86.1.	
砂澤ビッキ	裸婦 (8)	1986	鉛筆、紙	36.3	25.7		右下: BIKKY. 86.1.	
砂澤ビッキ	裸婦 (9)	1986	鉛筆、紙	36.3	25.7		右下: BIKKY. 86.1.	
砂澤ビッキ	裸婦 (10)	1986	鉛筆、紙	36.3	25.7		右下: BIKKY. 86.1.	
砂澤ビッキ	裸婦 (11)	1986	鉛筆、紙	36.3	25.7		右下: BIKKY. 86.1.	
砂澤ビッキ	裸婦 (12)	1988	鉛筆、紙	36.3	25.7		右下: 1988	
砂澤ビッキ	裸婦 (13)	1988	鉛筆、紙	36.3	25.7		中下: BIKKY. 88.7.3	
砂澤ビッキ	裸婦 (14)	1988	鉛筆、紙	36.4	25.7		中下: BIKKY. 88.7.3	
砂澤ビッキ	裸婦 (15)	1988	鉛筆、紙	25.7	36.4		右下: BIKKY. 88.7.6	
砂澤ビッキ	裸婦 (16)	1988	鉛筆、紙	36.4	25.7		右下: BIKKY. 1988.7.6	
砂澤ビッキ	裸婦 (17)	1988	鉛筆、紙	36.4	25.7		右下: BIKKY. 1988.7.7	
砂澤ビッキ	裸婦 (18)	1988	鉛筆、紙	36.4	25.7		右下: 1988.7.24 BIKKY.	
砂澤ビッキ	裸婦 (19)	1988	鉛筆、紙	36.4	25.7		右下: 1988.7.24 BIKKY.	
砂澤ビッキ	裸婦 (20)	1988	鉛筆、紙	36.4	25.7		左下: BIKKY. 88.7.	
砂澤ビッキ	裸婦 (21)	1988	鉛筆、紙	36.4	25.7		中下: BIKKY. 88.7.	
砂澤ビッキ	裸婦 (22)	1988	鉛筆、紙	25.7	36.4		右下: 1988.7 BIKKY.	
砂澤ビッキ	裸婦 (23)	1988	鉛筆、紙	36.4	25.7		右下: 1988.7 BIKKY. 右下: BIKKY 88.7	
砂澤ビッキ	裸婦 (24)	1988	鉛筆、紙	36.4	25.7		右下: BIKKY. 88.7.	
砂澤ビッキ	裸婦 (25)	1988	鉛筆、紙	36.4	25.7		右下: BIKKY. 1988.7.	
砂澤ビッキ	裸婦 (26)	1988	鉛筆、紙	25.7	36.4		右下: BIKKY. 88.7	
砂澤ビッキ	裸婦 (27)	1988	鉛筆、紙	36.4	25.7		右下: BIKKY. 88.7.	
砂澤ビッキ	裸婦 (28)	1988	鉛筆、紙	36.4	25.7		右下: BIKKY. 88.7.	
砂澤ビッキ	裸婦 (29)	1988	鉛筆、紙	36.4	25.7		中下: BIKKY. 88.7.	
砂澤ビッキ	裸婦 (30)	1988	鉛筆、紙	36.4	25.7		右下: BIKKY. 88.7.	
砂澤ビッキ	裸婦 (31)	1988	鉛筆、紙	36.4	25.7		右下: BIKKY. 1988.7.	
砂澤ビッキ	裸婦 (32)	1988	鉛筆、紙	36.4	25.7		中下: BIKKY. 1988.	
砂澤ビッキ	立てる人物	1988	鉛筆、紙	36.4	25.7		中下: BIKKY. 1988.	
砂澤ビッキ	人物	1988	鉛筆、紙	36.4	25.7		右下: 88.7.24. BIKKY.	

〈柚木沙弥郎氏寄贈〉

素描・水彩画など

柚木沙弥郎	夜の絵 (1)～(16)	2005	布、紙、コラージュ	39.5/42.5 (台紙寸)他	47.5/60.5 (台紙寸)他		16点組 柚木沙弥郎(コラージュ)・村山亜士(文『夜の絵』(慧星社、2005)のためのオリジナルコラージュ)	
柚木沙弥郎	雉女房	2005	水彩絵具、紙	34.8/42.5	49.7/57.0		上巻8点、下巻9点、経本折り	

彫刻・インスタレーション

柚木沙弥郎	トコ	2004	鉄、塗料	140.0	198.0	160		
柚木沙弥郎	トコ	2004	布、紙	175.0	83.5	71.0		
柚木沙弥郎	ゲーゲー	2004	糸	90.0	65.0	43.0		
柚木沙弥郎	キキ	2004	アダンの葉	210.0	150.0	10.0		

工芸

柚木沙弥郎	型染布	1982	型染、綿	330.0	122.0			
柚木沙弥郎	広巾布	1982	型染、綿	240.0	125.0			

作家名	作品名	制作年	技法・材質	寸法(縦・高)	寸法(横・幅)	寸法(奥行)	書名年記・書込み等	備考
柚木沙弥郎	型染布(広巾布)	1982	型染、綿	300.0	114.0			
柚木沙弥郎	型染布	1982	型染、綿	300.0	110.0			
柚木沙弥郎	型染布	1982	型染、綿	650.0	87.0			
柚木沙弥郎	地紋	1987	型染、綿	320.0	135.0			
柚木沙弥郎	萌	1992	型染、綿	250.0	90.0			
柚木沙弥郎	線	1990	型染、絹	200.0	122.0			
柚木沙弥郎	型染タペストリーII	2005	型染、綿	340.0	116.0			
柚木沙弥郎	型染タペストリー2009	2009	型染、綿	236.0	285.0			

〈田淵充氏寄贈〉

版画

田淵安一	詩画集『L'instant d'après』より (1)~(3)	1997	木版、紙	28.9(17.0/ 28.2:15.0/ 28.2:13.6/ 28.2)	18.4(12.2/ 35.3:13.9/ 17.6:12.6/ 35.3)		—	テキスト：エドモンド・ジャベス(Edmond Jabès) 1/70 刊：Folle Avoine 全6シートうち3点木版画あり。
田淵安一	詩画集『Le livre des âmes abandonnées』より (1)~(3)	1997	木版、紙	28.9(23.0/ 28.2:23.0/ 28.2:13.6/ 28.2)	18.4(15.4/ 17.6:14.4/ 36.1:14.6/ 18.5)		—	テキスト：アラン・ケルヴェルン(Alain Kervern) 47/50 刊：Folle Avoine 全7シートうち3点木版画あり。
田淵安一	詩画集『峨山國奇嵩譜』	1986	エッチング、紙	26.8/50.2他	20.8/26.5他		すべて左下：4/30 右下：Tabuchi 86	15点組 タウトウ入り 刊：Clot, Bramsen et Georges par Vincent Moreau
田淵安一	[無題]	1987	シルクスクリーン、紙	25.7/25.7	46.0/46.0		右下：11/80 Tabuchi 87	右下：エンボス[SCREEN PRINTING]

〈島端謙吉氏寄贈〉

版画

ミレー, ジャン=フランソワ	種まく人	1851頃	エッチング、紙	20.5	15.0			
ルオー, ジョルジュ	道化師の口上 版画集『サルタンバンク』より	1926	リトグラフ、紙	33.5	21.5			
ルオー, ジョルジュ	廃墟すら滅びたり 版画集『ミゼレーレ』より	1926	銅版画	57.5	44.5			
ルオー, ジョルジュ	植民地行政官 版画集『ユビュ親父の再生』より	1928	銅版画	26.8	17.0			
ルオー, ジョルジュ	見世物小屋の呼び込み 版画集『グロテスクな人物達』より	1927頃	リトグラフ、紙	30.5	21.0			
ルオー, ジョルジュ	街はずれのキリスト 版画集『パッション』より	1935	銅版画	29.8	20.3			
ルオー, ジョルジュ	キリストとユダ 版画集『パッション』より	1935	木版、紙	30.0	20.0			
ルオー, ジョルジュ	ナザレの村 版画集『パッション』より	1935	木版、紙	29.8	19.8			
ルオー, ジョルジュ	不詳 『流れる星のサーカス』より	1938	木版、紙	29.8	19.8			

〈田中岑氏寄贈〉

油彩画・アクリル画など

田中岑	女の一生	1957	壁画	451.0	360.5			
素描・水彩画など								
田中岑	女の一生(習作1~8)	1957	パステル、紙	55.0	37.4			

〈淀井彩子氏寄贈〉

油彩画・アクリル画など

若林砂絵子	Untitled [Works2]	2002-2004	油絵具、カンヴァス	200.0	202.0			
若林砂絵子	Untitled [Works10]	2002-2004	油絵具、カンヴァス	194.0	129.0			
若林砂絵子	Untitled [Works12]	2008	油絵具、カンヴァス	195.0	115.0			
版画								
若林砂絵子	無題	不詳	エンブレイヴィング、紙	44.2/66.0	54.4/50.0			
若林砂絵子	無題	不詳	エンブレイヴィング、紙	44.6/57.0	34.9/38.3			

作家名	作品名	制作年	技法・材質	寸法(縦・高)	寸法(横・幅)	寸法(奥行)	書名年記・書込み等	備考
若林砂絵子	無題	不詳	ドライポイント、紙	30.3/39.3	33.1/57.2			
若林砂絵子	無題	不詳	エングレーヴィング、紙	49.8/50.5	54.0/66.2			
若林砂絵子	無題	不詳	エングレーヴィング、紙	58.5/67.0	45.0/50.2			

〈高島順子氏寄贈〉

油彩画・アクリル画など

関合正明	ポルトガル風景	不詳	油絵具、カンヴァス	15.7	23.8		右下：sekiai	
関合正明	ブライヤサンタクルス村	不詳	油絵具、カンヴァス	15.9	22.8		右下：sekiai	
関合正明	ざくろ	不詳	油絵具、カンヴァス	14.2	17.8		右下：sekiai	
関合正明	桜島	不詳	油絵具、カンヴァス	37.8	45.7			
関合正明	風景(ポルトガル)	不詳	油絵具、カンヴァス	31.7	40.8		右下：sekiai	

〈宮城洋児氏寄贈〉

素描・水彩画など

砂澤ビッキ	無題：1988.3.2	1988	鉛筆、紙	25.0	777.0		最後部：1988.3.2. BIKKY	
砂澤ビッキ	無題：1988	1988	鉛筆、紙	25.0	1422.0		最後部：BIKKY 1988	
砂澤ビッキ	午前三時の動物記	1988	鉛筆、紙	25.0	1210.0		最後部：1988 午前三時の動物記 BIKKY	
砂澤ビッキ	無題：未完	1988	鉛筆、紙	25.0	2172.0			

〈青木裕子氏寄贈〉

その他(資料)

	実験工房第2回発表会 現代作品演奏会[パンフレット]	1952年1月20日	インク、紙	25.7	19.0			
	実験工房第4回発表会[パンフレット]	1952年8月9日	インク、紙	25.7	18.1			
	20世紀音楽研究所 第2回現代音楽祭[パンフレット]	1958年8月20日-23日	インク、紙	25.7	18.1			

〈児玉靖枝氏寄贈〉

油彩画・アクリル画など

児玉靖枝	深韻一雨二	2010	油絵具、カンヴァス	194.0	130.3			
児玉靖枝	深韻一雨三	2010	油絵具、カンヴァス	194.0	130.3			
児玉靖枝	深韻一雨四	2010	油絵具、カンヴァス	194.0	130.3			

〈栗田政裕氏寄贈〉

書籍・スケッチブック

栗田政裕	『イマジオ&ポエティカ』第36号	2011	木口木版、紙	22.0(11.2 / 19.0; 14.3 / 22.0)	18.0(7.6 / 15.8; 9.8 / 18.0)		(2点とも)左下：36/99 mas.kurita	2点木口木版あり。《木蓮・阿修羅》(燐華)制作：ボックスウッドクリエーション刊行：イマジオ&ポエティカ
栗田政裕	『イマジオ&ポエティカ』第37号	2012	木口木版、紙	22.0(9.0 / 15.2; 13.0 / 22.0)	17.7(5.3 / 10.3; 10.0 / 17.7)		(2点とも)左下：36/99 mas.kurita	2点木口木版あり。《神護寺 業師如来立像》(散華)制作：ボックスウッドクリエーション刊行：イマジオ&ポエティカ

〈阪本透氏寄贈〉

油彩画・アクリル画など

阪本文男	雪稜	1955頃	油絵具、カンヴァス	72.7	100.0			
阪本文男	私風景	1986	油絵具、カンヴァス	130.4	162.3			

〈石川俊雄氏寄贈〉

素描・水彩画など

小野田宇花	裸婦デッサン	1950年代後半	オイルスティック、紙	40.0	29.9			
-------	--------	----------	------------	------	------	--	--	--

作家名	作品名	制作年	技法・材質	寸法(縦・高)	寸法(横・幅)	寸法(奥行)	書名年記・書込み等	備考
〈井関正昭氏寄贈〉 彫刻・インスタレーション								
毛利武士郎	手の中の眼	1955	セメント	28.0	21.0	12.0		
〈井上寛子氏寄贈〉 彫刻・インスタレーション								
井上信道	ミセス・ジョンソン	1960	石膏、彩色	46.0	38.5	15.0		
〈岡部牧夫氏寄贈〉 油彩画・アクリル画など								
高間惣七	不詳	1933	油絵具、板	33.4	45.5		右下：一九三三惣七	
〈北川原京子氏寄贈〉 油彩画・アクリル画など								
藤田嗣治	横たわる裸婦	1926	油絵具、カンヴァス	53.0	63.8			
〈北代誠氏寄贈〉 彫刻・インスタレーション								
北代省三	模型飛行機	1970年代	木、ゴム、絹布、真鍮、鉄、プラスチック	28.2	180.0	113.0		
〈橋川雄一氏寄贈〉 彫刻・インスタレーション								
柳原義達	長寿の鳩	1981	ブロンズ	35.8	39.0	16.0		
〈アブラハム・デイヴィッド・クリスチャン氏寄贈〉 彫刻・インスタレーション								
クリスチャン、アブラハム・デイヴィッド	彫刻	1982	土	118.0	33.0	35.0		
〈早房響子氏寄贈〉 版画								
藤牧義夫	1935年年賀状 佐藤哲三宛	1934-35	多色木版、紙	13.9	8.7			
〈鶴 正代氏寄贈〉 版画								
上村松篁	花野	1970年代	岩絵具、紙	31.4	50.9			
〈兵藤和男氏寄贈〉 油彩画・アクリル画など								
兵藤和男	森	1977	油彩、カンヴァス	65.0	80.0			
〈山梨俊夫氏寄贈〉 油彩画・アクリル画など								
中上清	無題	1992	アクリル、カンヴァス	224.0	123.0	5.0		



村山知義

美しき少女等に捧ぐ

1923年

94.0×80.5cm

油絵具、布、コラージュ、カンヴァス



藤牧義夫

1935年年賀状 佐藤哲三宛

1934-35年

13.9×8.7cm

多色木版、紙



小野元衛

ニコライ堂

1942年

37.1×26.9cm

水彩、コンテ、鉛筆、紙



若林砂絵子

Untitled [Works2]

2002-04年

200.0×202.0cm

油絵具、カンヴァス



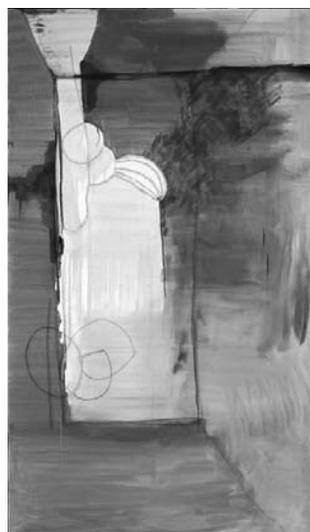
若林砂絵子

Untitled [Works10]

2002-04年

194.0×129.0cm

油絵具、カンヴァス



若林砂絵子

Untitled [Works12]

2008年

195.0×115.0cm

油絵具、カンヴァス



柚木沙弥郎

上：グーグー

2004年

90.0×65.0×43.0cm

毛糸

下：トコ

2004年

175.0×83.5×71.0cm

布、紙

(村山亜土作『夜の絵』とともに 柚木沙弥郎展
会場風景 2012年4月6日-6月10日 鎌倉別館)

館外貸出作品一覧

開催初日が2011年4月1日から2012年3月31日までの展覧会に限る

件数	点数	作家名(作品名)	「展覧会名」会場(会期)
1	1	牛島憲之《タンクの風景》	「開館30周年記念特別展 牛島憲之一至高なる静謐」渋谷区立松涛美術館(4月5日-5月29日)
2	2	川端実《作品B》	「生誕100年 川端実展」横須賀美術館(4月23日-7月3日)
	3	川端実《緑のなかのフォルム》	
3	4~8	寄託(油彩) 5点	「ワグマンが見た海—洋の東西を結んだ画家—」神奈川県立歴史博物館(6月11日-7月31日)
	9	チャールズ・ワグマン《二人の日本人女性》	
4	10	チャールズ・ワグマン《妻カネ》	
4	11	荻須高德《ル・ベック(パリ郊外)》	「生誕110年記念 荻須高德展—憧れのパリ、煌めきのベネチア—」名古屋・松坂屋美術館(6月11日-7月3日)、稲沢市荻須記念美術館(10月29日-12月18日)、東京・日本橋三越(12月27日-2012年1月16日)
	12	李禹煥《点より》	
6	13	南桂子《冬枯》	「生誕100年 南桂子展」高岡市美術館(6月24日-7月31日)、武蔵野市立吉祥寺美術館(8月20日-10月10日)、佐倉市立美術館(10月22日-11月27日)、群馬県立館林美術館(12月10日-2012年4月8日)
	14	南桂子《ひまわり(少女とひまわり)》	
	15	南桂子《カニと少女》	
	16	南桂子《箆を抱く少女》	
7	17	青山義雄《湖のほとり》	「親子で楽しむ美術館 集まれ! おもしろどうぶつ展」横須賀美術館(7月16日-8月28日)
	18	古賀春江《サーカスの景》	
8	19	藤田嗣治《二人裸婦》	「開館20周年記念展 花ひらくエコール・ド・パリの画家たち—パスキン、そしてシャガール、フジタ、ローランサン……」平塚市美術館(7月16日-9月4日)
9	20	三岸好太郎《海と射光》	「生誕100年記念 炭九展」宮崎県立美術館(7月16日-8月28日)埼玉県立近代美術館・うらわ美術館(9月10日-11月6日)
	21	リュシアン・クートー《八月の広場》	
	22	リュシアン・クートー《夜の顔》	
10	23	江見絹子《むれ(2)》	「輝く女たち—その強さ、儚さ、複雑さ」茨城県立近代美術館(7月30日-9月11日)
	24	荘司福《若い群》	
	25	片岡球子《よこたわる裸婦 A》	
	26	片岡球子《よこたわる裸婦 B》	
11	27	寄託(油彩)	「画家たちの 二十歳の原点」碧南市藤井達吉現代美術館(8月9日-9月19日)、足利市美術館(9月25日-11月13日)
12	28	向井良吉《アフリカ木》	「抱きしめたい! —近代日本の木彫展」高岡市美術館(8月10日-9月19日)、碧南市藤井達吉現代美術館(10月4日-11月13日)、広島県立美術館(11月29日-2012年1月15日)
	29	江口週《楸形の碑》	
13	30	伊庭靖子《Untitled》	「トリック&ユーモア展」横須賀美術館(9月10日-11月6日)
14	31	オーギュスト・ロダン《花子のマスク》	「音二郎没後100年・貞奴生誕140年記念 川上音二郎・貞奴展」茅ヶ崎市美術館(9月10日-11月27日)
15	32	岸田劉生《初夏の麦畑と石垣》	「生誕120周年記念 岸田劉生展」大阪市立美術館(9月17日-11月23日)
	33	岸田劉生《近藤医学博士之像》	
	34	岸田劉生《童女図(麗子立像)》	
	35	岸田劉生《村娘》	
16	36	オディロン・ルドン《『聖アントワヌの誘惑』第1集 3……そして空から舞い降りた大きな鳥が彼女の髪のでっぺんに襲いかかる…》	「世紀末、美のかたち—ルドン、ゴッゲンからガレ、ラリックまで—」府中市美術館(9月17日-11月23日)
	37	オディロン・ルドン《『聖アントワヌの誘惑』第1集 4……彼はブロンズの壺を持ち上げる》	
	38	オディロン・ルドン《『聖アントワヌの誘惑』第1集 5……つづいて魚の胴体に人間の頭をもつ奇妙な生き物が現れた》	
	39	オディロン・ルドン《『聖アントワヌの誘惑』第1集 6……それはバラの冠をいただいた死者の頭である。それが真珠のように白い女の胴体の上ののっている…》	
	40	オディロン・ルドン《『聖アントワヌの誘惑』第1集 9……いたるところで腫が縮をはく》	
	41	オディロン・ルドン《『聖アントワヌの誘惑』第3集 9……私は孤独のうちに沈んだ 私は私のうしろの木に住んでいた》	
	42	オディロン・ルドン《『聖アントワヌの誘惑』第3集 17……彼は奈落の底へまっさかさまに落ちる》	
	43	オディロン・ルドン《『聖アントワヌの誘惑』第3集 18……アントワヌ: これらすべてのものの目的は何だろうか? 悪魔: 目的なんぞありはしない!》	
	44	オディロン・ルドン《『聖アントワヌの誘惑』第3集 21……精霊のようなものをしばしば天空に見た》	
	45	オディロン・ルドン《『聖アントワヌの誘惑』第3集 23……オケアノスはさまざまな人々が住んでいる》	
17	46	坂倉準三《布張り応接椅子》	「DOCOMOMO Japan150—未来への遺産—Future and Legacy展」行幸地下ギャラリー(9月23日-10月3日)
18	47	熊谷守一《きんけい鳥》	「小さな画面に無限の世界 熊谷守一展」福井市美術館(10月1日-11月6日)、北九州市立美術館分館(2012年1月2日-2月12日)、瀬戸内市立美術館(2012年2月29日-4月10日)、伊丹市立美術館(2012年4月14日-5月27日)
19	48	上村松篁《杜若》	「没後10年 上村松篁展」松伯美術館(10月4日-11月27日)

件数	点数	作家名《作品名》	「展覧会名」会場(会期)	
20	49	松本竣介《山王山風景》	「松本竣介とその時代」大川美術館(10月8日-12月11日)	
	50	松本竣介《構図》		
	51	松本竣介《工場》		
	52	松本竣介《電気機関車》		
21	53	《両界受茶羅(胎藏界)》	「鎌倉×密教」鎌倉国宝館(10月15日-11月27日)	
	54	《両界受茶羅(金剛界)》		
	55	《歡喜天受茶羅》		
	56	《五秘密菩薩図》		
22	57	《愛染明王図(木下翔近コレクション)》	「愛染明王-愛と怒りのほとけ-」神奈川県立金沢文庫(10月15日-12月4日)	
23	58	佐伯祐三《滞船》	「素顔の佐伯祐三と山田新一展」都市立美術館(10月15日-12月4日)	
24	59	内田巖《港》	「昭和モダン 藤島武二と新制作初期会員たち展」神戸市立小磯記念美術館(10月15日-2012年1月9日)、川崎市立美術館(2012年1月28日-3月20日)	
	60	内田巖《母の像》		
	61	内田巖《鷺》		
25	62	伊東深水《荻江寿友像》	「伊東深水展」平塚市美術館(10月22日-11月27日)	
26	63	安井曾太郎《家族》	「めぐ絵画-日本のヌード1880-1945展」東京国立近代美術館(11月15日-2012年1月15日)	
27	64	中村正義《ピエロ》	「日本画壇の風雲児 中村正義 新たな全貌展」名古屋美術館(11月1日-12月25日)、練馬区立美術館(2012年2月19日-4月1日)	
	65	山口蓬春《御堂供養》		
28	66	山口蓬春《扇面古写経》全22点より4点	「山口蓬春記念館20周年特別展II 新興大和絵会・六潮会における模索-戦前の画業を中心に-」山口蓬春記念館(11月18日-2012年1月22日)	
	67	山口蓬春《立夏》		
	68	山口蓬春《まなづる一羽》		
	69	山口蓬春《ねむる小犬》		
	70	山口蓬春《六潮版画 風》(雪風)		
	71	中村岳陵《六潮版画 風》(春の微風)		
	72	福田平八郎《六潮版画 風》(西風)		
	73	麻生三郎《自画像》(1935年)		「20世紀検証シリーズNo.3 池袋モンパルナス展」板橋区立美術館(11月19日-2012年1月9日)
74	麻生三郎《モンマルトル》			
75	鶴岡政男《死の静物(松本竣介の死)》			
76	松本竣介《建物》			
77	松本竣介《自画像》			
78	寄託(油彩)			
79	村山槐多《静物(壺)》	「村山槐多の謎展-山本鼎と謎の大作をめぐって」岡崎市美術博物館(12月3日-2012年1月29日)		
80	村山槐多《風船をつく女》			
81	山本鼎《哥路》			
31	82	有馬さとえ《やすめる女》	「開館30周年記念特別展 渋谷ユートピア 1900-1945」渋谷区立松涛美術館(12月6日-2012年1月29日)	
32	83	原精一《桜島熔岩》	「九州新幹線全線開業記念 特別記念展 桜島百景-画家たちが見つけた桜島-」鹿児島市立美術館(2012年1月2日-2月5日)	
	84	伊東深水《雪の夜(下図)》		
33	85	伊東深水《つまびき(下図)》	「伊東深水展」島根県立美術館(2012年1月2日-2月13日)	
	86	伊東深水《荻江寿友像》		
	87	陳卓堃(陳広)《魯迅像》		「特別展覧会 中国近代絵画と日本」京都国立博物館(2012年1月7日-2月26日)
88~103	鄭野夫《連環図》 16点			
104	山口蓬春《鮎》	「山口蓬春記念館20周年特別展III 新日本画への道すじ-戦後の画業を中心に-」山口蓬春記念館(2012年1月27日-3月25日)		
105	山口蓬春《瓶花シクラメン》			
106	山口蓬春《青沼新秋 小下図》			
107	山口蓬春《西瓜とレモン 下図》			
35	108		山口蓬春《鉄仙》	
	109		山口蓬春《ハニワ》	
	110		山口蓬春《紅葉 下図》	
	111		山口蓬春《鉢に桃》	
	112		山口蓬春《スケッチブック10「戦中スケッチ、山湖、望郷」》	
36	113		上村松篁《杜若》	「生誕110年記念 上村松篁展」田辺市立美術館(2012年2月11日-3月25日)
	114		上村松篁《蘭》	
37	115		黒田清輝《逗子五景》	「正岡子規と美術展」横須賀美術館(2012年2月11日-4月15日)
38	116	加藤栄三《石庭》	「平成23年度市川市東山魁夷記念館特別展 加藤栄三-東山魁夷と市川をつなぐ盟友の歩み-」市川市東山魁夷記念館(2012年2月24日-4月15日)	
	117	片岡球子《面構 足利義満》		
39	118	片岡球子《面構 徳川家康公》	「特別展 片岡球子-生命あふれる」香雪美術館(2012年3月17日-5月6日)	
	119	片岡球子《面構 安藤広重》		

当館を含む巡回展への貸出作品

件数	点数	作家名《作品名》	「展覧会名」会場(会期)
1	120	Ludwig Kassak and Moholy-Nagy, Buch Neuer Künstler, 1922 (仲田文庫、以下同)	「視覚の実験室 モホイ=ナジ/イン・モーション」神奈川県立近代美術館 葉山(4月16日-7月10日) 京都国立近代美術館(7月20日-9月4日)、DIC川村記念美術館(9月17日-12月11日)
	121~133	Baubausbücher 1-11, 13-14, 1925-1929	
	134	Moholy-Nagy 60photos ,edited by Franz Roh, 1930	
	135~137	Die Neue Linie, May 1931, December 1931, October 1932	
	138	Moholy-Nagy, Vision in Motion, 1938	
	139	Moholy-Nagy, The New Vision ,1947	
2	140	ベン・シャーン《砂あらし》	「ベン・シャーン クロスメディア・アーティスト」神奈川県立近代美術館 葉山(12月3日-2012年1月29日)、名古屋市美術館(2012年2月11日-3月25日)、岡山県立美術館(2012年4月8日-5月20日)、福島県立美術館(2012年6月3日-7月16日)
	141	ベン・シャーン《移民(デザイン・8)》	
	142	ベン・シャーン《河船(デザイン・9)》	
	143	ベン・シャーン《松葉杖と女》	
	144	ベン・シャーン《ピーターと狼》	
	145	ベン・シャーン《ワルシャワ》	
	146	ベン・シャーン《花を持つ男》	
	147	ベン・シャーン《不屈の精神/[自筆の詩篇とデッサン]》	
	148~171	ベン・シャーン《版画集：リルケ「マルテの手記」》24点組	
3	172~181	藤牧義夫《新版画》より 10点	「生誕100年 藤牧義夫展—館林に生まれた創作版画の異才」群馬県立館林美術館(7月16日-8月28日) 「生誕100年 藤牧義夫展—モダン都市の光と影」神奈川県立近代美術館 鎌倉(2012年1月21日-3月25日)
	182	藤牧義夫《白鬚橋》	
	183	藤牧義夫(1935年年賀状 佐藤哲三宛)	
	184	恩地孝四郎『日本の現代版画』創元社、1953年	
	185	小野忠重『日本版画美術全集 第7巻 現代版画 I 明治-昭和』講談社、1962年	
	186	『近代日本の版画』展出品目録、東京国立近代美術館、1967年	
	187	『藤牧義夫遺作版画展』図録、かんらん舎、1978年 (青木文庫)	
	188	洲之内徹『帰りたい風景』新潮社、1980年	
	189	洲之内徹『さらば気まぐれ美術館』新潮社、1988年	



1. 修復前 剥落防止の養生が貼ってある



2. 修復前 裏



3. 絵具層の亀裂、浮き上がり



4. カビの繁殖跡



5. 浮き上がり接着作業



6. 充填整形



7. 修復後



8. 修復後 裏

作者：ベニート＝キンケラ・マルティン

作品名：溶鉱炉

油絵具、カンヴァス

制作年：1935年

寸法(mm)：1250×1049×30

修復前の所見

本作品は絵具の浮き上がりがひどく、2003年、鎌倉館から葉山館への作品移動の際に、絵具の剥落防止のために和紙の小片と水性接着剤(メチルセルロース)にて、浮き上がり部分の養生を行いその状態で保管してあった(図1)。絵具層の浮き上がりや亀裂はほぼ全面に見られる。浮き上がりは地塗り層を伴ったものと、重ねて塗られた層の層間剥離と2種類があるが、特に黒褐色と赤褐色の部分に顕著に見られる(図3)。絵具層全体の固着が非常に悪い状態である。また、白いカビの繁殖した跡も全面にみられるが、本作品は2003年に燻蒸にて殺菌処置が施されている(図4)。作品は作者のもとにある時から剥落を起こしていたとみられ、剥落箇所油絵具で施した加筆が多くみられる。画面全体に汚れの付着も見られる。

支持体である画布はたわみが大きく、絵具の亀裂、剥落の進行の要因ともなりかねない。また絵具の厚みの影響で変形を起こしている。木枠は楔付きであるが四隅の組みにゆるみがあり、強度も不足している(図2)。

施工処置

1. 剥落防止の養生紙を除去した。
2. 厚い絵具層の浮き上がり箇所にはアクリル系接着剤(バラロイドB72)を筆でさし、溶剤が揮発した後に、温風機で絵具を温めながら平らにして接着した(図5)。薄い絵具層の浮き上がり箇所は、膠で接着した。
3. 画面の汚れを希アンモニア水で除去した。
4. 画面周辺部の絵具を和紙と水性接着剤で養生をし、画布を木枠から外した。
5. 裏面を清掃し、エタノールで殺菌した。
6. 加湿、加温を行いながら支持体の変形を修正した。
7. 新調した楔付き木枠に張り込んだ(図8)。
8. 剥落箇所に炭酸カルシウムを水性接着剤で練った充填剤を詰め、余分な充填剤を除去したあと、周辺部の絵具の凹凸に合わせて整形した(図6)。
9. 充填箇所を水彩絵具と溶剤型アクリル系絵具で補彩をした(図7)。
10. ワニスを塗布し、画面保護とともに光沢むらを調整した。
11. 新調した額と裏板を装着した。

修復後の所見

全面に見られた絵具の浮き上がりが接着され、画面の平面性が復活した。絵具層の固着不良の箇所も固着が強化されて、安定した画面となった。また、カビの繁殖跡や汚れも除去され、さらに加筆による変色や光沢むらも修正されて、展示に堪える画面となった。

本修復の主な作業は、専門研究員の指導の下、インターン研修生の土師広が担当した。

作者：新井勝利

作品名：少女像

絹本、着色

制作年：不詳

寸法(mm)：本紙 1561×852 骨下地寸法 2060×1165

修復前の所見

本作品は骨下地に張り込まれ額装されていた。本紙周囲の縁裂地は劣化し極めて脆弱であり、右下隅に破れを生じていた。裏面の裏貼紙は中央部分に大きく天地方向の裂けを生じていた。骨下地は表裏側ともに下層から、骨子張、裏貼(二遍)、裏押え、浮張の4層の下貼りが行われており、浮張以外は書道半紙の反古紙が使用されていた。反古紙は茶褐色に変色し脆くなっており、本紙側の裏貼と裏押えは左右方向に破れていた。骨子は杉材で框の見込みが5.5分(17mm)、見付け7分(21mm)。組子は縦子が5本、横子が14本、見込みが5分(15mm)、見付け6分(18mm)、両端の横子が框側に寄せて組まれており、中央付近の組子のあわせに若干の歪みがあった。額は前丸型で四隅は角丸組、骨下地の框に釘で固定されていたが釘は錆びており弛みが生じていた。

本紙は画面全体が褐色を帯び、特に背景部分は茶褐色のしみが顕著であった。灰色の斑点状のしみも全体に散在していた。左辺の中央下寄り位置に白抜けしたようなしみがあつた。絵具層の厚い部分(人物の顔、手、上着)には左右方向への亀裂が多数生じ、浮き上がりと剥落を引き起こしていた。緑色絵具が厚塗りされている葉部分は、浮き上がった絵具層が皿状に変形していた。葉の緑色、黄土色、スカートの青色、頭髮の黒色は極めて脆弱で、水に容易に溶解する状態であった。スカート部分には、絵具の擦れ、引っ掻き傷の他、構図とは関係のない黒色の線が描かれていた。天地方向に裏打ち紙の継ぎが入っており、画面に凸状の筋となって現れていた。

修復処置

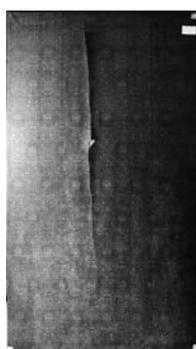
1. 画面の埃を柔らかい刷毛で払った後、背景部分の汚れをケミカルスポンジを使用して除去した。
2. 絵具層の固着が脆弱な部分に膠水溶液を繰り返し含浸し定着させた。絵具層の厚い部分の浮き上がりには膠水溶液を筆で差し入れ、吸取り紙を当てた上から重しを置いて圧着した。
3. 旧裏打ち紙除去作業中の本紙保護のためレーヨン紙で表打ちを行った後、本紙を骨下地から取り外し、裏面を上にして仮張り板に固定した。
4. 本紙には肌裏打ちと増裏打ちが行われていた。旧裏打ち紙は茶褐色に変色しており、部分的に非常に濃い色を呈していた。湿らせた吸取り紙を当てて加湿し、裏打ち糊をゆるませて裏打ち紙を除去した。肌裏打ちの糊は固く接着力が強く、水分を含むと粘性を持ち、本紙支持体の絹の織り目に入り込んで除去が困難であった。
5. 新たに本紙の肌裏打ちおよび増裏打ちを行った後、新調した裂地を周囲に取り付け、全体の総裏打ちを行った。
6. 骨下地から旧下貼り紙を除去し、新たに下貼りを行った。骨下地は再使用し、下層より骨子張、胴貼、裏貼(二遍)、裏押え(裏側2層)、浮張(表側2層)、清貼の7層の下貼りを行った。
7. 下貼りの完了した骨下地に本紙を張り込み、裏側には新調した裏打ち済みの裂地を張り込んだ。

修復後の所見

褐色を帯びていた画面は、表面のほこり汚れと旧裏打ち紙の除去によって全体的に明るくなり、灰色の斑点状のしみもほとんど目立たなくなった。固着状態が悪く脆弱であった絵具層は、強化処置により安定した状態となった。骨下地は縁裂地、裏貼紙、下貼りに破れが生じて不安定な状態であったが、新たに下貼り層を増やして貼り直し、縁と裏貼を裂地で新調したことによって、本紙を支える十分な強度を得ることができた。



1. 修復前 表



2. 修復前 裏 側光線写真
裏貼紙の中央部分が天地方向に大きく裂けている



3. 修復前 部分 しみ
背景部分に白く抜けたしみがある



4. 修復前 部分 人物顔
顔部分に左右方向への亀裂が筋状に観察される



5. 修復中 ドライクリーニング作業途中
クリーニングによって汚れが除去された部分が、明るくなったのがわかる



6. 修復中 骨下地から本紙取り外し後
裏打ち紙が茶褐色に変色している様子がわかる



7. 修復中 骨下地 旧下貼り紙除去途中
下貼り紙には書道半紙の反古紙が使用されていた



8. 修復中 本紙 総裏打ち後



9. 修復後 表

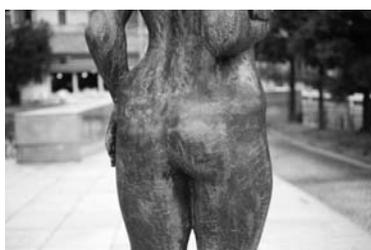


10. 修復後 裏

作者：柳原義達
 作品名：犬の唄
 ブロンズ
 制作年：1983年
 寸法(mm)：600×600×h2000



1. 修復前 顔や胸など、生成した緑青の色調差が、アンバランスになっている。



2. 腹部周囲に帯状の変色がみられる。



3. 高生分解性洗剤による洗浄。



4. 硫化系薬品水溶液による色調変換。

修復前の状態

本作品は顔・胸・腹・腕などにかけて、パテアンバー色の下地色から浮き出るように、ペールトーンの緑色が発色している。これらは銅合金の腐食生成物によるものであり、塩基性硫酸銅(Brochantite)あるいは硫酸鉛(Anglesite)などによる演色反応と見られる。原因としては排気ガス、大気中のSOx、海塩、地金組成、 casting 仕上げ時の色付け(パティネーション)等の複合的なものが考えられる。また太陽光・雨水がどのような方向からどれだけの影響を及ぼしているのか、経時変化も考慮する必要がある。一般的には水平面に面積の広い緑青の発生が見られ、垂直面には水道に沿った条痕の発生が見られるが、当該作品には顔正面が垂直面であるにもかかわらず、広範囲な緑青発生が観察され、パティネーションの劣化が他の複合的な劣化要因と結びついたものと考えられる。

腹部の帯状に見える変色部分は溶接痕である。同一比合金の溶接であっても低融金属(亜鉛が顕著な例)が溶接中先に金属ガスとなり、合金比が変わってしまい、前述のさまざまな化学的反応に対し、微妙な色差が生ずる結果となり、この帯のような状態となった。

またこの作品は全体にかさついた汚れを纏った状態となっており、適切な保存処置が必要と考えられた。

施工処置

1. 洗浄 高生分解性洗剤を希釈して使用。
2. 色調変換 硫黄・硫化カリウムを主体とした薬品水溶液で濃茶系色調に変換。
3. 水洗いー乾燥 薬品の過剰反応を抑えるために、徹底した水洗いと、反応を平均化させるために、全体をまんべんなく拭き取る。乾燥後一晩置き、薬品反応を落ち着かせる。
4. 薬品反応観察 全体として破綻無く濃茶色調は安定している。
5. コーティング① 色調調整 ニトロセルロース系クリアラッカーに微少顔料を混入したものを使用。これにより硫化系薬品の過剰反応を抑える。
6. コーティング② 防錆処置 主剤 ベンゾトリアゾール含有、インクラック
 希釈剤 インクラックシンナー
 硬化遅延剤 リターダー
7. コーティング③ 艶調整 上記インクラックに艶調整剤(フラットベース)
8. コーティング④ 蜜蝋の塗布、リグロイン希釈液使用
 蜜蝋を用いることにより、コーティング層①②を保護し、また撥水性があるため雨水・結露から作品を保護する。
 高温期には退色保護の効果が期待でき、僅かな艶は表面の隆起をおだやかに強調する。全面塗布後光沢調整を行う。

修復後の所見

表面のアンバランスな色調印象から、深みのある落ち着いた色調のブロンズ像に改善された。ワックス塗布・光沢調整により表面の色調は僅かな艶とともに、良好に回復した。また表面は良好な撥水性を得た。



5. インクラックコーティング



6. ワックスコーティング(蜜蝋)



7. 修復後

2011年度 修復作品一覧

*外部委託による修復は受託者を記した。標記のないものは当館修復担当者による。
*他館収蔵作品は調査研究のための修復

作家名	作品名	寸法(mm) h:高さ	制作年	種別	修復者
柳原義達	犬の唄	600×600×h.2000	1983	彫刻	(有)ブロンズスタジオ
番浦有爾	穹	770×700×h.2020	1991	彫刻	(有)ブロンズスタジオ
番浦有爾	風	1000×700×h.1450	1990	彫刻	(有)ブロンズスタジオ
向井良吉	アフリカの木	472×355×h.686	1956	彫刻	(有)修復研究所21
イサム・ノグチ	広島原爆慰霊碑マケット	585×286×h.524	1952年頃	彫刻	文化財修復工房「明舎」
新井勝利	少女像	1561×852	不詳	日本画	増田絵画修復工房
佐藤敬	少年像	733×533	不詳	油彩画	増田絵画修復工房
ベニート=キンケラ・マルティン	溶鉱炉	1250×1049	1935	油彩画	
有馬さとえ	やすめる女	729×609	1911	油彩画	
藤間清	丹沢風景	316×406	1940年頃	油彩画	
加山四郎	風景	800×995	1940	油彩画	
オディロン・ルドン	聖アントワヌの誘惑 第3集No.12 叡知は私のものだ 私は仏陀になった	320×220	1896	版画	
オディロン・ルドン	聖アントワヌの誘惑 第3集No.13 ……そして頭を待たない目が軟体動物の ようにただよっていた	310×224	1896	版画	
オディロン・ルドン	聖アントワヌの誘惑 第3集No.14 オアンネス:私は混沌のなかの最初の 意識として物質を固まらせ形をきめる ために深淵の中から現れた	279×217	1896	版画	
オディロン・ルドン	聖アントワヌの誘惑 第3集No.15 ここによき女神がいる イデ山脈のイデ山に	148×130	1896	版画	
オディロン・ルドン	聖アントワヌの誘惑 第3集No.16 私は常に偉大なるイニスである 何人も私の ヴェールを持ち上げた者はいない わが生かせる果実は太陽である	282×204	1896	版画	
オディロン・ルドン	聖アントワヌの誘惑 第3集No.17 彼は奈落の底へまっさかさまに落ちる	278×212	1896	版画	
オディロン・ルドン	聖アントワヌの誘惑 第3集No.18 アントワヌ:これらすべてのものの目的は 何だろう? 悪魔:目的なんぞありはしない	311×250	1896	版画	
オディロン・ルドン	聖アントワヌの誘惑 第3集No.19 老女:何を恐れるのか? 広く暗い穴だ! それは多分からっぽだろう?	162×108	1896	版画	
オディロン・ルドン	聖アントワヌの誘惑 第3集No.20 死:おまえを救えるのは私だ 抱き合おう	303×211	1896	版画	
オディロン・ルドン	聖アントワヌの誘惑 第3集No.21 ……精霊のようなものをしばしば天空に見た	261×182	1896	版画	
オディロン・ルドン	聖アントワヌの誘惑 第3集No.22 ……革袋のように丸い海の動物	222×190	1896	版画	
オディロン・ルドン	聖アントワヌの誘惑 第3集No.23 オケアノスにはさまざまな人々が住んでいる	310×230	1896	版画	
オディロン・ルドン	聖アントワヌの誘惑 第3集No.24 ついに陽が昇った……そして太陽の 円光のなかにイエス・キリストの顔が輝く	270×263	1896	版画	
高橋由一	西周像(津和野町郷土館蔵)	1070×759	1893	油彩画	当館修復担当者 および 増田久美



高橋由一

西周像
津和野町郷土館蔵 島根県指定文化財
1893年
1070×759mm
油彩画



有馬さとえ

やすめる女
1911年
729×609mm
油彩画



ベニート=キンケラ・マルティン

溶鉱炉
1935年
1250×1049mm
油彩画



藤間清

丹沢風景
1940年頃
316×406mm
油彩画

調査研究活動

研究・調査報告

一通の手紙から伝わる年齢差を越えた友情

資料紹介：佐野繁次郎宛金山康喜書簡

橋秀文

この度、佐野繁次郎の甥にあたる鹿海信也氏から佐野繁次郎の資料を提供された。現在整理中で、神奈川県立近代美術館に寄贈されることになる予定である。その中に佐野繁次郎宛金山康喜書簡が1通含まれており、1950年代パリで制作活動に励んだ二人の画家の関係を明らかにする貴重な資料と判断したことから、今回、年報で公開することにした。不明だった画家たちの当時の行動を少しでも明確にすることができると確信している。この資料公開にあたり、提供して下さった鹿海信也氏をはじめ、公開許可の承諾いただいた金山康喜の妹綿貫千重子氏、さらに、公開に向けて労を取って下さった富山県立近代美術館学芸課長杉野秀樹氏に感謝申し上げます。

まず、書簡の全文を紹介する。

1枚目

謹啓

前後二回に亘る御便り嬉しく拝見致しました。カフェドラパイで佐野さんに御馳走になりそこねて残念です。それにしても第一のお便りの中に見えます「その買上げ書を紙はさみにはさんでそれを見せて、……」云々のくだりはまことに文中白眉とも申すべく、サノ・レアリスムでありまして、そのあまりにリアルなので実行する気が起こりません。何だかカフェでヴァン プランでも飲みながら佐野先生のお色話を拝聴している様なものであります。

今、毎日新聞から毎日新聞を送って来ました。どうせ例の買上事件が出ているものと覚悟しながら開いてみると、案定、覚悟していましたがそれよりも大げさに出ているので閉口であります。とたんに憂うつで何事もおっくうです佐野先生も苦い顔して居られると思ふと二重に憂うつです「ルーブル入り」等といふに至っては全く小生の知らない事です。外に書きようがないのでせうか。いつか新聞の人にお会いになりましたら、この買上げの意味、本当の所を説明していただければ幸いです。併しうちのおやじがこの新聞見たら少しは小生の絵を尊重してくれるかも知れんといふたつた一つの利点がある

2枚目

だけで他は全く閉口です。もしこの新聞記事お目に止りましたら、「有田ドラッグ」の広告でも見るつもりでお見逃し下さい。但しこの誇大広告は小生の責任ではありません。

といふわけですから憂うつでおっくうになりましたから今日はこれで失礼致します。

巴里はこの所、一週間といふもの、街中霧だらけ夜等三米先が見えません。今はよくダンフェール迄、モンスーリ公園を通過して散歩します。ダンフェールの交差点の便所のとなりマロン屋が店を出しています。小生は目下炭火の焔を静物の中に採用するため焔の状態を観察かたがた栗をよく買求に行きます。併し大抵は計畫倒れでこの静物画失敗してます。

それでは又お便りします。 敬具

金山康喜

佐野先生

Monsieur S.SANO
chez PAPILIO
145,Azabuhonmura-cho
Minato-ku
Tokio
Japon

Exp. Y.Kanayama
Maison du Japon
9.Bd Jourdan
Paris 14ème
France



図1. 金山康喜から佐野繁次郎に宛てた書簡(パリ 1953年11月17日消印、東京 1953年11月24日消印)

佐野繁次郎(1900-1987)と金山康喜(1926-1959)の関係を見ておこう。佐野繁次郎は、1900(明治33)年に大阪・船場の墨問屋の長男として生まれた。大阪・信濃橋洋画研究所で絵を学び、戦前は、二科展に出品した。パリの留学体験としては、1937(昭和12)年、始めて渡仏。翌年一時帰国し、再度渡仏。1939(昭和14)年帰国。そして、金山康喜と出会うことになる1951(昭和26)年に再びフランスに渡っている。その年に、アンリ・トロンシュ画廊で個展を開催し、53(昭和28)年に帰国。以後何度かフランスと日本を行き来している。金山康喜は、1926(大正15)年、こちらも大阪市西区に生まれている。佐野繁次郎は、生前、東京に住みついてからも大阪弁を使っていたという。金山康喜は、友人の思い出の文章をよむと、普段は共通語を使用していたが、リラックスした状態などになると、大阪弁が顔を出したという。知り合ったのは、お互いが戦後パリに渡ってからで、1951年6月に金山康喜がフランスに入り、フランス語を学ぶ学校に通い始めた9月ごろに佐野繁次郎の知遇を得たと思われる。年の差は26歳ということで、親子ほど離れている。田村泰次郎の言葉によると『『ぼくの師匠は、佐野先生や』という言葉も、金山君自身の口から、何度も聞かされた。佐野繁次郎氏には、佐野氏がこの前パリにいたときも、絵を見てもらっていたようだ。』(田村泰次郎『密室の画家』金山康喜遺作展委員会編『金山康喜』求龍堂 1960年)というように、大阪弁で親しく語り合う父親のような存在であり、また、絵画の先生といった存在でもあったわけだ。

まず、第1節を見てみる。

「前後二回に亘る御便り嬉しく拝見致しました。カフェドラパイで佐野さんに御馳走になりそこねて残念です。それにしても第一のお便りの中に見えます「その買上げ書を紙はさみにはさんでそれを見せて、…

…」云々のくだりはまことに文中白眉とも申すべく、サノ・レアリスムでありまして、そのあまりにリアルなので実行する気が起こりません。何だかカフェでヴァンプランでも飲みながら佐野先生のお色気話を拝聴している様なものであります。」

カフェドラペイ(カフェ・ド・ラ・ペイ:Café de la Paix)というのは、パリの有名な喫茶店兼レストランで、オペラ座の前にある。内装はオペラ座同様、シャルル・ガルニエが担当しているという。歴史あるしゃれたレストランで、若い金山は何度か佐野からこのレストランで、御馳走になったことがあるのだろう。佐野は、若い友人に御馳走するのが好きだったようだ。慶応の学生だった加藤宗哉氏が佐野繁次郎から御馳走になった話を『三田文学』(1999年No.56冬季号の編集後記)に記している。若い金山も年配の佐野からしばしば御馳走を受けていたようだ。佐野からの第一便の便りの「買上げ書」というのは、1953(昭和28)年5月の第64回アンデパンダン展に、前年のサロン・ドートンヌ展で落選となった作品《静物》を出品し、その作品が秋に、3万2千フランでフランス国に買い上げられたのだが、その折の契約書のことを指している。その譲渡売契約書の図版は、1960年に求龍堂から出版された金山康喜作品集の図版目録の頁に掲載されている。「その買上げ書を紙はさみにはさんでそれを見せて、……」云々のくだりはまことに文中白眉とも申すべく、サノ・レアリスムでありまして、そのあまりにリアルなので実行する気が起こりません。」という文面からは、買い上げに戸惑うところのあった金山康喜に対して佐野繁次郎が、「紙挟みにはさんで」といった冷やかしにも近い冗談を若くて生真面目な金山に与えているのがよく読みとれる。サノ・レアリスムといった反応は、この場限りで使用した用語なのか、それとも周辺の人々が通常使っていた言葉なのか、判断ははっきりとつかないが、大阪船場の商家の出身である佐野繁次郎の現実主義に即した生き方を示した言い方なのだろう。多くの人に、買い上げを受けた画家ということ、買上げ書をちらつかせて、注目を浴びるように催促した仕方が、金山をたじろがせた。そして、冗談がきつすぎて、本気にすることができず、その忠告は、「何だかカフェでヴァンプランでも飲みながら佐野先生のお色気話を拝聴している様なものであります」と締めくくっている。白葡萄酒を飲みながらお色気話を聞いているという喩えは、非現実的なんだといたいのであろう。佐野のお色気話というのは、本人は得意だったらしい。いずれにせよ、この第1節では、金山康喜の純情さと佐野繁次郎の懐の深さが対比されている。

次に第2節を見てみよう。

「今、毎日新聞から毎日新聞を送って来ました。どうせ例の買上事件が出ているものと覚悟しながら開いてみると、案定、覚悟していましたがそれよりも大げさに出ているので閉口であります。とたんに憂うつで何事もおっくうです佐野先生も苦い顔して居られると思ふと二重に憂うつです「ルーブル入り」等といふに至っては全く小生の知らない事です。外に書きようがないのでせうか。いつか新聞の人にお会いになりましたら、この買上げの意味、本当の所を説明していただければ幸いです。併しうちのおやじがこの新聞見たら少しは小生の絵を尊重してくれるかも知れんといふたった一つの利点がある

2枚目

だけで他は全く閉口です。もしこの新聞記事お目に止りましたら、「有田ドラッグ」の広告でも見るつもりでお見逃し下さい。但しこの誇大広告は小生の責任ではありません。

といふわけですっかり憂うつでおっくうになりましたから今日はこれで失礼致します。」

毎日新聞の記事というのは、1953年11月17日付の「フランス文部省に買上げられた金山康喜氏の作品」の記事のことである。佐野繁次郎は、1953年の夏ころ、パリから帰国している。その直後から、化粧品会社パピリオ(旧社名は「胡蝶園」)から重役兼デザイナーとしての役職を請われており、

社名の改名から化粧品の包装のデザイン、広告全般のことなどアドバイスをしていたといわれている。麻布のパピリオ社屋のなかに佐野のためのアトリエが設けられ、そこで彼は自由に制作にあたっていた。この金山の書簡は、まさにパピリオ内の佐野のアトリエに宛てて送られている。フランス文部省からの買い上げが、現地にいる日本人画家からすればそれほど驚嘆すべきことではないとの認識でいることが分かる。ただ、金山は、経済学を学びにパリに来ていたわけで、父親からは、好きな絵ばかり描いてないで、学問に身を入れて取り組んでほしいと思われていたのだろう。この記事が、世間が絵描き金山を評価していると父親に見せることができると思ったというのだ。

この誇大広告ともいえる毎日新聞の記事には閉口だというのが、それに譬えられた「有田ドラッグ」というのは、大正時代に性病治療薬と称して偽薬を大々的に新聞などで広告し、巨万の富を築いた有田音松という男の薬局の名前のことで、そうしたインチキ商法のことを指しているのである。そのインチキ商法は、いずればれてしまい、有田なる男は、その後、姿を消したという。毎日新聞がインチキな記事を書いたというのではないのだが、恥ずかしがり屋で純情な金山としては、毎日新聞の記事を金山自身が売名行為から新聞社をそそのかせて記事にさせたと思われてはたまらないと考えたのであろう。この憤りは計り知れないものであったようだ。一通り、この事件のことについて弁明の文章を書きつづけたわけである。そして最後の第3節では、佐野に自身の絵画制作の近況を伝えているが、こちらも金山の芸術への探究の一面を見せており、これはこれでとても興味深いものがある。最後に第3節を見てみよう。

「巴里はこの所、一週間といふもの、街中霧だらけ夜等三米先が見えません。今はよくダンフェール迄、モンスーリ公園を通過して散歩します。ダンフェールの交差点の便所のとなりマロン屋が店を出しています。小生は目下炭火の焔を静物の中に採用するため焔の状態を観察したたがた栗をよく買求に行きます。併し大抵は計畫倒れでこの静物画失敗してます。

それでは又お便りします。 敬具」

11月下旬ともなるとロンドンだけではなくパリも霧で覆われる日が多くなるようだ。当時、金山康喜は、パリのシテ・ユニヴェルシテール内の日本館に住んでいた。パリの南に位置するこの大学都市から北の方に道路を横切ると公園がある。モンスーリ公園である。その公園を通り抜けるとダンフェールという街に出る。そして、パリの初冬の風物詩といえる焼き栗が売られ始めている。彼は自身の静物画に描きこむ焔をどのように描けばいいか、本物の炭火の焔が見られる焼き栗屋に出かけて行っては、焔を観察するのである。本人は失敗したといっているが、その後、成功したといっているのか、静物画に焔を描きこんだ作品が残されている。現在、京都国立近代美術館に所蔵されている《静物(焼栗の屋台)》(図2)がそれであろう。この頃の模索している様子から察するに、完成したのは翌年になってからと思われる。写真のなかに装飾性を持ち込み、象徴主義的な静物画を描きだし始めようとしたのだろうか。



図2. 金山康喜《静物(焼栗の屋台)》1953-54年 油彩、カンヴァス 京都国立近代美術館蔵



図3. 佐野繁次郎《画家の肖像(死んだ画家)》1959(1964加筆)年 油彩、カンヴァス 神奈川県立近代美術館蔵



図4. 金山康喜《静物[コーヒーポットのある静物]》1954年 油彩、カンヴァス 富山県立近代美術館蔵

結局、1959(昭和34)年6月16日に急逝した金山康喜の死を知り、佐野繁次郎は、《画家の肖像(死んだ画家)》(図3)を制作し、同年秋の二紀会展にタイトルは《死んだ画家》と題して出品した。その後、1964年に加筆され、その際にタイトルは《画家の肖像》と改められている。現在、当館では、《画家の肖像(死んだ画家)》の題名で呼んでいる。求龍堂の『金山康喜画集』のNo.8の《静物[コーヒーポットのある静物]》(図4)などのイメージが佐野繁次郎の脳裏に強く残っていたものと見え、この《画家の肖像(死んだ画家)》に見られる画家の周辺に描かれた裸電球や葡萄酒の瓶などは、金山の静物画でよく扱われたモチーフであり、いわば、金山康喜のアトリビュート(属性)として捉えることもできよう。

金山が佐野に抱いていた敬愛の情は、この一通の書簡からも十分感じることができる。そして、佐野にしても金山の死を悼んで、絵筆を握ったことに対して、若き友人の死への憤りにも似た悲しみの感情を抱いていたことが分かる。親子ほどの年の差を感じつつも芸術家同士の友情の念も感じさせる二人の交友を、今回紹介した一通の書簡から十分感じ取ることができよう。

三本松倫代

2012年に葉山館で開催され、以後国内3館を巡回した「すべての僕が沸騰する 村山知義の宇宙」展^{註1)}は、1920年代の東京を舞台に「マヴォ」や「三科」といった新興芸術運動を牽引し、プロレタリア運動への傾倒から演劇に活動の主軸を移した1930年代以降も晩年まで児童画や装幀の仕事、そして油彩による肖像画などを手がけた村山知義(1901-1977)について、1923年から1931年に展開された美術とその周辺の仕事を中心に、時代背景や影響関係を伝えるために他の作家の作品も交えてその生涯を紹介した、初の大規模な回顧展となった。

展覧会の開催に際し、巡回館の各担当学芸員と関係者・研究者らで構成された村山知義研究会^{註2)}が、村山知義の長男亜士氏の未亡人である村山江江氏が館長を務める東京のギャラリーTOMに保存されている村山旧蔵資料の調査を行った。主な内容は、油彩や挿絵原画等の絵画をはじめ、装幀を手がけた書籍・雑誌類、1930年代プロレタリア運動関連のポスター等、いずれも数十点におよぶオリジナル作品ともいえる資料類と、ドイツから帰国し芸術活動を開始した1923年から没年の1977年(3月死去)まで村山本人によって作成された190余冊のスクラップブック、そして数百点のクラフト封筒に個別整理された原稿・写真・印刷物の類である。

大正新興芸術期の作家によって形成された一次資料としては、東京都現代美術館美術図書室に収められた柳瀬正夢旧蔵資料、板橋区立美術館所蔵の河辺昌久旧蔵資料等が知られている。同時代の演劇関係では、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館に千田是也の旧蔵資料が寄贈されている。村山知義旧蔵資料もまた、これらに並ぶ貴重なものであり、展覧会終了後に当館へ寄託された部分については近い将来にデジタルデータを公開できることを視野に入れ、調査・整理活動の継続を予定している。

展覧会の制作過程で改めて認識されたのは、村山自身が自らをめぐらゆる事象を収集し、その生前から公共財としての自己開示を繰り返してきた点であった。本稿では、村山知義のアーカイヴ活動について紹介し、その性質について考察したい。

展示でも大きな存在感を示した村山のスクラップブックは、A4サイズ(一部B4)の既製品が使用されている。表紙に通し番号が墨書きされており、欠本のNo.1(複写現存)とNo.3、28を除く、1925-26年のNo.2から1976年のNo.189まで(No.143、144は各2冊)の188冊に番号外の6冊を含む194冊が現存している。自筆および劇評など他筆による新聞・雑誌記事の切り抜き、舞台・映画の番組や入場券、スチール写真、劇団報のほか、婦人・児童雑誌掲載の挿図やカット類、紙製玩具附録等が貼り込まれている(図1)。『新潮』『文藝公論』等に掲載された小説や戯曲など、頁数の多いものはその性質上スクラップブックには収められていないが、掲載誌の新聞広告等が貼り込まれている。演劇関係のパフレットなどは冊子体を現物のまま貼り込まれたものが多い。全般にわたり構想段階のメモのようなものは含まれず、公開媒体の記録に徹しているが、紙焼き写真などは非公開のスナップショット的な記録も一部に収められている。

村山によれば、これらのスクラップブックは1940年の検挙の際に当局に没収され、2年後に請求して返却された際に左翼演劇活動関係の資料が剥ぎ取られていたという。また、その後に貸出し等で剥がしたものを、遡らずに最新号へ戻しているため、早いものほど不正確であるという^{註3)}。

村山知義の戦前の美術作品は、その大半を戦災で焼失したために児童画以外は15点程が現存するに留まる。展覧会では図版が確認できたすべての造形作品を写真パネルで展示し、その際に原寸を考察して空間的復元を試みたが、これを可能にしたのは、村山がその活動初期から精力的な執筆・出版活動を行い、個展目録や『現在の藝術と未来の藝術』(長隆舎、1925年)をはじめとする自著や雑誌記事等で作品の写真図版を掲載してきたことによる。

展覧会の準備調査のなかで、発表が確認されていない2点の作品の紙焼き写真を発見し、会場パネルおよび図録で紹介することができた(図2、図3)。いずれも1922-23年頃の初期作品であり、貴重な作例を示すものといえる。今回は美術作品に留まったが、今後、マヴォの活動後期に参加した『MaVo染織図案集』(マリヤ書房、1927年)のように掲載図版の作家が同定できていない作品について、スクラップブック掲載の関連記事から検証していきたい。

多くの資料が残る一方で、村山知義の日記として現物を確認できているのは1926年から1929年まで4年分の「卓上備忘録」(名刺大の日めくり形式)に留まる。判型が示すとおり、その記載情報もごく僅かなメモにすぎない。大正期新興芸術運動およびプロレタリア演劇活動の記録としてしばしば研究論文の典拠とされる村山の自伝、『演劇的自叙伝』(東方出版社(1-3)/東京芸術座(4)、1974-1977年、全4巻)は、著者が文中でしばしば言及するように、自らのスクラップブックと書簡等資料を参照し転記して叙述されている。一次資料を失った1923年以前のドイツ滞在時に関する記述に事実誤認(劇場の場所や名称の取り違え等)が散見されるのはこのためであろう。

『演劇的自叙伝』は、演劇専門誌『テアトロ』に1965年4月(32巻4号)より同名で連載した内容を書籍化したものである。0歳以前、すなわち祖父母の家系の説明に始まり、村山の成長を追って展開するこの自伝は、1977年3月に村山が逝去したことで、同年5月の411号に掲載の連載第115回をもって、内容的には1937年の時点で中断終了した。



図1. スクラップブック(No.2) 1925-26年 表紙と内部

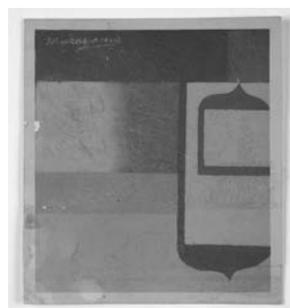


図2. 村山知義《コンストラクション》1922年頃 図版紙焼き写真 ギャラリーTOM蔵



図3. 村山知義《殉教者の死》1923年 図版紙焼き写真 ギャラリーTOM蔵

註1) 2012年2月11日-3月25日 神奈川県立近代美術館 葉山、4月7日-5月13日 京都国立近代美術館、5月26日-7月1日 高松市美術館、7月14日-9月2日 世田谷美術館。

註2) 村山知義研究会のメンバーは岩崎清(ギャラリーTOM副館長)、滝沢恭司(町田市立国際版画美術館学芸員)、山田志麻子(うらわ美術館学芸員)、山野英嗣(京都国立近代美術館学芸課長)、牧野裕二(高松市美術館学芸員)、石井幸彦(世田谷美術館首席学芸員)、嶋田紗千(世田谷美術館学芸員)、水沢勉(当館館長)、三本松倫代(当館学芸員)、朝木由香(同)、西澤晴美(同)および事務局として美術館連絡協議会。2010年度より開催各館の所蔵作品・関連資料をはじめとする外部資料の調査を行い、展覧会と図録の構成を共同で検討するとともにこれを分担して担当した。ギャラリーTOM所蔵の村山資料は葉山館で保管し、定期的に研究会による内容調査を行った。

註3) 『演劇的自叙伝』2巻、東邦出版社、1974年、169-170頁。

あまり註釈されていないが、書籍版の『演劇的自叙伝』は第4巻に103章の「32歳/1933年(10)」(連載1回分を1章として所収)までを収録し、『テアトロ』掲載時の第102回から第115回の方は未刊行に留まっている。雑誌連載と書籍の2章分の番号のずれは、第4巻の刊行時に雑誌未掲載の書簡再録を追加したことによる。連載102～115回分では1932-33年の獄中書簡(第299信から第306信)、転向小説の端緒とされた「白夜」の制作経緯、「新劇大同団結」と新協劇団の旗揚げ、1936年にPCL(現東宝)で監督した映画「接吻の責任」が言及され、1937年2月に手がけた新派公演2本の記述で終わっている。

もつとも、全体の少なからぬ部分をなして挿入される「死亡通知」——連載当時60-70代の村山が執筆中に訃報に接した同時代人に寄せる回想や批評——の、戦前から執筆当時まで時代を下る記述を考慮に入れば、『演劇的自叙伝』は1970年代に至る20世紀現代史として再検証されなければならないだろう。

また、村山が戦前に執筆していたもうひとつの「演劇的自序傳」(以下「自序伝」)についても、改めて本文を確認した。もとより新発見といった情報ではないが、従来殆ど顧みられることのなかったこの文献について、新旧の差異を紹介しておきたい。

戦後の稿と同じく『テアトロ』の1939年9月(61号)から1940年6月(70号)まで7回にわたり不定期に掲載された最初の「自序伝」については、村山自身が『演劇的自叙伝』(以下「自叙伝」)第1巻(1974年)の「あとがき」でこれに言及し、その中断の理由を、大東亜戦争前のファシズムの時代にプロレタリア演劇についての記述が憚られたのと共に、様々な人間関係を慮って執筆に支障が多かったためとしている(425-6頁)。

「知さんが芝居をやるようになったと云うことは、どう考えても不思議です。」(原文は旧仮名遣い、以下同)という母の述懐を冒頭に置き、「自叙伝」と同様に家系の詳述に始まって1926年9月の心座第4回公演の「兄を罰せよ」に関する記述で中断された戦前の「自序伝」は、「厳密に演劇に限った」(前掲「あとがき」という後年の言葉に反して「映画と演劇」への言及が多い。1922年のドイツ滞在についても、第1回デュッセルドルフ国際美術展と国際革新芸術家連盟会議への参加については簡単に言及しているが、大未来派展への参加や自らの個展(永野芳光との二人展)に関する記述は出てこない。美術についてはグロス、カンディンスキー、アーキペンコの名(および舞踏のインペコーフェン)と、古典への感激としてクラナッハ、デューラー、レオナルドの名を挙げるに過ぎない。ベルリン最初の記憶として語られるのは、到着の晩に和達知男の迎えでツォー駅前の宿に入り、翌日向いのウーファ・バラスト(映画館)へ「フリードリヒ大王」を観に和達に連れて行ってもらったという、「自叙伝」にはないエピソードである。註4)

帰国後の個展からマヴォ、三科を経て築地での舞台美術と葵館の装飾等、美術から演劇への移行期をカバーしながらも、全体的に美術活動の記述はごく簡略に留まる。ただし、「本郷三丁目の岡田三郎助の画塾へデッサンをやりに通ったのもそのころ[1920年2月]のことだ。」註5)という記述は、「自叙伝」の『『太平洋洋画研究所』』といったか『川端画塾』といったか、ともかく、ペンキ塗り二階建ての、洋画研究所があり註6)と同定されていない情報が補遺するものとして注目される。この外観が、岡田三郎助(1869-1939)が1912年に本郷春木町で設立した本郷洋画研究所であるか、確証を取りたいと考えている。

このほか、「自叙伝」ではY・Nと略称される永野芳光(東郷青児の妻の弟として言及)の名が、「自序伝」ではドイツ時代の交友として和達知男とともに実名で挙げられている。永野に対する村山の心情的態度は厳しく、描写はややもすると中傷性が高い。村山はドイツ時代に題材を取った多くの小説や戯曲で、自分自身を交錯的に織り交ぜながらも滞欧日本人としての永野の姿をきわめて辛辣に揶揄している。「自叙伝」では永野以外にも

一部の人名を伏せている(過誤的に掲載している箇所もある)が、「自序伝」では全般的に略号は用いられていない。

ただし、行為と回想の間が近い「自序伝」も10年余を経て執筆されており、齟齬や記憶違いは生じている。「自序伝」で土方与志と千田是也から訪問を受けて依頼されたとする「朝から夜中まで」(1924年、築地小劇場)の舞台装置について、この会合に先駆けて村山が土方に書簡を出し、自ら美術担当を志願したことが「自叙伝」で訂正されている。註7)一方、「自序伝」での村山は、「朝から夜中まで」の「日本最初の構成派の舞台のイニシアティブは私にはなく土方氏にある。私は氏のプランを造型的に具象化した」註8)こと、および「爛酔」の際にも土方から『『朝から夜中まで』が直線的、正方形的であったのとグッと趣きを変えて、曲線で、円で行きたい。註9)と具体的なプランを示されたことと述べ、村山にとっての舞台美術の代表作ともいべき装置が土方の構想に基づくものであったことを認めている。美術家としての村山知義の展開を追う過程で、工芸や演劇といった面からの検証は今後さらに細かく見ていくことが必要となろう。

「自伝」という村山の試みは、自ら収集した一次資料の転記・再録とその註釈、回想と修正の作業によって構成された、それ自体がスクラップブックのような膨大なコラージュを形成する。「自叙伝」第4巻の後半を占める村山の1932年の獄中書簡もまた、第29信までは「密室からの手紙」の名で1935-36年の『テアトロ』に7回連載(中断)で再録されたものである註10)。また、「自叙伝」4巻前半に再録された妻・籌子との書簡は1946年に『亡き妻の手紙』と題して桜井書店から出版されている。螺旋のように再録と回想を繰り返す村山知義の自叙伝は、短期間に大量の作品を生み出し、同時にそれらをモチーフとして、あるいはメディアそのものとして再編集し、新たな作品に組み込む彼の造形的・文学的方法論にも共通すると言えるだろうか。

最初の検挙時の獄中書簡(1930年11月21日発)で、村山は母・元子に宛てて次のように書いている。「自叙伝的な長篇を書く計画を立てているのですが、これは慎重に材料を集めて、充分考えて書きたいので、母様も心掛けて、隆叔父様にもうかがって、家系、三浦家、村山家、僕の出生前後のことからまず第一期として、大体、ドイツ行き迄のこと、何に依らず、書き留めておいて頂きたいのです。(中略)これは自叙伝とはいいいえ、むしろ1900年以後の文化史のようなものにしたいため、そのつもりで、何によらず、当時の古い事物なら役に立つのです。」註11)「私は『一九〇一—三〇』という文化史的自叙伝を企んでいる」註12)という同日発信の妻宛の書簡からも、村山が既に1930年の時点で自叙伝を企画していたことが伺える。

この翌年、1931年刊行の『プロレタリア美術のために』の序文で「私はこれ迄、美術に関して、「現在の芸術と未来の芸術」「カンヂンスキー」「構成派研究」という三種の全く誤った立場から書かれた本を出した。これらの抹殺すべき本ののち、私はここに此の本を贈る」註13)と述べてマヴォ・三科の時代に展開した自らの評論・造形運動を否定し、1940年の「自序伝」で「ドイツから帰って四五年の期間を振り返ることは、実に苦痛である。そのころの私の物の考え方、生活態度などが苦々しく、恥ずかしい。なるべく思い出さずにいたいだ。」註14)と記した村山知義の30年史とは、母の信仰によって帰依したキリスト教からダダイズムを経て共産主義に至る告

註7) 『演劇的自叙伝』2巻、249頁。

註8) 「演劇的自序傳(四)」『テアトロ』65号、1940年1月、31頁。

註9) 「演劇的自序傳(五)」『テアトロ』66号、1940年2月、14頁。

註10) 『テアトロ』第9号(1935年3月)、第10号(4月)、第12号(6月)、第13号(7月)、第14号(8月)、第15号(10月)、第19号(1936年2月)。このうち第8信から第20信までは「密室からの手紙」(三～五)にのみ掲載され、「自叙伝」には取められていない。

註11) 『演劇的自叙伝』4巻、東京芸術座、1977年、38-39頁。

註12) 前掲書、40頁。

註13) 美術史の概説に自らの美術遍歴を重ねて叙述した、村山の「美術的自叙伝」ともいべき論考「美術の通った道」(『新青年』1927年)では、村山は無産階級藝術理論の確立と実践とを美術の前途にある処女地として、稿を閉じている。

註14) 「演劇的自序傳(五)」11頁。

註4) 「演劇的自序傳(三)」『テアトロ』63号、1939年11月、7頁。

註5) 「演劇的自序傳(二)」『テアトロ』62号、1939年10月、7頁。

註6) 『演劇的自叙伝』1巻、東邦出版社、1974年、312頁。

解的な歷程を、客観的事実の等価値な集積としてはかるものであったのだろうか。アーカイヴとしての自己開示について、その理由を「批評家に、かかるが故に村山知義はいくらリアリストになろうとしても嘗てのダダイズムの思考形式や情操が基礎にあるために本物にはなれないのだ、というような非常にうがった批評をする材料を提供しない、ということになっても悪いし——」^{註15)}と語る村山の姿には屈折した決意が伺われる。

とはいえ、「客観的事実」にも今なお不明な点が多い。一例を挙げれば、村山から旧友の内田昇三に宛てた1923年7月18日付(19日消印)の葉書(世田谷美術館[内田昇三コレクション]蔵)に「十五日から三十日まで、鈴蘭で僕の第四回個展を開いている」と記載されているが、村山の自伝や作品集にこの個展に関する言及は認められない。資料に基づく歴史の構成は、資料のない歴史の抹消に至るのだろうか。

村山知義のアーカイヴを整理し、その「文化史的評伝」を改めて再考することは、日本の近代を考えるうえで、今後の大きな課題となるだろう。2012年の村山展が、その端緒となったことを願っている。



図4 村山知義《アウグスブルガー・シュトラーセ》
展示風景写真 1922年[推定]

なお、展覧会終了後にスクラップブックNo.33(1939年)に発見された紙焼き写真(図4)を掲載して紹介しておきたい。村山がベルリン滞在中に制作した絵画第一作とする《アウグスブルガー・シュトラーセ》の展示風景である。額下のキャプションに手書きと思しき書体で「MURAYAMA」の字が読み取れる。場所は不明だが、1922年3月にベルリンのノイマン画廊でルツェロ・ヴァザーリの主宰により開かれた「大未来派展」(会期不詳)あるいは同年9月18-30日にベルリンのトワルディー画廊で行った個展会場の可能性が高い貴重な資料である。今後、ドイツの画廊関係の記録から調査を進めていきたい。

註15) 同箇所。千田是也が、おかつば頭にドングリ帽子を被り「ダダ」や「意識的構成派」を標榜する村山に対し、「〈表現派〉かぶれの人道主義だった私」は、酒席などで村山に馬乗りになって「ダダはやめろ」と迫り、その後マルクス主義への村山の獲得を画策したと回想している。千田是也「村山知義と日本の新劇(インタビュー)」(『文化評論』1977年8月初出)および「tomを想う」(『コメディアン』1977年4月初出)、『千田是也演劇論集 第8巻 1975-1979年』未来社、1991年、88頁および382頁。

伊藤由美

2011年3月11日に発生した東日本大震災に際し、日本の多くの美術館により組織され、本館も所属する「全国美術館会議(以下全美と記す)」事務局は直ちに連絡本部を設置し、東日本の加盟館207館に対し被災状況に関する情報収集を行った。そして3月末に文化庁の呼びかけで組織された「被災文化財等救援委員会」の参加団体として、同委員会によるレスキュー活動と連携しながら、震災直後から、救援の要請のあった館の美術品救援活動を行った。

全美は地震発生後、被害があった加盟館に対しては、支援活動に関するアンケートを送付し、支援要請の有無や要望の内容を確認した。そして「大災害時における援助活動実施要綱」に基づき対策本部が設置され、情報収集や現地調査などを行い、支援要請があった被災館に対しては、救援・支援活動を行った。全美の分科組織であり、筆者が事務幹事を務めている保存研究部会としても、東北地方の美術館学芸員である部会員からもたらされる自館や近隣の施設の被災情報の取りまとめを行い、レスキュー資料リストの提供、被災作品の処置に対する問い合わせへの対応など、保存部会として関わられる内容に於いて、事務局の対策本部に必要な情報提供を行った。時々刻々情報が更新される状況のなか、通信は通常、部会員間の情報交換に使用しているメーリングリストのネットワークを利用し、更新される情報を関係者が同時に共有できるようにした。

まず最初に行った活動が、石巻文化センターの被災作品の救出であった。事務局は4月25日から現場に入り、第1グループとしての作業学芸員は26日から余震もまだ収まらない現場で、救済作品の撮影、搬送作品のリストを作成し、作品のひどい汚れ除去や、剥落防止の養生処置を行った。その後、作品は宮城県美術館に搬送され、館より提供を受けた敷地内の施設や、外の通路で応急処置作業を行った。この時点から第2グループに引き継がれ、汚れやカビ除去、乾燥の作業が約1か月間行われた。所蔵目録は津波で流出していたため、全美事務局が現場での撮影写真をもとに準備したリストを利用しながら作業とその記録を行った。まず簡単な撮影と状態調査をし、作業事項の記録、作業スナップの撮影をして記録とした。修復処置体制としては、各分野の専門の修復技術者が作業期間を通して現場にいるようにし、その指導の下、全国の美術館から派遣された学芸員が共に補助作業を行うようにした。両者とも作業全期間を通して、同じ人が続けることは不可能であるので、数日程度で交代しながら、常時数人体制で作業を行ったが、特に修技術者を集めるのは困難であった。作品処置作業以外にも現場には重要な作業が多く、未処置作品の仮置き場や作業場の環境整備、仮置き作品マップの作成など処置後の作品管理、記録簿の整理などは、それぞれ専門あるいはそれを行える学芸員が自発的に作業を進めた。作業場は美術館敷地内の車庫とその前の舗装された通路を使用した。素材としてデリケートな素描、日本画などの紙作品は車庫で行ったが前面のシャッターは解放された状態であった。絵画及

び立体作品は、車庫前の通路や脇の塀寄りで行った。天候は比較的良かったが、時には急な雨や風のために車庫内に退避する状況に見まわれた。約1か月の作業後、紙及び平面作品は全美事務局のある国立西洋美術館に、立体作品と一部の日本画は東北芸術工科大学に搬送され、いくつかの修復機関と協力しながらそれぞれの専門家が修復を行っている。本館でも、一部の作品用修復を行う予定である。

尚、石巻文化センターより救出された彫刻、日本画、油彩、素描、資料などは、231件であった。

その後、陸前高田市立博物館でのレスキュー活動が始まった。6月半ば現地調査に入った時にはすでに震災から三か月が経ち、気温も上がり始めて作品のカビの繁殖が著しかった。作品の数、大きさからも、救援活動の困難さが想像され、実際の作業遂行には多くの問題が立ちはだかった。石巻文化センターの被災作品救援事業の経験を踏まえ、再度、救援委員会と全国美術館会議、自治体の教育委員会などの組織と連携しながら、救援活動の計画と実行に移った。今回は、当初から、記録スタッフ、保存修復スタッフ、サポートスタッフと完全な分業化を図り、それぞれがその作業に専念できるように計画した。作品の損傷状況の重篤さから、予期せぬさまざまな問題にぶつかったが、全国から参加した学芸員や企業の協力を得ながら、まず7月11日から14日にかけて陸前高田市立博物館からの被災作品救出を行った。カビや汚れで汚染された作品を搬入し、燻蒸を行い、大型作品を含めた大量の作品を処置、さらに処置後の仮置きスペースも確保しなければならないという条件を備えた施設を盛岡市内で見つけることは難しかったが、運よく10年間未使用であった大きめの県の施設を利用できることができた。今回も全国から参加した学芸員や美術館職員や民間の修復技術者、美術関連技術者らとともに、被災作品の応急処置を行った。やはり一か月近い作業日であった。処置後は、岩手県立美術館に寄託作品として収蔵された。

尚、陸前高田市立博物館より救出された絵画、書、立体は336点であった。

筆者が本館の保存修復担当専門員として参加した現地でのレスキュー作業は、2件であった。美術館に勤務する保存修復技術者は非常に少なく、民間の修復家に参加を依頼するしかなかったが、レスキュー事業の日程に合わせて仕事の調整をお願いし、日当なしで参加をお願いすることは心苦しいものであった。作業者は1-2日重なるようにして、交代するシフトを組んだが、最終的には完全に人が入れ替わってゆくので、当初の修復方針を最後まで一貫させるためには、筆者は作業確認のため、頻繁に連絡を入れたり足を運ぶ必要があった。このような状況において、レスキュー活動は組織として計画的に運営され、適切な人材が確保されることが重要であると実感した。また、美術館に保存修復の専門家がいることも、重要なことであろうと感じた。

石巻文化センター収蔵作品レスキュー



図1. 石巻文化センターでのレスキュー活動
(撮影:寺内淳治氏)

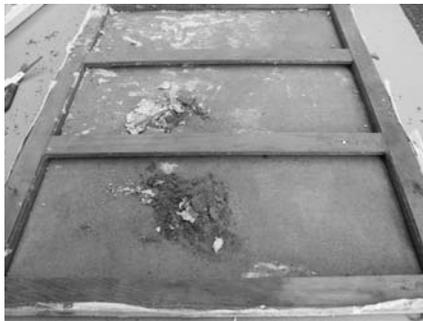


図2. 裏面に付着した砂やパルプ
(宮城県美術館にて)



図3. 裏面付着のパルプ除去作業
(宮城県美術館にて)



図4. 宮城県美術館での処置作業 右奥が車庫



図5. 宮城県美術館での処置作業

陸前高田市立博物館収蔵作品レスキュー



図6. 陸前高田市立博物館での被災作品梱包作業



図7. 盛岡市内の施設での処置作業



図8. 紙作品洗浄作業(盛岡市内の作業場にて)

調査研究・執筆等の発表

1) 当館開催展覧会に伴う調査研究・発表

展覧会図録への発表：7点15件(詳細は展覧会活動ページの各展図録内容を参照)
外部の媒体への発表：7媒体19件

2) 所蔵作品や館内の活動にかかわる調査研究・発表

当館の刊行物への発表：2媒体(年報、たいせつな風景)4件
外部の媒体への発表：1媒体1件

3) その他の調査研究・発表

外部の媒体への発表：4媒体5件

外部資金の活用

1) 外部資金を活用した調査研究

科学研究費補助金(独立行政法人 日本学術振興会)
「瀧口修造におけるコラボレーションと集団的想像力」研究分担者(朝木由香)
「新出と既知の高橋由一作《西周像》について」研究代表者(長門佐季)、研究分担者(伊藤由美)
公益財団法人ポーラ美術振興財団
「新出と既知の高橋由一作《西周像》に関する修復と比較分析調査」代表研究者(伊藤由美)

2) 外部資金を活用した展覧会・事業

協賛金・助成
「視覚の実験室 モホイ=ナジ/イン・モーショ」展(株式会社資生堂、郵便事業株式会社、ミサワホーム、公益財団法人 野村財団)
「シャルロット・ベリアンと日本」展関係事業国際シンポジウム
(公益信託タカシマヤ文化基金、財団法人吉野石膏美術振興財団、公益財団法人ポーラ美術振興財団)
「ペンシャーン クロスメディア・アーティスト」展関係事業国際シンポジウム(公益財団法人ポーラ美術振興財団)
「すべての僕が沸騰する 村山知義の宇宙」展(公益信託タカシマヤ文化基金、公益財団法人 野村財団)
「生誕100年 藤牧義夫展 モダン都市の光と影」(芸術文化振興基金)

講師派遣・外部委員等就任

1) 講演会講師等派遣(当館主催の学校連携プログラム以外の講師派遣)

実施日	内容	対象	会場	参加者数	主催/共催	実施者
2011年5月13日	五教育事務所指導課会議における実務研修	教員	葉山町教育研究所	36	神奈川県教育委員会	松尾子水樹
6月15日	イメージ豊かに自分の思いを表現していく子を目指して「アートカードを使った学習」	小学校教員	座間市立東原小学校	32	座間市小学校教育研究会	松尾子水樹
6月22日	美術スクールセミナー 講師	中学校2年生	北鎌倉女子学園中学校	59	北鎌倉女子学園中学校	松尾子水樹
6月25日	スキルアップ講座(図画工作・美術) 講師	教員	横須賀市教育研究所	9	横須賀市教育委員会	松尾子水樹
7月26日	「教職員のための鑑賞教室」 講師	小学校教員	神奈川県立近代美術館 葉山	36	横浜市立中和田小学校	松尾子水樹
8月2日	逗子市・葉山町教育研究所 教員研修講座 講師	小・中学校教員	神奈川県立近代美術館 葉山	19	逗子市・葉山町教育委員会	松尾子水樹・鈴木智香子
8月23日	稲城市教育研究会(図工・美術部会)夏季教員研修	小・中学校教員	神奈川県立近代美術館 葉山	16	稲城市教育研究会	松尾子水樹・鈴木智香子
8月24日	神奈川県立総合教育センター研修講座 講師	中・高・特別支援校教員	神奈川県立近代美術館 葉山	13	神奈川県教育委員会	松尾子水樹・鈴木智香子
8月26日	藤沢市小学校教育研究会図画工作部会研修 講師	小学校教員	神奈川県立近代美術館 葉山	53	藤沢市小学校教育研究会	松尾子水樹・鈴木智香子
1月18日	葉山町教育研究会図画工作・美術部会研修 講師	小・中学校教員	葉山町立一色小学校	5	葉山町教育委員会	松尾子水樹
1月19日	宝箱実習授業+鎌倉市教委授業作り実践研修会 講師	4年生及び小・中学校教員	鎌倉市立第二小学校	66	鎌倉市教育委員会	松尾子水樹・鈴木智香子
1月25日	「美術鑑賞授業」(宝箱実習他) 講師	6年生4クラス	逗子市立逗子小学校	144	逗子市立逗子小学校	松尾子水樹・鈴木智香子
2月7日	「Museum Box宝箱」体験研修 講師	地域活動ホーム 径 スタッフ	さかえ次世代交流ステーション	5	地域活動ホーム 径	松尾子水樹・鈴木智香子

2) 外部委員等就任

職員名	内 容	
	団体名	職 名
水沢 勉	群馬県立館林美術館	群馬県立館林美術館作品収集委員会委員
	平塚市美術館	平塚市美術品選定評価委員会委員
	公益財団法人ポーラ美術振興財団	助成事業選考委員
	福岡市	福岡アジア美術館美術資料収集審査員
	熊本市	熊本市美術品等収集審査委員会委員
	東京国立近代美術館	東京国立近代美術館評議委員会委員
	国立民族学博物館	国立民族学博物館文化資源共同研究員
	岡山県立美術館	岡山県立美術館美術品評価委員会委員
	鎌倉市	鎌倉市教育委員会美術工芸作品収集選定委員会委員
	神奈川県美術展委員会	神奈川県美術展表彰式 授与者
橋 秀文	湯河原町	湯河原町美術品等選定委員会委員
	神奈川県民共済生活協同組合	第18回夏休みに描くクレヨン画コンクール審査員
	神奈川県立図書館	平成23年度県民公開講座講師
	山口蓬春記念館	山口蓬春記念館美術品評価委員
伊藤 由美	全国美術館会議	全国美術館会議「東日本大震災救援・支援対策本部」委員
		平成23年度全国美術館会議研究部会幹事
		文化財レスキュー事業（兵庫県立美術館）
		文化財レスキュー事業（宮城県美術館）
		文化財レスキュー事業（岩手県立美術館）
	文化財レスキュー事業（陸前高田市立博物館）	
	東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会	被災文化財等救援事業（盛岡市）
	一般社団法人文化財保存修復学会	文化財保存修復学会第34回大会実行委員
岩手県立美術館	平成23年度教育普及事業講演会講師	
是枝 開	独立行政法人国際交流基金	CCA キュレーター・ミーティング 2011 参加キュレーター
	東京芸術大学	非常勤講師
李 美那	神奈川県社会福祉協議会	かながわシニア美術展審査員
	多摩美術大学	多摩美術大学大学院博士後期課程学位審査委員
	女子美術大学	「女子美スタイル 2011－再生の光をつむいで」審査委員
長門 佐季	東北芸術工科大学	特別講師
榎山 昌夫	茅ヶ崎市	茅ヶ崎市美術品審査委員会委員
朝木 由香	国立民族学博物館	国立民族学博物館文化資源共同研究員

運営・管理報告

概況

(1) 沿革

昭和26年11月17日	神奈川県立近代美術館として開館
昭和41年 3月31日	収蔵庫及び常設展示室並びに附属棟を増設
昭和44年 3月31日	学芸員室を増設
昭和49年 8月 1日	神奈川県立近代美術館組織規則(昭和49年神奈川県教育委員会規則第9号)により、管理課、学芸課の2課を置く。
昭和59年 7月28日	別館を開館
平成 3年10月30日	本館の改修工事完了
平成13年 7月 5日	PFI事業契約の締結
平成15年 6月 1日	神奈川県立近代美術館組織規則の改正により、管理課、企画課、普及課の3課体制となる。
平成15年10月11日	葉山館を開館

(2) 所掌事務

県民の近代美術に対する知識及び教養の向上を図るため、近代美術に関する資料の収集、保管及び展示並びにこれに関する調査研究、情報提供等を実施する。

(3) 施設の状況

ア 土地

県有	(葉山館分)	面積	15,034.8㎡
		※生涯学習課管理	
	(鎌倉別館分)	面積	4,937.0㎡
借用	(鎌倉館分)	面積	4,243.1㎡
		(有償分)	1,547.2㎡
		(無償分)	2,695.8㎡

イ 建物

		面積	4,034.0㎡
県有	(鎌倉館分)		2,435.0㎡
	(鎌倉別館分)		1,599.0㎡

PFI事業の概要については、2007年度運営・管理報告(年報2007年度)p.63を参照

収入・支出の状況

収入	(千円)	
科目	金額	内訳
行政財産使用料	272	鎌倉館喫茶建物使用料等
使用料	54,980	観覧料収入
芸術文化振興基金助成金	100	教育普及事業委託金
立替収入	1,443	レストラン他高熱水費
雑入	17,888	図録販売等
教育受講料収入	161	県立機関活用講座
計	74,844	

支出(人件費含まず)	(千円)	
科目	金額	内訳
維持運営費	62,213	維持管理
美術館事業費	92,247	展覧会開催費
調査研究事業費	251	調査研究謝礼等
教育普及事業費	2,562	教育普及事業
美術作品整備事業費	6,106	美術作品購入・修復
特定事業費	461,825	維持管理業務(PFI)
県立機関活用講座開催事業費	278	
計	625,481	

(趣旨)

第1条 この条例は、神奈川県立近代美術館(以下「美術館」という。)の設置、管理等に関し必要な事項を定めるものとする。

(設置)

第2条 近代美術に関する資料の収集、保管及び展示並びにこれに関する調査研究、情報提供等を行い、県民の近代美術に対する知識及び教養の向上を図るため、美術館を三浦郡葉山町一色2,208番地の1に設置する。

(職員)

第3条 美術館に、事務職員、技術職員その他の所要の職員を置く。

(観覧料の納付)

第4条 美術館に展示している美術館資料を観覧しようとする者は、別表に定める額の観覧料を納めなければならない。ただし、公開の施設に展示している美術館資料の観覧については、この限りでない。

2 前項の規定にかかわらず、特別な企画の展覧会を開催する場合の観覧料は、神奈川県教育委員会(以下「教育委員会」という。)がその都度別に定めることができる。

3 前2項の観覧料は、前納とする。

(観覧料の減免)

第5条 前条第1項本文及び第2項の規定にかかわらず、教育委員会は、次の各号のいずれかに該当する者については、観覧料を減免することができる。

(1) 教育委員会が開催する行事に参加する者

(2) 教育課程に基づく教育活動として入館する高校生(学校教育法(昭和22年法律第26号。別表備考において「法」という。)第1条に規定する高等学校及び中等教育学校の後期課程並びにこれらに準ずる教育施設に在学する者をいう。別表において同じ。)並びに児童及び生徒の引率者

(3) その他教育委員会が適当と認めた者

(観覧料の不還付)

第6条 既に納付された観覧料は、還付しない。ただし、教育委員会が災害その他特別の事情により還付するのを適当と認めたときは、この限りでない。

(資料の特別利用)

第7条 美術館資料を学術上の研究のため特に利用しようとする者は、教育委員会の承認を受けなければならない。

(利用の制限)

第8条 教育委員会は、美術館の利用者が次の各号のいずれかに該当する場合には、その利用を制限することができる。

(1) この条例又はこの条例に基づく規則に違反したとき。

(2) 他の利用者に著しく迷惑をかけるおそれがあると認めるとき。

(3) 施設、美術館資料等を損傷するおそれがあると認めるとき。

(4) その他教育委員会が必要と認めるとき。

(委任)

第9条 この条例に定めるもののほか、美術館の管理等に関し必要な事項は、教育委員会規則で定める。

附 則

1 この条例は、昭和42年4月1日から施行する。

2 神奈川県立近代美術館条例(昭和26年神奈川県条例第46号)は、廃止する。

附 則(昭和50年12月27日条例第58号抄)

1 この条例は、昭和51年4月1日から施行する。(後略)

附 則(昭和55年12月23日条例第60号抄)

1 この条例は、昭和56年4月1日から施行する。(後略)

附 則(昭和58年12月21日条例第41号抄)

(施行期日)

1 この条例は、昭和59年1月1日から施行する。ただし、(中略)第8条の規定は公布の日から起算して8月を超えない範囲内で神奈川県教育委員会規則で定める日から施行する。

附 則(平成4年12月22日条例第62号)

(施行期日)

1 この条例は、平成5年1月1日から施行する。ただし、第2条及び第5条から第9条までの規定は、同年4月1日から施行する。

(経過措置)

2 第1条、第3条、第4条及び第10条から第12条までの規定の施行の際現に申込みを受理しているものに係る神奈川県立音楽堂、神奈川県立相模湖漕艇場、神奈川県立体育センター、神奈川県立県央地区体育センター、神奈川県立西湘地区体育センター、神奈川県立武道館、神奈川県立スポーツ会館若しくは神奈川県立相模原球場(以下「神奈川県立音楽堂等」という。)の利用又は平成5年1月1日から同年3月31日までの間の神奈川県立音楽堂等の利用(相模湖漕艇場の艇庫の利用については、平成5年1月1日から同年3月31日までの間にその利用を開始し、かつ、その引き続き利用期間が平成5年4月1日以降にまたがる場合の当該平成5年4月1日以降の期間における利用を含む。)に係る使用料については、これらの規定に規定する各条例のこれらの規定による改正後の規定にかかわらず、なお従前の例による。

附 則(平成13年3月27日条例第22号)

この条例は、平成13年4月1日から施行する。

附 則(平成15年3月20日条例第43号)

この条例は、公布の日から起算して6月を超えない範囲内において教育委員会規則で定める日から施行する。

(平成15年5月教育委員会規則第10号で、同15年6月1日から施行)

附 則(平成19年1月30日条例第3号)

この条例は、平成19年4月1日から施行する。

附 則(平成20年1月25日条例第1号)

この条例は、公布の日から施行する。

附 則(平成21年3月27日条例第25号)

この条例は、平成21年7月1日から施行する。

別表(第4条関係)

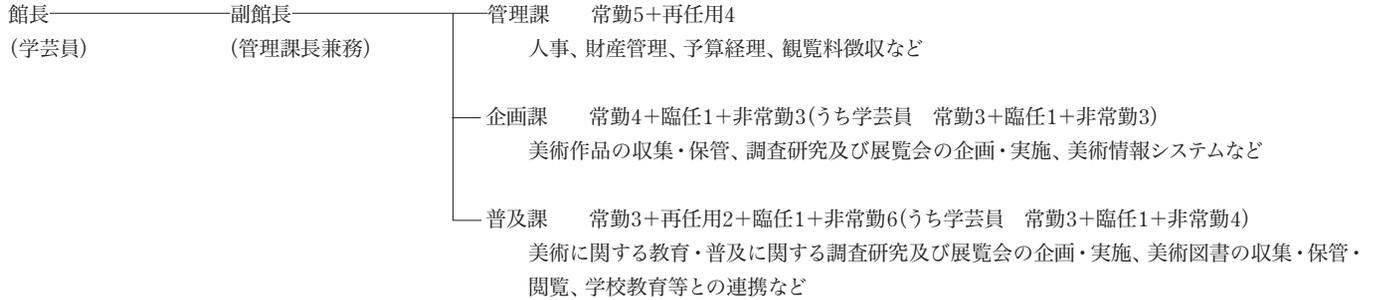
区 分	個 人	20人以上の団体
20歳以上65歳未満の者(学生及び高校生を除く。)	1人につき 250円	1人につき 150円
20歳未満の者(高校生を除く。) 学生(65歳以上の者を除く。)	同 150円	同 100円
65歳以上の者 高校生	同 100円	同 100円

備考 1 学生とは、法第1条に規定する大学及び高等専門学校、法第124条に規定する専修学校並びに法第134条第1項に規定する各種学校に在学する者をいう。

2 学齢に達しない者並びに法第1条に規定する小学校、中学校、中等教育学校の前期課程及び特別支援学校並びにこれらに準ずる教育施設に在学する者は、無料とする。

組織

葉山館の整備による組織の改編を行うため、神奈川県立近代美術館組織規則を改正(平成15年6月1日施行)し、従来の管理課・学芸課の2課体制から、管理課・企画課・普及課の3課体制となった。平成23年6月1日現在の職員配置状況は次のとおり。



職員数合計 31人

常勤14人(うち学芸員7人)、再任用6人、臨任2人(うち学芸員2人)、非常勤9人(うち学芸員7人)

施設別配置状況

葉山館 22人(常勤10人(うち学芸員5人)、再任用4人、臨任2人(うち学芸員2人)、非常勤6人(うち学芸員4人))
鎌倉館 9人(常勤4人(うち学芸員2人)、再任用2人、非常勤3人(うち学芸員3人))

職員一覧

館長 水沢 勉

副館長 巴 靖章(6月1日から)

管理課	課長	橋本 千晴(5月31日まで)	普及課	課長(兼)	橋 秀文(6月1日から)
	課長(兼)	巴 靖章(6月1日から)		主任学芸員	是枝 開
	副主幹	會津 勉(5月31日まで)		主任学芸員	榎山 昌夫
	副主幹	高麗 克美(5月31日まで)		学芸員	三本松倫代
	副主幹	中田 馨(6月1日から)		臨時学芸員	土居 由美
	副主幹	杉本 邦夫		非常勤学芸員	山内 舞子
	副主幹	田中 博(6月1日から)		非常勤学芸員	松尾子水樹
	副主幹	山口 陽弘		非常勤学芸員	鈴木智香子
	主事	江成 真実子		非常勤学芸員	長島 彩音
	管理業務専門員	大貫 一郎			
	管理業務専門員	小神 敏行		[美術図書室]	
	管理業務専門員	薄井 健一		図書業務主任専門員	市川 雄基
	管理業務専門員	守武 治比古(6月1日から11月30日まで)		図書業務専門員	野田 容子
	非常勤事務補助員	北口 正子(5月31日まで、12月2日から)		非常勤司書	藤代 知子
				非常勤司書	高橋麻衣子
企画課	課長	橋 秀文(6月1日から)			
	専門研究員	伊藤 由美			
	専門学芸員	橋 秀文(5月31日まで)			
	主任学芸員	李 美那			
	主任学芸員	長門 佐季			
	臨時学芸員	朝木 由香			
	非常勤学芸員	西澤 晴美			
	非常勤学芸員	新井 陽子			
	非常勤学芸員	辻岡 裕明			

年報 2011(平成23)年度

発行日：2013年3月22日

編集・発行：神奈川県立近代美術館

葉山 〒240-0111 三浦郡葉山町一色2208-1 電話 046-875-2800

鎌倉 〒248-0005 鎌倉市雪ノ下2-1-53 電話 0467-22-5000

鎌倉別館 〒248-0005 鎌倉市雪ノ下2-8-1 電話 0467-22-7718

<http://www.moma.pref.kanagawa.jp>

制作：印象社

ANNUAL REPORT 2011

Edited and published by The Museum of Modern Art, Kamakura & Hayama, 2013

Produced by Inshosha

© The Museum of Modern Art, Kamakura & Hayama, 2013

